329
159

始

コ1278　329-159

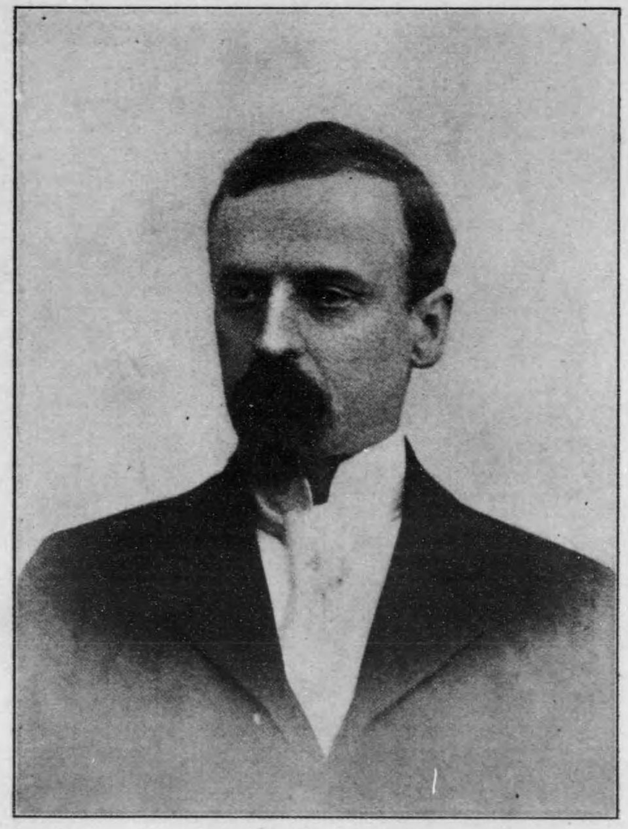
復活乃武士

前篇

シエンキエ井ツチ作

松本雲舟譯

大正
1.12.27.



シエンキエヰツチ

序

シエンキエ井ツチは予の恩人である。顧みれば五年前その「クオ・ヴヂス」の拙譯を出して、想ひ設けぬ世上の歡迎を受けた。予は文士でも何でもないが、兎に角世間が予の此世に生存してゐることを認識したのは、あの拙譯からである。世間の認識などはどうでも善いが、それから今日に至るまで文筆で飯の喰つてゆけることをいかにも有難く想つてゐる。予の生存慾が文筆で滿足されるようになつたのは、波蘭文豪のお影である。

今春植竹喜四郎君から出版物を依頼されたので、直ちに予の眼はこの恩人の作物に向けられた。植竹君は出版界には初陣である。先づ第一に面白さうな物を出さねばならぬ。これなら植竹君の要求に應ずることが出來るだらうと想つて、選出したのが、この譯書の原書「パン・ミカエル」である。「パン・ミカエル」は「火と劍とを以て」及び「洪水」と共に波蘭文豪の有名なる三段物(トリロヂイ)で、然も

その最後の卷である。予がこれを選んだのは三段物中「パン・ミカエル」が一番偉大なる作と想ふからである。又その全篇を通じてミカエルといふ一主人公の傳記なので、他の二篇ほど事件が錯綜してゐないから、波蘭の歴史を知らぬ日本の讀者にも、大變解り易いからである。それから又三篇中比較的短い事は、讀者にも出版者にも譯者にも都合の好い次第である。

予の筆は「クオ・ヴヂス」の時以來進歩したような氣がする。「パン・ミカエル」を譯しながら、若し閑が出來たら、「クオ・ヴヂス」を譯し直したいといふ想が拂へども去り難きほど予の胸を襲ふのであつた。「クオ・ヴヂス」を全然新しい譯書にして世に遺せば、その文學的價値は兎にあれ、予の生存の意義が幾分か達せられるような心持がする。近き將來に於てこの想の遂げられんことは予の切なる待望である。

近頃日本では乃木大將の壯擧あつて以來、殉死の武士が盛んに讃歎されてゐる。それは大變美はしい事に相違ない。併し日本人には殉死は解つても、復活は解り悪くさうである。パン・ミカエルは惜しからぬ生命を長らへて、尙一層國家のため、人道の爲めに戰つた。これ予が本書に題して、「復活の武士」といふ所以である。

大正元年十一月

雲舟生

緒言

匈牙利戰爭が終つてから、アンドレイ・クミタとアレクサンドラ・ピレヴイヒとの結婚式が擧げられた。クミタと同樣に民政國に功勞ある有名の騎士で、ラウダ中隊の大佐ミカエル・ヴオロジヨフスキイもそれと同時にアンナ・ポルゾボガチ・クラシエンスキイと結婚する筈であつた。

けれどもこの結婚は種々な障礙のために延期された。アンナは皇女グリセルダ・ヴイシンエヴエツキイの養女であるので、その養母の許可を受けない內は、結婚の承諾をしなかつた。それ故ミカエルは道中物騷な時なので、その約婚の娘をヴオドクチイに留めて、自分獨り皇女の承諾と祝福を受けるためにザモストに赴いた。

けれども惠みの星は彼を導かなかつた。皇女はザモストに居らず、その頃息子の敎育のためにヴイエンナの朝廷に往つてゐた。意地の强い武士は多くの時を費しゐて、ヴイエンナまで赴いた。萬事好都合になつて彼は充分な希望を懷いて家路に向つた。

歸國して見ると國家益々多事である。同盟軍は組織された。ウクラインでは暴徒が繼續した。東境には火災が絕なかつた。國境を防ぐために新しき軍勢すら徵集された。ミカエルはワアサウに到着する前に、ルスの副總督の發した指令書を落手した。國家のためには私事を捨てねばならぬと考へて、

彼は直ちに結婚する計畫を斷念して、ウクラインに向つた。數年その地方に野營して、戰爭と言ふべからざる困難勞苦の間に生活して、待ち戀れた婦人に手紙を送る暇さへないほどであつた。

續いて彼はクリミアに派遣された。やがてリウボミルスキイの不幸なる內亂が起つた。ヴオロジョフスキイは國王の味方となつて、この叛亂者、破廉耻な人物に對して戰つた。やがてソビエスキイと共に二度ウクラインに進軍した。

斯る戰功から彼の名聲は益々高く、何れの側よりも民政國第一流の軍人と認められた。けれども彼自身は心配と嘆息と戀慕の情を以てその數年を送つたのである。遂に一六六八年彼は城守の命令で休息を與へられることになつた。その年の初め、愛する婦人の許へ往つて、ヴオドクチイから彼女を伴つて、クラコウへと出立した。

二人がクラコウへ旅したのは、皇女グリセルダが當時皇帝の領地へ歸つてゐて、そこで結婚するようにミカエルを招待したからである。皇女は自ら花嫁のために母親の役を勤めるつもりであつた。

クミタ夫婦はその頃家に居つて、ミカエルからの消息があらうとも思はず、わが家に來る新しきお客樣のことばかり考へてゐた。攝理はその時まで此の夫婦に子供を與へなかつた。然るに今やその久しき願望は達せられて、可愛ゆき者は將に來らんとしてゐる。

その年は非常に豐饒であつた。穀倉に入り切らぬほど穀物は能く熟つた。全國は縱橫に稻叢で蔽はれた。戰爭で荒れた近隣には若き松の列樹が一春の內に二年ぶりも生長した。森には野禽が澤山居るし、蕈も澤山生えた。恰かも地に住める萬物は皆豐年の恩澤に浴するやうに見えた。それ故ミカエルの友人達はこれをその結婚の吉兆と想つたのに、運命は全くその反對であつた。

復活の武士

松本雲舟譯

上篇

一

美はしき秋の日に、アンドレイ・クミタは木蔭の園亭に坐つて、食後の糖蜜水を飲みながら、野生の蛇麻草の生ひ繁つた格子墻から絶間なく妻を眺めた。クミタ夫人は園亭の前の綺麗に掃除した路を歩いてゐる。夫人は背のすらりとした女で、髪の光澤した、宛然天使のやうな淑かな面をしてゐる。妊娠なので、徐々と慎しやかに歩みを運んだ。

アンドレイは妻可愛ゆしと眺めた。彼の眼は主人の後を慕ふ犬のやうに、妻の一歩〳〵を追ひながら、始終莞爾して、髭の先を捻つた。こんな時に彼の顏の表情はいかにも愉快でたまらなさうである。本來彼は快活な男で、獨身時代には惡戯ばかりしてゐたのである。

庭は靜かである。折々熟しすぎた果實が地に落つる音と蟲のぶん〳〵いふ聲がする。天氣はいかにも快暢である。今や九月の初めで、暑い盛りは通り越したけれども、太陽は未だ金色の光線を豐に散ずるのである。赤くなつた林檎は日光を受けて青葉の中できら〳〵して、梢を隱すほど鈴なりになつてゐる。李樹の枝は灰色の皮をした果實の重さで垂れ下つてゐる。

風が少しあると見えて木から木に懸る蜘蛛の巣は搖れてゐる。併し樹の葉が動くほどではない。

こんな靜かな天氣だから、アンドレイは嬉しくつてたまらん。その顏は見る〳〵輝くのである。

て彼は糖蜜水を手にして、妻を呼んだ。

「オレンカ、茲へお出で。話したい事があります」

「お伺ひしても心配になりません事ですの」

「それはさうさ。一寸耳を貸してくれ」

恁う言つてオレンカの腰のあたりを捕へて、光澤した髪にその髭を擦り寄せて、囁いた。

「男の兒なら、ミカエルにしよう」

オレンカは尠し赤くなつた顏を反けて、

「でも、ヘラクリウスに反對しないとお約束なすつたでせう」

「ミカエルにすれば、ヴオロジョフスキイを尊敬することになるぢやないか」

「でも、第一に私のお祖父さまを記念してあげないでは」

「それあ、私の恩人だもの！　お祖父さんをな。尤もだ。ミカエルはこの次にするか。さうしようかな」

そこでオレンカは起ち上つて、アンドレイの腕から身を振りほどかうとしたが、彼はいよ〳〵妻を胸に抱き占めて、眼と口に接吻しながら、恁う言ふのであつた。

「大切の大切の可愛い奴さ」

その時恰度一人の少年が徑の端に現はれて、園亭の方へ急ぎ足で驅けて來るので、夫婦の對話は途切れた。

「何だ？」とアンドレイは妻を放して問ねた。

「カールラムブ殿が御出でになつて、客間でお待ちです」

「いや、此方へお出でた」とアンドレイは向ふからやつて來る人を見つけて、叫んだ。「あれ、髭が白くなつた。やあ、ようこそ。これはようこそ！」

彼は驅け出して、腕を擴げてカールラムブを迎へた。けれどもカールラムブは先づ第一に、往時キエイダンの朝庭で見たことのあるオレンカに低く辭儀をして、それから蓬々とした髭に彼女の手を押しつけた。そしてアンドレイの腕に身を投げかけて、その肩に顏をのせて啜泣きをした。

「全體どうしたですか」と主人は驚いて叫んだ。

「神は一人に幸福を與へて、他の一人からそれを取去られた」とカールラムプが言つた。「悲しい譯を話すことの出來るのは貴君だけだ」

彼はオレンカを一寸見やつた。オレンカは自分の居る前で話したくないのだと悟つて、良人に言つた。「お二人に糖蜜水を持つて來させませう。暫く御免を被むつて」

アンドレイはカールラムプを園亭へ導いた。そして腰掛に坐らせて、問ねた。

「どういふ事ですか。私がお役に立つことですか。これでもザヴイシヤ（著述家政治家として有名なる十七世紀の波蘭の貴族）のつもりでゐて下さい」

「私の身に出來たことぢやない」と老軍人が言つた。「この手とこの軍刀を動かすことの出來る內は、他人に頼る必要はない。だがな、我々の友達で民政國の最も偉い武士が激く苦しんでゐるのぢや。息の根がまだあるかと思ふほどな」

「えい！　ヴオロジョフスキイに何事かあつたのですか」

「さうです」とカールラムプは涙を流して、「アンナ・ポルゾボガチ嬢がこの世を逝つたので！」

「死んだ！」とクミタは兩手で頭を抑へて叫んだ。

「槍で衝れた鳥のやうに」

暫く寂然する。時々林檎がぽたりと重く地に落つるのと、カールラムプが涙を制へやうとして啜泣くほか、何の音もしない。アンドレイは兩手を抂げて、頭を振つて、繰返して恁う言つた。

「何んといふ事だ。何んといふ事だ。何といふ事だ」

「私の涙も不思議でござるまい」とやがてカールラムプが言つた。「これを聽いただけでも、貴君がそれほど悲しがりなさるに、私はその大變苦しがつてゐるのを現に見たのぢやもの」

そこへ前の少年が水甕と洋盃を二個載せた盆を持つて來た。アンドレイの妻は二人の內談を氣にしながら、その後に隨いて來た。良人の顏を見るといかにも苦しさうなので、直ぐに恁う言つた。

「どんな御消息？　お聽せ下さい。出來るだけお慰め致しますわ。さもなければ御一緒に泣きますわ。御相談相手にもなりますわ」

「いくらお前でもどうしやうもない」とアンドレイが言つた。「悲しい事はお前の身體に毒だから」

「私、どんな悲しい事でも耐へますよ。不安心でゐるのは尙毒よ」

「アヌシヤが亡なつたのだ」とクミタが言つた。

オレンカは眞蒼になつて、腰掛にぱたりと打伏した。クミタは氣絕したのかと想つた。けれどもオレンカはこの突然な報知に吃驚するよりも、その悲しみに逸早く胸を痛めて、涙を流した。二人の武士は貰ひ泣きをした。

「オレンカ」とアンドレイはやがて妻の思想を他へ向けやうとして、「お前、あの女が天國へ行つたと信ずるかね」

「私、あの女よりも、あの女を失したミカエル様の方が御氣の毒ですわ。あの女は天國へ行つて確に幸福でせうとも。私もあやかりたいほどですわ。大變善い處女で、氣立が善つて正直でした。あゝ、アヌルカさん、あゝ、愛らしいアヌルカさん！」（アンナといふ名を親しげにアヌルカ、アヌラ、アヌシアと呼ぶ）

「私はその死際を見ました」とカールラムプが言つた。「あれより立派な覺悟は誰にも出來ません」

寂然する。悲哀の鋭さは涙と共に薄らいだ。聽てクミタが言つた。

「どうしてそんな事になりましたか、話していたゞきませう。まあ、糖蜜水でもお飲み下さい。そんな悲しい話をするには氣を落つけないといけません」

「有難う」とカールラムプが言つた。「飲みながら、お話ししませう。私はもうこんなに年を老つたから、故郷の田地でも耕さうと想つて、チエンストホヴから歸らうとしてゐました。戰爭ももう澤山でさ。若い時から髭の白くなるまで戰つたですからな。郷里へ歸つて起臥出來ぬやうだつたら、中隊附にでもならうかと想つてな・・・・」

「懐しいアヌルカさん！」とクミタ夫人が泣きながら、遮つた。「貴女がなければ、私、どうなりませう。貴女は私の隱れ家、保護者でしたのに。あゝ、あの愛らしいアヌルカさん！」

これを聽いて、カールラムプはまた咽び返つた。けれどもクミタが、「何處でミカエル殿にお遇ひでしたか」と問ねたので、さう長く泣いて居られなかつた。

「チエンストホヴにミカエル殿とアヌルカとが宿つてゐましてな。旅行を終つて、そこの神祠に參詣する所でした。ミカエル殿は其處からクラコウへ行つて皇女グリセルダ様にお目にかゝるつもりだと言ひました。そのお許可を受けない中は、アヌシャが結婚せぬといふのでしてな。アヌシャはその時大變元氣で、ミカエル殿も鳥のやうに歡んでました。『これは私の功勞に對する神の御褒美だ』なんて言つて、大自慢でさあ。私に戯弄つたりして、お目出度わけでしたよ。御承知の通り、私は一時あの男とアヌシャを競爭して、決鬪までしやうとしたことがありますでな。然るにあゝ、そのアヌシャは今何處に居るだらう！」

カールラムプはまた泣き出した。クミタはまたその泣くのを邪魔をして、「元氣だつた者が、どうしてさう、突然病氣になつたんですか」

「いかにも突然でした。良人と一緒に、其頃チエンストホヴに滯在してゐたマルチン・ザモイスカ夫人の所に宿つてゐたのでさあ。ミカエル殿はあの女と朝から晩まで一緒にゐましたつけ。そして道中の長引くのに弱つてました。クラコウまで往くのに滿一年かゝりさうだと言つてました。途中で種んな人に引留められるのでな。それも不思議はない。ミカエル殿のやうな軍人は誰でも歡んで招待しま

すからな。捕まへたら、離しませんわい。私をアヌシャに引合せて、横戀慕でもしやうものなら、斬りさいなみますぞなんて笑ひながら脅嚇ましたつけ。實際あの女も他へは見向きもしないんで。時々私は變な氣になりましたよ。私のやうな老人は壁に打つけた釘みたいですからな。何の事もないさ。ある晩ミカエル殿は大變狼狽へて私の所へ駆けて來ましてな。『醫者がないだらうか』と言ふから、『どうしたのだ』といふと、『彼女が惡い。見さかへがなくなつた』と言ひまさあ。『何時惡くなつた』と問ねると、『ザモイスカ夫人から今しがた知らせがあつた』との返事。『夜だもの、醫者を何處から連れて來やう。茲にはお寺のほか何にもない。おまけに人家よりも荒廢てゐる。』それでも漸く私は外科醫を見つけ出した。來るのが嫌だといつたが、刀で脅かして連れて來た。所が外科醫よりか坊さんの方が必要でした。歸つて見るとあの女の寢床の側には、有難さうな坊さんが來てゐて、御祈禱で正氣にしやうとしてゐましたつけ。それでも聖餐を受けることが出來るやうになつて、ミカエル殿と痛ましい永の別をしましたよ。翌日の午後には、どうも仕方がなくなつた。外科醫は誰か、魔術でも使つてゐるのぢやないかしらと言つた。そんな事があるものか。チエンストホワでは魔術の効能がないからな。所でミカエル殿はどうしたと思ひなさる。彼は何と言ひましたか。主耶蘇は氣にかけなされはしまい。斷腸のあまり言つた事だから。(カールラムプは一段聲を低めて)彼は氣違のやうになつて、神を呪ひましたよ」

「え、神を呪つた」とクミタが囁いた。

「彼はあの女の亡骸の側から、控室に驅けこんで、控室から庭に驅け出して、醉拂ひのやうに蹣跚して、兩手を擧げて、恐ろしい聲で泣き出しましたよ。『これが私の手傷の御褒美か、私の骨折、私の血、私の愛國の御褒美か』と言つたり、『私は一匹の小羊を持つてゐた。その小羊を、あゝ主よ、爾は私から奪つた』と言つたり、『傲然地上を歩む武人を叩き倒すのは、神の御手柄でせう。だが、猫でも鷹でも鳶でも罪のない鴿は殺せますからな。そして……』

「それはまあ」とクミタ夫人が叫んだ。「もう仰やいますな。この家に災難が來るといけませんから」

カールラムプは十字を切つて、語を次いだ。「可哀想にあの男は凡てその骨折の御褒美はこれだと思つたのでさあ。あゝ、神は彼の爲た事を善く御存じだ。併しそれは人間の道理では解らない。人間の正義では測ることが出來ないのだ。神を呪つてから、直ぐ彼は嚴乎として、地に倒れましたよ。坊さんはその側で惡魔降伏の經文を讀みましたつけ。神を呪ふと、兎角惡靈が心に入り込み易いからな」

「直き正氣になりましたか」

「死んだやうに一時間も臥てゐました。それから正氣になつて自分の部屋へ入りましたが、誰に遇ふのもいやがりましてな。葬式の時に、『ミカエル殿、心を神に向けなさい』と言つてやつたが、何とも返事をしませんや。どうもその側を離れられないやうな氣がするので、それから私は、三日チエンス

トホヴに逗留してゐましたが、その部屋の戸を幾ら叩いても開けません。誰にも遇ひたくないんでせう。私はどうしたものだらうと、考へましたよ。もつと戸を叩いて遇つたが可いが、それともこれなり別れた方が善いものかと思つてな。慰めのない人を打棄ておくのも辛いし、でも、どうする事も出來ないので、私はヤン・スクシッスキイ殿の所へ行くことに決めましたわい。彼はミカエルの親友だし、ザクロバ殿も矢張友達でさあ。あの人達ならミカエル殿の心を落着すことが出來るかも知れんで。殊にザクロバ殿は機敏な男で、話上手ですからな」

「で、貴君はヤン殿の所へお出でゞしたか」

「行きましたが、間の悪い時は仕方がないもので、彼もザクロバもスタニスラフ殿に遇ひにカリシヘ行つて留守でした。何時歸るか解らんと言ひますわい。そこで私は、『自分の行先はジュムドの方角だから、クミタ殿の所へ行つて、この事を話さう』と思ひましてなあ」

「それはどうも、御親切に」

「いや、お禮どころぢやない。何よりもまあ、ミカエル殿のことですわい」とカールラムプが言つた。「實は心が落着かないと大變だと思ひますぢや」

「神さまはあの方をお護り下されませう」とクミタ夫人が言つた。

「神が護つて下さるにしても、ミカエル殿は僧服を着るやうになりますぞ。あれほどの悲しみを私は生れてから、見たことがありませんわい。ミカエル殿のやうな軍人を失すのは惜いですからな」「惜いと申しまして？　そのために神の御榮光が增しませう」とクミタ夫人が言つた。

カールラムプの髭はぶる〳〵した。額を撫でながら、

「奥樣、增しても增さないでも顧ひませんや。ミカエル殿は異敎徒や異端共をこれまで澤山滅ぼしたのですからな。坊さんの御說敎よりか確に救主と聖母を喜ばせてゐまさあ。はい、それを想へば愉快ぢや。誰でも一番善いと想ふことで、神の榮のために盡したが可いでさあ。基督敎國にはミカエル殿より賢い人は幾千人でも居りませうが、あのやうな軍人は民政國には他にありませんや」

「全くさうです」とクミタが叫んだ。「そしてミカエルは未だチエンストホヴに逗留してをるでせうか」

「私の立つ時には居ました。それからどうしたか、解りません。唯確かな事は、神のお影で、氣違にも、絕望から來易い病氣にもなりますまい。併し助力もなく、親戚もなく、友人もなく、慰安もなく、一人ぼつちでゐるでせう」

「彼は兄弟も及ばぬほど私に盡してくれた親友です。どうぞ聖母さま、彼をお救け下さい」

クミタ夫人は深き想に沈んだ。暫く寂然する。やがて夫人は光のある頭を擡げて、「貴郎、私達は種々あの方の御世話になつてをりますわね」

「さうとも、それを忘れるには、犬の眼玉でも借りないとな。自分の眼玉を顔に附着けておく中は、正直な人に合す面はない」

「貴郎、あの方をその儘にしておきなさるおつもり」

「どうしやうもないぢやないか」

「行つておあげなさい」

「御婦人の誠心は流石に偉い」とカールラムブはクミタ夫人の手を取つて、幾度となく接吻した。

けれどもその忠告はクミタの好む所でなかつた。首を捻つて、恁う言つた。「ミカエル殿のためなら、地の端までも行きたいが、それでも、お前、知つてゐるだらう—お前が丈夫なら——何も申さんが——なあお前、神はお前を護られるんで、何の事もなからうが、でも心配だ。妻は親友以上だからな。ミカエル殿も氣の毒だし、それからお前もそれ——」

「私はラウダの師父達の御世話になりますわ。それに當方は平和ですし、私、小さい事にはくよくよしませぬ性ですから。神の御意がなければ、私の頭から髪の毛一本落つるものですか。ミカエルさまは力になつて上げる方が必要でせうから」

「實際力になつてやる者が必要です」とカールラムブは附言した。

「貴郎、私、こんなに丈夫ですもの。ちつとも差支へは御座いません。御出でになるのは御嫌でせうけれど…」

「杖でもつて大砲に突撃つて行く方が辛くないやうだ」とクミタが語を遮つた。

「でも、御出でになりませんと、『友達を見殺しにした』やうに、矢張心苦しいでせう。さうしますと神さまは怒つて私達に下すつた祝福を御取返しになりますわ」

「さう言はれて見ると二の句は出ない。神は祝福を取返されるといふのか。困つたな」

「でも、ミカエルさまのやうな御友達を御救ひ申すのは、聖い義務で御座いますわ」

「私は心の奥底からミカエルを愛してゐるさ。でも、辛い場合だ。さういふことなら、一刻も早くせねばなるまい。直ぐこれから厩舎に行つてと。何といつても、その外に方法はあるまいな。ヤンとザグロバをカリシに往かせたのは惡魔の仕業だ。そんなことはどうでも可いとして、私は、一日お前と離れるよりも、財産を全然失した方が善さそうだ。軍務のためなら鬼に角、他の事でお前と別れてゐろといふ者があるなら、刀の欄を十文字にその口へ押込んでやらあ。義務と言つたな。それなら、さうしやう。躊躇するのは馬鹿者だ。ミカエル殿でなく、他の人のためなら、こんなにはせんさ」

クミタはカールラムブの方を向ひて、

「貴下、厩舎まで來て下さらんか。馬を選りたいので。それから、オレンカ、私の鞍を用意して。ラウダの人を二三人頼んで來て麥を打つてもらへ。カールラムブ殿は二週間ばかり逗留して、私の代り

に妻を氣をつけてやつて下され。この近所で土地も見つかりますよ。リエビヒをお買ひになれ。さあ厩舍へ。一時間の内に出立します。止むを得ません、止むを得ません」

二

日暮少し前に、クミタは出發した。涙ぐめる妻は柱を黄金作りにした十字架像で、彼を祝福した。永年この武士は不意の旅立に慣れてゐたので、いざ出發となると、掠奪して遁げる韃靼人を追ひ驅けるやうに突進した。

彼はヴイルノに着いて、グロドノからビアリストクへ、そこからシエドレッに進んだ。ルコフを通る時、ヤンが前日妻子やザグロバと同伴して、カリシから還つたことを知つた。そこで彼等の許へ往つて、ミカエルを救けるについて善い知慧を借らうと想つた。

彼等は彼が來たのを驚きもするし、歡びもしたが、その來た譯を聽いて、忽ち泣き出した。

ザクロバは終日心が靜まらなかつた。多くの涙を池に洒いだ爲めに、池の水層が增して、水門を越したとは、後で彼自ら言つた程である。彼は泣いてから、深く考へ込んだ。相談する時に恁う言つた。

「ヤン殿、貴君は議員に選ばれたから、往くことは出來ない。幾度かの戰爭の後で、國内の人心が定まつて、番組通り、その義務を果すぢやらう（波蘭には鵲が國内に赤兒を運び來るといふ噺あり）から、一家の事情上、旅行を急ぎなさらんのも無理はない。殊にどれほど長くかゝるか知れん旅行だから、まあ茲まで來て下すつた丈でも大したことぢや。で、赤露に家にお歸り下さいと申上げよう。ミカエルの事なら。極く近しい間柄でないと面倒ですからな。苛い返答をしても怒らず、面會を嫌がつても氣にかけんやうでないとな。忍耐とそれから長い經驗とが必要ぢや。クミタ殿とミカエルとは普通の間柄ぢやて、今度のやうな事には物足りませんわい。御氣に觸つては困るが、ヤン殿と私とは貴君よりも彼の古い友達で、一緒に千軍萬馬の間を往來したものぢや。いざといふ場合に、救つたり、救はれたりしたことは數が知れんでな」

「私は議員の職を止めてしまふ」とヤンが口を出した。

「ヤン、それは公務ぢやぞ」とザグロバが嚴乎として言ひ返した。

「でも」とヤンは惱しげに、「私は從弟のスタニスラフを兄弟のやうに眞實に愛してゐるが、ミカエルとは兄弟よりも近しい仲ですから」

「それは私にも血族よりも近しいさ。でも今は我々の愛情を彼是いふ時ではない。ヤン。若しこの不幸が今恰度ミカエルに振懸つてゐるといふなら、『議會なんぞどうでも可いから、往け』と言ふけれど

今の場合はさうぢやない。カールラムプがチエンストホヴからジュムドに着き、アンドレー殿がジュムドから茲まで來るには餘程時間が懸つてゐる。だからミカエルの許へ往くだけでは何もならん。一緒に滯在することが必要ぢや。彼と一緒に泣くばかりでなく、彼を撫ることが必要なのぢや。十字架の例を示すばかりでなく、彼の心や氣分を愉快にしてやることが必要なのぢや。それなら誰が往けば可いと思ふ。まあ私だ。私が往くよ。神が助けて下さるわい。彼がチエンストホヴに居つたら、茲に連れて來やうよ。居らなかつたら、モルダヴイヤ迄でも彼の後を追つてゆくぢや。私は自力で嗅煙草が吸へる間は、どんなことをしても彼を索し出すつもりぢや」

これを聽いて、二人の武士は一緒にザグロバを抱うとした。ザグロバはミカエルの不幸と今後の自分の骨折を思ふてやゝ氣落ちして、泣き出した。二人に充分抱かれながら、慰う言つた。

「ミカエルのために私へ禮を言ふにや及ばん。貴君方より私の方が彼に近しいのぢやから」

「ミカエル殿のために御禮を言ふのぢやないが」と、クミタが言つた。「木石でない限り、人間である限り、貴老が友達のために勞苦を厭はないで、御齢をもかまはず、力を盡さうとなさるには感心しまさあ。貴老位の齢になると、大抵の人は火の側へ嚙りついてゐるんですが、貴老は私やヤン殿と同年輩のやうに長い旅を厭ひなさらんからな」

ザグロバは實際自分の齢を隱さなかつたけれども、老人になると手足が利なくなると言はれるのは

大嫌ひであつた。で、眼の緣はまだ赤かつたが、急に視線をクミタに向けて、いかにも不機嫌に、

「やあ、私も七十七になつた時にや、氣が沈りさうだつたよ。なにしろ、二つの斧が頸玉に引懸つてゐるやうでな（7といふ數字が斧の形をせる故にかく言ふ）。それが八十を通り越すと、元氣が出て來てな、家内でも貰ひたくなつたよ。私が妻帶しやうものなら、貴君と私と、何ちが先きに自慢の種が出來たか解らんぜ」

「自慢なんて、私はするものですか」とクミタが言つた。「御壯んなのは何より結構です」

「王樣の前で、ポトツキイ元帥が私の齢を嘲弄つたんで、大にいじめてやつたことがある。貴君にも仕てあげやうかな。私は元帥に、それでは山羊の索を澤山に作りつこをしませうと言つてやつた。其結果はどうだらう。元帥は三つ作ると、起き上れなくなつて、ハイダック（十六世紀に東方の匈牙利の森林より來れる種族にて土耳古人と勇敢に戰へる者共）に引張り起してもらうといふ騷ぎさ。所が私は殆んど三十五の索を作らへたからな。ヤン殿は現に見てゐたのだから、問ふて見なさい」

ヤンはザグロバが何事にでも自分を證人に立てる癖があることを知つてゐるので、目瞬もせずに、またミカエルのことを語り出した。ザグロバも默り込んで、深く考へ事を始めた。やがて元氣づいて、晩食を濟してから恁う言つた。

「一寸誰にも氣付ぬ事だが、私はかう思ふよ。ミカエルは思つたよりも容易くこの禍を切り拔けるやうにな」

「さうなれば結構ですが、どこからそんな考が浮んで來ましたか」とクミタが尋ねた。

「それあ。ミカエルを能く知つてゐる外に、頓智と年の功さ。年の功といふ奴は貴君方にやない。人は誰でも獨特な性質があるもんでな。身に振懸る不幸は、譬て言ふと、川に石を投げるやうなものさ。川面には水が靜に流れる。石は底に沈んで、自然の流を礙げる。流を留めて、それを幾重にも割いてしまふ。その川の石はそこに横はつて、水が三途の川に流れ込むまで、それを割くものだ。ヤン、貴君はさういふ人の仲間だよ。苦痛やその起つた源因を忘れないでゐると、世の中は一層苦しくなるものぢや。それから又肩を拳固で毆られたやうに不幸な目に遇ふ者もあるさ。さういふ人は一時正氣を失ふが、直き又蘇返つて、紫色の痕が治ると、不幸を忘れてしまふ。さういふ性質だと、不幸に充ちた此世では氣樂だよ」

二人はザグロバの賢い言葉を注意して聽いてゐた。彼は二人が能く聽いてくれるのを歎んで、語り續けた。

「ミカエルの事なら何でも私は知つてゐる。何も彼の缺點を探さうといふのではないが、彼が大變悲しんでゐるのは、あの娘を失したよりも結婚の出來ないためのやうに想はれる。彼にとりてそれは不幸中の不幸に相違ないから、怖ろしく失望したのも不思議ぢやない。あの男がどれほど妻帶したがつてゐたか、貴君方には一寸想像が出來なからう。彼には何な欲望も野心も、利己心もないのだ。持つてゐる物は失してしまつた。自分の財産も棄てゝしまつた。俸給を欲しがつたこともない。その功勞勤務の報酬として彼が主なる神と民政國から待望んだ所は、唯一人の妻なんだ。彼はそれを自分の靈魂に與へられる麵麭と思つてゐたらうよ。それを恰度口へ持つて往かうとしてゐた時、「さあ、お喰べ」と莫迦にされたやうなものさ。絶望したのも無理ぢやない。それはあの娘のためにも悲しんだらうさ。併し妻帶仕損なつたことの方が尙ほ悲しからう。彼は自分ではその反對だと言ふかも知れんがな」

「それは實際です」とヤンが言つた。

「まあ、お待ち。彼の心の傷を縫つて、新しい皮で覆んで見やう。昔の望みが戻つてくるかも知れない。一つ危險な事は、絶望に心を挫かれて、後悔するやうな事を仕出かしたり、決心したりせんければ善いがな。でも、もうどうかなる事はなつてしまつたらう。不幸な目に遇うと決心が直ぐ出來るものぢやて。私の從者は私の衣物を荷造してゐる。貴君方の行くのを留めやうとして恁んな事を言ふのぢやない。唯貴君方を慰めるためさ」

「まあ、貴老はミカエルにとつたら硬藥のやうなものですな」とヤンが言つた。

「君にも硬藥だつたやうにな。直ぐ彼を見つけることが出來るとしても、何處か隱者の家にでも隱れたり、子供の時から慣れてゐる遠い曠原にでも忍んだりしてゐないと善いがな。クミタ殿、足下は私の

齢のことを彼是言はれたが、私は早飛脚も及ばぬほど走るつもりだよ。さうして私が歸つたら、絹絲の古いのを解したり、豌豆を剝いたりさせてごらん。さもなければ捲絲竿を持つて働かしてごらん。困難は私を妨げず、不思議な待遇も私を閉込さず、飲食も私を留むる能はずちや。貴君方は未だこんな旅を仕たことが御座るまい。誰か腰掛の下に錐を置いて私を突刺いてゐるやうに、私は茲に靜乎としてゐられない。私は旅の襯衣を山羊の脂で擦つておけと言ひつけておいた。蛇が出ても顧はんやうにな」

三

ザグロバは友達に約束したほど道を急がなかつた。ワアサウの近くに來ると、段々足が遲くなつた。今や外國との戰爭の火を消して、謂はゞ洪水の深みから民政國を救ひ出した國王で政治家で偉大なる將軍であるヤン・カジミルは位を讓らんとする時であつた。彼は萬事を忍んだ。萬事に耐へた。外敵の侵擊して來る度毎にその胸を曝した。けれどもその後内政の改革を謀ると、國民は彼を助けずに、唯反對と不滿足とを表するのであつた。そこで彼は自ら發念して耐へ難き重荷となつた王冠を脱せんとするのであつた。

地方の普通議會は既に開かれた。大僧正グラジユモフスキイは十一月五日僧官會議を召集した。

種々な候補者は逸早く運動に着手した。黨派の競爭は激甚であつた。事は唯選擧に依つて定まるのであるが、僧官會議も尠からず重要視された。それ故議員連は八方から馬車や騎馬で家來や從者を引連れて、ワアサウへと急いだ。元老院議員達は盛んな護衛を率ゐて都を指して登つて來た。

道路は雜沓した。旅館は滿員で、一夜を明す宿さへ容易に見つからなかつた。けれどもザグロバは齢が齢なので部屋を空てもらうことが出來た。併し彼は一度ならずその大なる名聲が評判になつて、時を空費した。

それは恁ういふ次第だ。或る旅舍に着くと、誰かの御用宿になつてゐて、他の者は指もさせない。然るに護衛兵で旅舍を一杯にしたその人物が出て來て、珍らしげにそこへ到着した者を見物してゐた。髭も髯も絹絲のやうに眞白で、品の高いザグロバの風采を見て、

「御老人、まあ尠し御憩みなさい」と言つた。

ザグロバは野人ではない。誰でも自分と近づきになるのを歎ぶことを知つてゐたので、敢て辭退しなかつた。主人の案内で闕を越すと、「何誰でおゐでゝすか」と問ねられたので、彼は唯髯に手を當て、無雜作に、"Zagłoba Sum!"(私はザグロバです)と二言で答へた。

この二言につれて、腕を擴げられぬ例はない。そして「これは、まあ、目出たい日です」と叫ばれた。居合はす將校や貴族は、「この人を見よ。民政國、の軍人の龜鑑だ。gloria et decus (光榮と名譽)

だ」と言つた。彼等は寄つてたかつてザグロバを眺めた。若い者は側に來て彼の旅衣の端に接吻した。それから彼等は貨車から小桶や器を出して來て、幾日も幾日も酒宴を初めるのであつた。

ザグロバは代議士として議會へ往くのだとばかり思はれてゐた。彼がさうではないと言ふと、誰も皆顏を見合せた。そこで彼は公務を盡すのは若い人に限ると思つて、ドマシエフスキイ殿に沙汰書を讓り渡したことを說明した。今度の旅の實際の譯を二三の人にだけ話して聽せたが、その他の人には唯恁う言つて置いた。

「若い時から戰爭ばかりしてゐたので、年を老つても、ドロンエンコにもう一度往つて見たいと思ひましてな」

けれども彼等は尙益々不思議がつた。彼が代議士でなくつても、重要な人物でないとは誰の眼にも見えなかつた。聽衆の中には代議士よりも權勢のある人々の居ることが解つてゐた。それのみならず、最も勢力ある元老院議員に至るまで、二月の中には選擧が始まるので、武士の中の名高い人々の一言一句が大變尊重せられることを思はざるを得なかつた。

それ故彼等はザグロバを腕に運んだ。どんな大諸侯でも、脫帽して彼の前に立つた。ボドリアスキイはザグロバと一緒に三日飲み續けた。カルシインで出遇つたバトソフは彼を抱き上げた。

老英雄の籠の中に、火酒や酒を初め、豐に飾つた寶玉箱、軍刀、拳銃などいふ目星しい贈物をするやうに命令した者も一人ならずあつた。

ザグロバの家來は善い儲物をした。彼は決心も約束もしてゐたのだが、旅程がおくれて、ミンスクまで三週間かゝつた。

彼はミンスクでも息が吻なかつた。町の四辻に馬車を驅ると、これまで途で遇つたことがないほど美々しく壯麗な供廻が眼についた。從者が華かな旗を持つてゐる。尠くとも步兵の半聯隊である。立法議會へ騎馬で武裝して往くものはない。然るに此の行列は瑞典王もこれほどの護衞兵は持つまいと思ふほど隊伍が整つてゐる。所狹きまで並んだ。光々した馬車には、途々旅舍で用ゆる掛毛氈や絨氈を積んでゐる。糧食箱や食料を載せた貨車がある。それと一緒に家來達がゐたが、大抵外國人で、理の解る言葉を口にする者は群衆の中で極めて尠ない。

ザグロバはやがて波蘭服を着た一人のお供を見つけた。そして馬車を留めさせて、如才なげに、馬車から片足を地につけて、尋ねた。

「王樣も及ばぬほどこんな立派な供廻りをつけてゆくのは誰ですかい」

「誰でもない。俺が殿さんはリスアニアのマアシャル公さ」

「誰だ？」とザグロバが繰返した。

「雙だな。ボグスラフ・ラドジヴイル公が議會へお出でなさる所さ。王樣に選ばれにより」

ザグロバは急に馬車の内へ足を引込して、「驅れ」と叫んだ。「こんな所に用はない」

彼は憤怒に身を慄はせながら獨語いた。

「あゝ偉大なる神よ。爾の布告は測り難きかな。雷電を以てこの謀叛人を碎きたまはぬならば、神は人の道理に及ばぬ隱れたる計畫を持ちたまふのでありませう。人間の智慧で判斷すれば、この牛追ひを辛い目に合せた方が可いのであります。斯る名譽もなく良心もない謀叛人が刑罰も受けずに、平氣で壯んな行列をして、意張つてゐるといふのは、この最も有名な民政國に惡事の行はれる證據であります。いかなる國家にでも、斯る輩が横行するようでは、滅亡を免かれません。ヤン・カジミルは善良なる國王でした。併し寛大過ぎて、不逞の徒をその儘許しておくのが癖でした。それは唯彼の過失ではありません。國民の裡に良心と公德心とが全く滅びたからであります。あは、はあ。彼奴が代議士ぢや。市民は彼奴の穢れた手に國家の安寧秩序を置くのか。彼奴がその手で國家を分裂させて、瑞典の羈絆に結び着けるのは知れたことぢや。我々は滅ぼされるほかあるまい。彼奴を王にするなんて、何んといふことぢや。でも、こんな人民は何をするか解らない。彼奴が代議士。ベラ棒な。法律は明に、外國で任官せる者は代議士たる能はずと示してゐる。彼奴は痞癖の叔父さんの下に使はれる普魯亞の總督ぢやないか。あは、はあ！　待て、貴樣。議會の證言といふことは何のために存するのだ。議事堂へ行つて、この問題を持ち出してやらう。私は唯の傍聽者でも願はない。さもなきあ、只つた

今、肥つた羊に化けて、屠殺者に追ひ廻されても仕方がない。代議士の中には私の味方になる者もあるぢやらう。謀叛人、貴樣のやうな勢力家を壓倒して、排斥することが出來るかどうか、それあ解らん。だが、私のする事は貴樣の選擧の益にやならんぞ。必然見てをれ。ミカエル、氣の毒だが、待つてゐてくれ。これは天下の大事ぢや」

ザグロバは恁う想つて、除名の理由を注意して考へたり、代議士達の收攬を窃に企んだりした。そこで彼は議會の開期に後れないやうに、ミンスクからワアサウへと大急ぎで來た。恰度開期に間に合つた。代議士その他の人々が非常に澤山集合したので、ワアサウは勿論、プラガやその他の市でも宿屋を見つけることが全く出來ぬ程である。普通の家でも一室に三四人も詰込んでゐるので、空間がなかつた。ザグロバはとある店先で一夜を明した。寧ろ愉快に過した。でも、朝になつて、馬車に入ると、これからどうして可いか解らなかつた。

「どうも、これは」と彼はいま〳〵しげに、クラコウの市外を見廻はした。「茲にベルナルドの僧院がある。あれがカザノフスキイの御殿の跡だ。恩知らずの市ぢや。これを敵から奪ひ取るには、私は血を流して苦心した。然るに、この白髮頭を横にする場處さへ吝しむのぢや」

市は決してザグロバにその白髮頭を横へる場所を吝んだわけではない。唯その場所が一つもないのだ。けれども幸運の星は彼のために輝いた。コンエッポルスキイの御殿に着いたか着かぬ中に、側の

方から彼の馭者に、「止れ！」と聲をかけた者がある。

馭者は馬の手綱を締めた。見知らぬ貴族が顔を光らして、馬車へ近づいて、「ザグロバ殿。貴老は私を御存じですか」と叫んだ。

ザグロバがその人を見ると、三十を越した位の男で、羽をつけた豹の皮の帽子を被つてゐる。それは確に軍人の象徴だ。墨子粟色の下衣に暗赤のコンタシュを着て、金の繍をした帶を占めてゐる。見知らぬこの人の顏は甚だ立派だ。曠原の風に漸黑づんだが、雅しい容貌である。その青い眼は悲しげに沈んでゐる。その風采も一方ならず麗はしく、男にしては餘り雅すぎる。波蘭の服裝をしてゐるが、髮を長くして、髭を外國式に刈込んでゐる。彼は馬車の側に留つて、腕を擴げた。ザグロバは最初誰だか氣がつかなかつたが、それでも身を屈めて、彼を抱いた。

二人は親しげに抱き合つて、それから腕の長さほど離れて、顏を見合せた。

やがてザグロバは、「御免なさい。貴君はどなたでしたか。どうも思ひ出せん」

「ハスリング・ケドリングです」

「やあ、これはどうも。能く見た顏だが、服裝で全く變られた。私はこれまで、貴君の軍服姿ばかり見てゐたので。どうして波蘭の服裝をなさつた？」

「はあ、私はこの民政國を母親にしましたものですから。子供の折には、まあ放浪者でしたが、この

民政國に養はれたわけですから、私には自分の母親はなくつても可いでさあ。御存知ありますまいが、戰爭後、私は國民の一人になつたのです」

「それは何より大慶至極で」

「そればかりか、ジュムドの境のコウランドで、同姓の人があつて、私を養子にしてくれました。その軍服も貰うし、財產も貰つたといふわけで。その人はコウランドのシヴェンタに住んでゐますが、當方でも私にくれたシクジイといふ領地を持つてゐるのです」

「それは結構。で、貴君は軍人をお止めか」

「一旦緩急あれば、何時でも職分を盡します。それを豫期して、私は土地を貸して、茲で命令を待つてゐる次第です」

「その武士氣質が、私は大好きぢや。私も若い時から矢張さうで、未だ骨の髓まで勇氣に滿ちてゐるつもりです。それで、貴君、今クアサウで何をしてござる」

「私は議會の代議士で」

「それは恐入つた。貴君、もう背骨まで波蘭人で」

若い武士は笑つた。「私の魂の分相應には」

「貴君、奥樣がおありか」

「未だです」とケトリングは嘆息した。
「萬に一を缺くといふわけか。いや、待て。それ、ビレヴイヒ嬢との昔の想ひはないのですかい」
「そんな事まで御存じなら、お話仕ますが、それから何も新しいのに遭遇りません」
「もう、あの女は顧はんが可い。直きクミタの赤坊を生むさうぢや。くよくよなさるな。他の者があの女と一緒に幸福に暮してゐるといふのに、何も嘆息することはない。莫迦〳〵しいでさあ」
ケトリングは悲しげな眼を上げた。「私は唯新しい想ひが生じないと申したので」
「生ずるとも。案じなさるな、妻帶が出來るとも。私の經驗からしても、あまり思ひ込みすぎると戀は唯苦しいばかりさ。私も若い時には、トロイルスのやうに思ひ込んで、世の中の愉快も好機會も失してしまつた。大變苦しんだものさ」
「貴老のやうに快活な氣性でゐられると可ひですがな」
「私は度の過ぎたことは仕なかつた。だから、骨の髓まで痛んだことはない。で、今何處に御滯在か。もう宿が見つかりましたか」
「モコトフに樂しい家を持つてゐますので、戰爭後造へました」
「それは耳よりの事ぢや。私は昨日から市中、家を探しまはつてゐるので」
「それはどうも、どうか御宿をさせて下さい。部屋も澤山あります。家のほかに、事務所や廣い厩舎

もあるので、貴老の家來や馬を入れる部屋もあります」
「天から降つて來たやうな仕合といふものぢや」
ケトリングはザグロバの馬車へ乘り込んだ。馬は驅け出した。
途でザグロバはミカエルの不幸を話した。ケトリングは初耳なので、腕を組んで悲しんだ。
「そいつはどうも、えらい事だ」とケトリングはやがて、貴老は私とミカエル殿と近頃どれほど親しくしてゐたか御存知ないでせう。私共は一緒に此間の普魯士の戰に出かけて、瑞典兵の城塞を圍んだでした。ウクラインにも一緒に行つたし、ルボミルスキイに對しても一緒に戰つたし、それからソビエスキイ元帥の下に露西亞のヴォエヴヲダの死後二度もウクラインに一緒に行つたです。同じ鞍を枕の代用にしたり、同じ皿で喰つたこともあります。我々はカストルとポラックスと呼れた。彼が婚約のためにリスアニアへ行つた時だけ、我々は別れたです。彼の最も樂しい希望が空中の矢のやうに消え去つたとは誰も思ひ設けませんな」
「涙の世の中ぢや、何事も無常でな」とザグロバが言つた。
「眞正の友情は例外です！……兎に角御一緒に彼の今居る所を探しませう。ミカエルを眼の中の瞳子のやうに愛してゐる元帥からも何か聽けるかも知れません。元帥が何も知らんとしても、今各地方の代議士が來てゐます。あのやうな武士について誰も知らんといふことはありません。出來るだけ歡ん

で御手傳をします。」

二人はかやうに話しながら、やがてケトリングの「陋宅」に着いたが、それは邸宅といふべきであつた。内部の造作も大變立派で、買ひ集めたり、分捕したりした高價の家具が澤山にあつた。武器の蒐集は殊に注意を價ひした。ザグロバは見る物毎に興を催して、叫んだ。

「これでは、二十人の宿でも、出來なさるわい。貴君に出遇つたのは、私の仕合といふもの。アントン・クラボヴイッキイ殿とは懇意の間柄ぢやつたので、宿をしてもらうとも出來た。バトソフ家でも私を招いてくれた。彼等はラドジヴイルに對して黨派を集めてゐるぢやで——併し私はまあ貴君の所へ來た方が可つた」

「リスアニアの代議士から聽いたですが」とケトリングが言つた。「今度はリスアニアの順番なので、是非共クラボヴイッキイ殿を議長にしたいと言つてゐるさうです」

「それは正當ぢや。彼は正直な感じの善い男で、性が善過ぎるほどだ。彼には調和より尊いものはないのぢや。この人とあの人とを仲直りさせるといふやうな事ばかりやる。仲直りさせても何にもならぬのにな。だが、眞面目な話、ボグスラフ・ラドジヴイルは貴君の何にかな」

「クミタ殿の細君になつた人が、ワアサウで私を虜にした時から、彼は何んでもありません。大諸侯ではあるが、奸惡な曲者です。私は彼がタウロギで此世の優つた者に對する素振を見て看破してしまひました」

「何。この世の優つた者。何を言つてゐるんです？　女は土で作つたもので、他の土細工と同樣、壞れ易いものぢや。そんなことはどうでも善い」

ザグロバは茲に於て憤怒に紫色をして、眼玉が顏から飛出しさうになつた。「考へて見なされ、その惡黨が代議士ぢや」

「誰？」とケトリングは未だオレンカのことを考へて居たので、吃驚して問ねた。

「ボグスラフ・ラドジヴイルさ。だが、權力の證言といふことがあつた筈ぢや。まあ、お聽きなされ。貴君は代議士だらう。問題を提出することが出來る。私は傍聽席から大聲をあげて勢援するぢやで、その點は心配なさるな。權利は此方のものだ。彼奴らがその權利を輕んじやうとすれば、聽衆の中に騷動が持ちあがる。血を見ずには濟ない」

「まあ事を荒立てなさいますな。私は問題を提出します。正當なら幾らでも。神は我々が議會を騷がすことを禁じられてゐます」

「私はクラボヴイッキイの所へ往かう。生溫い男だけれど。併し未來の議長として望を囑されてゐるなら、據所ない。それから、バトソフ家を煽動しやう。尠くともボグスラフの陰謀を曝露してやる。それ所か、私は途であの惡黨が元帥にならうとしてゐると聽いたのぢや」

「國民は滅亡に近づいたといふものです。あんな人が國王になれるなら、この世は生きてる甲斐はない」とケトリングが言つた。「まあ、今日はお悠然なさい。二三日したら、大元帥の許へ往つて、友達のことをお尋ねしませう」

四

それから數日經つて議會が開かれた。ケトリングが先見したやうに、クラボヴイッキイが議長に選ばれた。殘るは唯選擧の日を定めて、高等會議を任命することだけである。こんな問題に各黨派が策を廻らすにも及ばないので、議會は無事平穩であつた。證言問題で最初尠しごたついた。代議士ケトリングはベルスクの秘書官とその同僚ボグスラフ●ラドジヴイルとの選擧に對する質問を提出すると聽衆の中から太い聲で、「謀叛人、外國の犬」と呼ぶ者があつた。それに呼應する聲が聽えて、代議士中にも加擔する者があつた、議會は忽ち二派に分れた。ベルスクの代議士を排斥しやうとする者と、その當選を承認しやうとする者である。遂に委員を設けて、此問題を決定することになつて、その當選を承認した。これはボグスラフ公にとりて苦き打擊であつた。そのために議會では公が高等會議に入る資格があるかどうか考ふるやうになつた。そのために瑞典侵擊の際における彼の叛逆詐謀は素破拔れた。民政國の眼前に赤耻をさらして、彼の野心は土臺から壞された。

彼は委員會の開かれる間齒噛みをしてゐた。ケトリングは代議士なので、復讐をすることは出來ない。そこで從者に賞を懸けて、ケトリングの質問と同時に、「謀叛人、外國の犬」と叫んだ傍聽者を搜させた。

ザグロバの名はあまり高いので、長く隱すことが出來なかつた。又彼はそれを隱さうとも仕なかつた。ボグスラフ公は大に哮り狂つたが、こんな名望ある人に反對されてゐることと、これを攻擊する危險を知つて、大變當惑した。

ザグロバは、また自分の權勢を知つてゐた。恐喝がぱつと廣まつた時に、貴族の大集會で恁う言つた。

「私の頭の毛を一本落しても、それほど危險なことは御座るまい。だが、選擧も間近ぢやて、戰友一萬の軍刀が一緒になると、剝み肉も雜作なく出來るでな」

この語が公の耳に入ると、唯唇を噛んで、苦笑ひした。でも、心では老人の言ふことが正當だと思つた。翌日彼はこの老武士に對して明にその計畫を變へた。公の侍從の催した饗宴でザグロバの事を口にした者に對して、ボグスラフは恁う言つた。

「あの人は私に大變反對してゐるといふことだが、あゝいふ武士氣質の人を私は大好きぢや。これが ら楯を衝くことがあつても、常に大好きぢや」

それから一週間の後、彼は元帥ソビエスキイの邸宅でザグロバに遇つた時も、同じ事を言つた。ザグロバは勇氣に滿ちた靜かな顏をしてゐたが、公を見ると胸が少々どぎまぎした。ボグスラフは非常な策略家で、誰でも彼の怒りに觸れることを怖れたものだ。併し公は食卓の筋向ふへと呼びかけた。

「やあ、ザグロバ殿、貴老は代議士ではないが、罪もない私を議會から追ひ出さうとなされたさうぢや。だが、私は基督者として貴老を赦すぢやて、昇進なさりたきや、お盡力をしますぞ」

「私は唯憲法を主張しましただけでな」とザグロバが答へた。「さうするのが貴族の義務でありますからな。齡が齡ですから、私には、まあ、神の御助が一番必要でせう。もうやがて九十でありますぢや」

「好いお年ですな、貴老の德も年の長さほど大きからうものなら。私はそれを少しも疑はんです」

「私は國王と國家には使へたが、不思議な神々には使へませんでしたわい」

公は一寸顏を顰めた。「貴老は又私に反對して力を盡されたさうですな。だが、仲直りをしませう。何も悉皆忘れませう。貴老が私に反對する他の者共の私怨を增長されたこともな。その敵に對しては未だ此方にも申分があります。併し足下に對しては、手を擴げて、お知己になりたいぢや」

「私は身分の低い僕で御座いましてな、御友情があまり高過ぎますぢや。それに手を屈かすには、趾頭立ちになるか、飛びつかなきやなりません。年寄には苦しいことで」

ボグスラフは語試合に慣れてゐたが、ザグロバの言葉の傲慢に度膽を拔れて、自分の口に舌がありことを忘れた。こゝに居合せた者も胸を震はして笑ひ出した。ソビエスキイも心から笑つて、恁う言つた。

「これはツバラジの老勇士ぢや。軍刀の使ひ方ばかりか、舌戰でも無雙ぢや。抗らはんが善いですわい」

實際ボグスラフは和解が六ケ敷と看て取つて、それ以上ザグロバに打勝うとはしなかつた。他の人と言葉を交しながら、斷切なしに筋向ふの食卓の老武士に意地の惡い視線を向けた。

ソビエスキイは莞爾しながら、言葉を續けた。「貴老は武士の鑑ぢや、眞正の武士ぢや。この民政國で貴老と肩を並べるものがありますか」

「劍道では」とザグロバがこの賞讃に滿足して、「ヴォロジョフスキイは私以上で御座る。クミタの腕前も私の仕込みにしては惡く御座らぬ」

「成程」と元帥が言つた。「一度ならずミカエル殿の業を見たことがあるが、實にあの腕前は偉いものぢや。氣の毒なのは、斯る勇士が電電に擊れたことですな」

「どんな事がありました、あの人に」とトセハノフの刀持サルビエフスキイが尋ねた。

「彼が愛してゐた娘がチエンストホヴで亡なつたので」とザグロバが答へた。「今何所に居るやら、さ

つぱり解らんには一番閉口ですわい」

「彼の人を見ましたよ」とクラコウの城守ブルシッキイが叫んだ。「ワアサウに來る途中でしたが、矢張彼の人がそこへやつて來るのに遇ひましてな。その時なんでも世の中と虚榮が嫌になつたから、モンス・レギウスへ行つて、祈禱と默想でこの苦しい生涯を終るとか言つてました」

ザグロバは僅か殘つてゐる自分の髪の毛を握んだ。「彼れがカマルドリの坊主になるといふのですかい」と絶望の叫びを發した。

實際城守の談話は滿堂に尠からぬ感動を與へた。ソビエスキイは軍人を愛して、その國家に必要なことを最も善く知つてゐるので、深く嘆息して、暫らく經つて言つた。

「人の自由意志と神の榮光とに抗ふのは善くないが、彼を失ふことはいかにも殘念です。私の悲しみを諸君に隱すことは困難です。彼はエレミイ公の流を吸む軍人で、いかなる敵に對しても無雙ぢや。殊に牧民に對して肩を並べる者はない。曠原には二三の勇者がなる。コザック中のヴイヴオ殿の如き騎兵隊のルスシッ殿の如き。併しミカエル殿には到底及ばない」

「治世が段々靜穩になることは何よりの事で」とトセハノフの刀持が言つた。「異教徒も閣下の必勝の劍で獲られたポダイッアの條約を忠實に守つてゐるのは何よりで御座います」

刀持は恁う言つてソビエスキイを敬禮した。ソビエスキイはこの公然の賞讃を滿足して答へた。

「この民政國の國境を守り、敵に斯る條約を結ばしめたのは、第一に神の恩惠と言はざるを得ません。第二には、一旦緩急あらば義勇公に奉せんとする善良なる軍人があるからです。私は恰度モルダヴイアの國境が形勢穩かならぬといふ消息を受取つたので、充分の警戒を命じておきましたが、何をいふにも軍人が足らない。一方に兵を送ると、他方が留守になるといふもので、特別な訓練のある、騎馬に慣れた人々を要するので、それ故ミカエル殿のことを大變殘念に思ふ次第です」

今まで兩手に突伏してゐたザグロバは頭を擡げて叫んだ。「彼をカマルドリの坊主になどするものか。嫌でもおうでもモンス・レギウスから、引張り出します。何に、明日眞直に彼の所へ行つて、引張り出します。止むを得ねば、大僧正に掛合ひますわい。羅馬まで往つて掛合つてもかまはん。だが、彼が髯を剃つたらどんな坊さんになるだらう。あれの顏には私の拳のやうに澤山毛が生えてゐるのでな。彼が經文を讀むことは到底出來ませんわい。彼の聲を聽くと大きな牡猫がさかりについた聲だと思つて、鼠が寺から遁げ出しまさあ。まあ、諸君、こんな事を申して、御免なされ。私は自分の子よりも彼が可愛いぢやて。無事でゐてくれろば可いが、無事で、どうぞ。彼がベルナルドの坊さんになつても、カマルドリの坊さんになつても、私の眼の黑い内は、さうさせてはおきません。明日眞直に管長の所へ往つて、僧院長への手紙を貰ひませう」

「彼は未だ宣誓してはゐないだらう」と元帥が言つた。「足下があまり我執すると、尙强情にしてし

まふ。彼の決心に神の意志があるかないか、能く考へないといけない」

「神の意志ぢや。神の意志は突然來るものではありませんわい。古い諺にも、『突然來るのは惡魔の意志』と言つてあります。それが神の意志なら、長い前から私も氣が付く筈でさあ。彼は坊さんぢやない、龍ぢや。彼か靜に物の道理を考へてそんな決心をしたなら、私は何にも言ひません。だが、神の意志は鷹が鴨でも擊つやうに絶望した人を擊ちはしますまい。私は何も彼を强迫はしない。行く前に私の言ふことが彼の生涯の恥辱を增すかどうか考へませう。私の希望は神の裡にあるのぢやから。あの身體の小さい勇者は常も自分の才智よりも私の才智を餘計信用してゐましたな。此度もさうするでせう。大して變つてさへゐませんければな」

五

翌日ザグロバはケトリングと手筈を定めて、管長の手紙を懷にして、モンス・レギウスの修道院の門の鐘を鳴した。「ミカエルがどのやうにして遇ふかしら」と想へば、胸がどき〳〵した。言ふべきことは途々考へたが、遇つて見ねば解らんと思つた。兎に角恁う想つて、二度鐘を鳴した。すると、錠を脫す音がして、微に戸が開いた。その戸の隙から身を捩込んで、當惑せる若僧に言つた。

「玆に入るには特別な許可が要るでせうな。私は大僧正からの手紙を持つて來たから、院主樣へ取次

いでいたゞきたい」

「左樣ですか」と門番が管長の封印を見て辭儀をした。

門番は鐘の舌から吊つた繩を引ひて、二度鳴して、他の僧を呼んだ。自分は戸の側を離れぬのである。第二の僧はそこへ來て、手紙を受取つて、默つて引込んだ。ザグロバは持參の荷物を腰掛に載せて、その側へ坐つて、太い息を吻いた。

「兄弟」とやがて言つた。「もう永くこの修道院に御在でゝすか」

「五年」と門番が答へた。

「そんなに御若くつて、五年も旣。すると玆を出やうと思つても、もう晩いですな。時々は世の中が戀しくは御坐らんか。世の中といふものは或る人には戰爭の香がするし、又ある人には御馳走の香がするし、又ある人には女の香がする所でしてな」

「咄」と坊さんが叫んで、恭しく十字を切つた。

「まあさ。貴僧は寺を出たいといふ誘惑に遇つたことは毫もござらんか」とザグロバが繰返した。

坊さんはこんな妙な事を言ふ大僧正の使者を訝しさうに見なから、「この戸の内に入つた者は誰でももう再び出てゆきませぬ」

「成程。ヴオロジョフスキイ殿はどうしてゐます。生てゐますか、達者ですか」

「そんな名の人は居りません」
「兄弟ミカエルさ」とザグロバは出まかせに、「近頃茲へ來た龍騎兵の大佐で」
「兄弟エルジイですか。未だ宣誓されませぬ。この期の終りまでは宣誓が出來ませんので」
「彼は確に宣誓しませんよ。女の尻を追ふことが上手な男でしてな。あれほどの女たらしは、お寺――いや騎兵隊中にありますまい」
「そんな事聽く耳を持ちません」と坊さんは當惑もし、吃驚もした。
「まあ、兄弟。面會人は何處で應待されるのか知りませんが、兄弟エルジイが來たら、少々退いてゐてもらいたいですな。例へば門の所までね、私共の會話は莫迦に俗ぽいですから」
「え、こちらから退いてゐたい位です」と坊さんが言つた。
その時ミカエル即ち兄弟エルジイが現はれた。ザグロバは側へ來てもミカエルとは思へぬほど痛く變つてゐた。先づ第一に彼は龍紋のついた短上衣を着た時よりも、長い白い僧服の方が丈高く見えた髭は常も眼の側までむしやくしやしてゐるのだが、今は剃落された。髯を生して、それが指の半ばほどの長さに小さな黄色い房をしてゐる。おまけに肉が痩せ衰へて、眼は昔の光を失つた。僧服の下で手を組んで、そろ〳〵近よつて來た。頭は打垂れてゐる。
ザグロバはミカエルとは氣が付かず、院主がやつて來たのだと想つた。で、腰掛から立ち上つて、

「御僧は」と言つて見たが、段々側へ寄つて見て、突然腕をひろげて、「ミカエル殿、ミカエル殿」と叫んだ。
兄弟エルジイは抱かれたまゝ、靜然としてゐる。啜泣をするやうに胸がどき〳〵してゐるが、眼には涙を浮べてゐない。ザグロバは暫く彼を抱擁してから、恁う言つた。
「貴君は自分の不幸を獨で泣いてゐると思つては困る。私も泣いた。ヤンもアンドレーも其家の者も泣いた。なにも神の御心ぢや。氣を靜かに、な、ミカエル。仁惠深き父は貴君を慰めて下さる。報うてくださる……暫く茲に閉こもりなされたのは宜かつた。惱みの時には祈禱と默想ほど善いことは御座らぬ。さあ、もう一度抱してくだされ。涙に曇つて、私はよう貴君が見えんぢや」
ザグロバはミカエルがかやうな狀になつたのを見て、清き涙にかきくれた。
やがて彼は言つた。「貴君の默想の邪魔をした事を許してくだされ。ぢやが、どうも他に仕やうがないので、まあ、私の言ふことを聞いてくだされ。すれば、貴君にも呑み込めるだらう。なあ、ミカエル。貴君と私とは善につけ惡につけ一緒に世の中を渡つて來た。貴君はこの壁の内で慰安をえましたかい」
「慰められます」とミカエルが答へた。「このお寺の内で毎日聞く言葉で慰められます。私は死ぬまでMomento mori(死を記憶せよ)と繰返し、繰返さうと思つてゐます。死ぬのは私の慰です」

「なんぢや。死なうと思へば、戰場の方がお寺よりも手取早いぢやないか。お寺の生活は毬から糸をのろ〳〵ほごすやうなものぢや」

「茲には俗事がないので生活もないわけです。靈魂が身體を殘さぬ先に、言はゞ來世に住んでゐるんです」

「それが眞實なら、私はもうベルグロドの牧民が民政國に對して大軍を集めてゐることも何も貴君に話しますまい。そんなことは興味がないぢやらうから」

ミカエルの唇は突然震へた。その右の手は自から左の横腹に持つてゆかれたが、そこには劒がなかつたので、そのまゝ兩手を僧服の下に入れて、首を垂れて繰り返した。

「Momento mori」(死を記憶せよ)

「確に、確に」とザグロバが辛抱のできぬやうにその鮮然した眼を瞬たゝきながら、「昨日元帥ソビエスキイ殿が言はれますには、ヴオロヂョフスキイにこの暴風が終るまで在職させたい。それからなら修道院に入りたいなら入つても差支はない。さうした所が神にすまぬわけではあるまい。いや、さういふ僧侶こそ一段と稱美すべきものだらうとな。ぢやが貴君は國家の幸福の前に貴君自身の心の平和をお考へになつたのも無理ではない。愛の始は自分なので」

長い沈默が續いた。ミカエルの髭はその唇を動かす時のやうに稍硬ばつてゐた。

「貴君はまだ宣誓なさらんのぢやな」とザグロバがやがて尋ねた。「貴君は何時でも出られるのぢやらう」

「私はまだ坊さんではない。神の仁惠を待つてをるです。私の魂が煩はしい浮世の想から清められるまで待つてをるです。神の仁惠は今私と一緒に在ります。心の平和は歸つて來ました。こゝを去ることは出來ぬが、もう明かな良心と一切の俗事から自由な心狀を以て宣誓することの出來る時が近よつても、こゝを去らうとは思ひません」

「それを止めろとは申さぬ。貴君の決心は賞贊しますぢや。だが、ヤンが袈裟を着ようとした時、敵の攻擊から此國を救ふまで延ばしたこともありますでな。でも、貴君は思召通りに爲され。私は決して貴君の妨げをせんつもりぢや。私も修道院に入れといふ神命を感じたこともありましたつけ。五十年も前の事ぢやが、見習僧になつたことがあつた。そうしないと、虛言者になつたものですからな。でも、神は他の事を命ぜられた。それはさうと、ミカエル、貴君は二日許り私と一緒に來て下さらんと可けませんせ」

「どうして行かなきやならんですか。このまゝ放つて置いてもらいませう」

ザグロバは衣物の裾で眼をおさへて、泣き出した。「私の力になつてくれるものはないのぢや」と彼は斷切な句調で、「ボグスラフ●ラドジヴイル公が私に復讐しやうとして、刺客を待伏させたりしてゐ

るのぢや。でも、この老人を庇つてくれる者も、護つてくれる者もない……貴君こそと想つてゐたぢやに……でも、仕方がない……私は死ぬまで貴君を愛するが、私のために何んにも仕て下さらんでも止むを得ませんぢや。……どうぞ私の冥福を祈つて下され。私はボグスラフの手を遁れられんぢやて……。私はなるやうにしかならんとして、貴君のもう一人の友人、貴君と最後の麵麭の皮を分て喰つた友人が今死の床に居つて、是非共あなたに遇ひたいと言つてゐる。貴君に遇はないでは到底死に切れんぢやらう。その魂の平和のために懺悔をしたがつてゐるのぢや」

ミカエルはザグロバの身に迫る危難を聽いて大に感動した矢先だから、前の方へ躍出して、その腕を握みながら「ヤン殿ですか」と言つた。

「いや、ヤンぢやない。ケトリングで」

「え、あの男がどうしたんです」

「私を禦つてくれたので、ボグスラフ公の間諜の一人に擊れたんで。二十四時間生きてゐるかどうか解らん。こんな危難に遭つたといふのも貴君を慰めてあげやうと思つて、ワアサウに來たばつかりにぢやて。さあたつた二日行つて、死ぬ人を慰めてやりなされ。さうして還つて來てから……坊さんになれるのぢや。私は貴君がさうするのに故障がないやうに管長の命令を持つて來た。さあ急いで、一分間も大切ぢやて」

「宜しう御座る」とミカエルが叫んだ。「大變だ。何も故障はありません。私は唯默想のために茲に來て居るのだから、神在さば、死せんとする人の祈は神聖だ。私はそれを拒むことは出來ない」

「拒めば大變な罪ぢやとも」とザグロバが叫んだ。

「眞實に。常もあの謀叛人ボグスラフ奴が。だが、私はケトリングの敵打ちをせんければ、茲へ歸られん。その惡徒共を見つけ出して、眞二つにしてくれよう。あゝ、罪の想ひはいつも私を攻擊する。momento mori（死を記憶せよ）。古い衣物を着て來るまで茲で待てゐて下さい。僧服で外出は禁ぜられてゐますで」

「茲に衣物があるぢや」とザグロバは側の腰掛の上においた包の側へ飛んで行つて、「見越をつけて、何もかも用意して來た。長靴も劒も善い上衣も茲にある」

「房へ御出で下され」と小武士は忙しげに言つた。

二人は房へ往つた。出て來る時には、ザグロバの側に白衣の坊さんではなく、膝まで黄い長靴を穿いて、腰に劒を下げて、肩章をつけた軍人が歩いてゐた。ザグロバは入口の番僧を見やつて、笑つた。番僧は二人のために戸を開けながら、非難の色を示した。

修道院から遠からぬ岡の窪みに、ザグロバの馬車が二人の從者に守られて待つてゐた。一人は疊に馬具を着けた四頭の馬の手綱を取つて臺へ腰かけてゐた。ミカエルは急に老練の眼をこれに向けた。

他の一人は片手に皮で包んだ大きな瓶を持ち、片手に二つの洋盃を持つてゐた。

「モコトフまでは大分遠い」とザグロバが言つた。「ケトリングの病床へゆけば鋭い叫び聲を聽かなきやならん。一杯飲みなさい。ミカエル、辛抱の出來るやうに。元氣をつけて、馬を速く驅るから」

ザグロバは家來の手から瓶を取つて、古い粘々してゐる酒を二つの洋盃についだ。

「佳い酒ぢや」とザグロバは地に瓶をおいて洋盃を手にしながら、「ケトリングの健康のために」

「彼の健康のために」とミカエルは聲に應じた。「急ぎませう」

二人は一息にそれを飲んだ。

「急ぎませう」とザグロバは繰返した。「これ、注げ」と從者を顧みて、「ヤン殿の健康のために。急ぎませう」

二人は又一息に洋盃を飲み乾した。一刻の猶豫もないので、

「さあ、座りませう」とミカエルが叫んだ。

「私の健康のために飲んで下さらんか」とザグロバが愚痴をこぼした。

「急いでなら」

二人は又急いで飲んだ。ザグロバは半クオトル（一クオトルは六合三勺許）ばかり在るのを、一息に飲みほして、髭も拭はずに、「貴君の健康のために飲ないでは義理が惡い。注げ、これ」

「有難う」と兄弟エルジイが答へた。

瓶の底が露はれた。ザグロバはその頸を持つて、瓶を地に叩きつけて片々にした。空瓶を見るに堪へなかつたので。やがて二人は急いで席に坐つて、馬を走らせた。

貴い酒に二人の血管は温まり、心は嬉しくなつた。兄弟エルジイの頰は赤くなつて、眼は輝いた。

彼の手は自然と髭を握んで、房々と眼の方へ捩上げた。やがて彼は初めて氣がついたやうにあたりをきよろ〳〵見廻はした。突然ザグロバはその膝を叩いて、判然した調子で、理もなく叫んだ。

「さうだ、さうだ。貴君を見ればケトリングは元氣づくぢやらう。さうだ、さうだ」

彼はミカエルの頸へ腕を廻して、力一杯抱き占めた。ミカエルも同樣な友情を以つて抱き返した。彼等は暫く默つて然し愉快に馬車を驅つた。やがて市外れの小家が路の兩側にぽつ〳〵見え出した。その正面は大變混雜してがや〳〵してゐる。四方に往來する人がある。その中には種々な裝をした僕や軍人や美服の貴族などがゐる。

「大勢の貴族が議會へ來た」とザグロバが言つた。「百人に一人も代議士ぢやないが、皆傍聽に出かけたのだ。家も旅舍も一杯ぢやで、宿を見つけるのに困難だ。街道に居る此の立派な婦人達も多分さうぢやらう。貴君の髯の數よりも大勢居るのぢや。莫迦に綺麗ぢやないか。これでは男子たる者は羽ば

たきをして、雄鷄のやうに鳴かなきやなるまい。あれ、あそこに顔の棕色で、眼や髪の薄黒い女がゆくね。匈牙利兵が後から緑の傘をさしかけてゐる、あの女は美人ぢやないか。なあ？」

ザグロバは恁う言つて、ミカエルの横腹を拳で衝突いた。ミカエルもそれを見やつて髭を捻つた。その眼は光つとしたが、忽ち顔を下に向けて、首を打垂れて、暫く默つてから、「死を記憶せよ」と言つた。

ザグロバは再び彼を抱いて、「私は友情を以て貴君を愛しも尊敬もするのぢやが、結婚したらどうぢや。佳い女は澤山にある、結婚なされ」

兄弟エルジイは驚いて友を眺めた。ザグロバは醉つてゐない筈だ。彼は先程の酒よりも三倍も多く飲だとは幾度もあるが、常も平氣だ。すると唯その友情からこんな事を言ふのだ。けれども結婚などいふ考は、ミカエルには今尠しも無いので、怒るよりも驚きの方が激しかつた。

やがて彼は嚴然とザグロバを眺めてから問ねた。

「醉ひなすつたか」

「心の底から繰返す。結婚しなされ」

ミカエルの眼は一層嚴格になつて、"memento mori"「死を記憶せよ」と繰返した。

けれどもザグロバは容易に尻込やうな老人ではない。

「ミカエル、私を愛するなら、此問題について安心させて下され。その"Memento"といふ聲と同時に犬の鼻でも舐りなされ。私は幾度でも言ふが、貴君は自分の心の儘に出來る。私は恁う言ひたい。誰でも神の使命を努めねばならんのぢやて、神は貴君を劍の人にお生みになつた。神は貴君を劍道の達人にされたのを見ても、聖意は解るのぢや。若し神が貴君を坊さんにするつもりなら、全く違つた心を賜はるはずぢや。書物や羅典にもつと強い嗜好をも賜はる筈ぢや。天國では勇士の聖徒は僧侶の聖徒と同じ名譽にあづかれるものださうぢや。地獄の軍勢と戰つたといふので、旗を分捕して歸ると、神御自身の手から賞與がいたゞけるといふ……その事實を拒みなさるまい」

「拒みません。貴君の理詰にあつては適ひませんです。ですが、悲哀には寺の生活が世の中の生活よりも善いとは思はれませんか」

「よりも善い、あはゝ、寺へ遁れるにはもつと理窟がありさうなものぢや。悲哀を飢させないで育てるのは馬鹿者さ。悲哀といふ獸は成るたけ早く飢死させるに限るぢやに」

ミカエルはどう答へて善いやら解らぬので、默つてゐた。暫くして悲しげに言つた。

「結婚のことは言つて下さるな。その言葉を聽くと非常に苦しいから。さういふ願望は死んでしまつた。涙で洗ひ去られた。戀は私のやうな年頃には不似合です。私の頭の毛は白くなり出しましたからな。四十二歳！戰場にあると二十五年。戯談ぢやない。戯談ぢやない」

「けしからん事を言ひなさんな。四十二歳。ふん。私は背中にその二倍以上も負つてゐるよ。それでも私は衣物から塵を拂ふやうにな、私の血から熱を出さうと努めることもあるぢや。死んだ戀人の思出を尊敬なされ。ミカエル、貴君はさぞ彼の娘に親切ぢやつたらうな。だが、他の者に親切をしてやるには年を取すぎてゐるとは言へまいな」

「氣を落着せて下さい、氣を落着せて下さい」とミカエルは感激した調子。

涙は彼の頰に流れ始めた。

「他の事は何も言はんでも可い」とザグロバが言つた。「唯武士として言つてもらひたいことは、一月位私共と一緒に居ても宜らう。ケトリングの事はどうなつてもな。ヤンにも遇ひなさらねばならん。……それから寺に歸るなら、歸られても、誰も留めはせん」

「宜しいです」とミカエルが言つた。

二人は別な事を語り出した。ザグロバは議會のこと、自分がボグスラフ公を排斥する問題を起したこと、それからケトリングの不幸を語つた。だが、折々話を止めては、深き想に沈んだ。明にその冥想は嬉しいことなので、折々膝を叩いては、「ほう、ほう」と叫んだ。

けれどもモコトフに近づくと、ザグロバは心配さうな顏を仕出した。突然ミカエルの方を向いて恁う言つた。

「一旦口に出して言つたからは、ケトリングがどうあらうとも、一ヶ月は私共と一緒に居るのですせ」

「口に出して言つたことですから、居ります」とミカエルが答へた。

「これはケトリングの家です」とザグロバが叫んだ。「立派なものぢや」

やがて彼は馭者に言つた。「鞭を燒いちまへ。今日此家で酒宴がある筈ぢやから」

鞭を折る聲が高く聞えた。馬車が門へ入らぬ先に、ミカエルの戰友の一團が控室から立ち現はれた。その中にはクメルニッキイ當時の古い戰友もあるし、近頃の若い戰友もあつた。近頃の中には、バシレフスキイとノヴオヴエスキイとがをつた。二人は今や日の出の勇士だが、未だ年は若い。少年の時に學校を遁げ出して、數年ミカエルの下に戰場に働いた。ミカエルは此二人を大變可愛がつてゐた。

古い戰友の中には、黃金作りの頭巾を被つたノヴイン家のオルリクがゐる。瑞典の兵士は嘗てその頭巾の一片を盜んだことがある。それから曠原の半野蠻の大將ルスシツ、此人は邊境を守るに無雙の熟練があつて、名聲はミカエルに次ぐ者である。その他數多の戰友がゐる。馬車の二人を見て、彼等は同音に叫んだ。

「ミカエルだ。ミカエルだ。ザクロバ大勝利。ミカエルだ」

彼等は馬車の側で雀躍して、多勢の腕でミカエルを擔つて、室に連れ込んで叫んだ。

「やあ、戰友、御無事で結構。恁う捕まへたらもう遣るまいぞ、遣るまいぞ。全軍の花形、名將ヴオ

ロジョフスキイ萬歳ぢや。曠原へ一緒に行かうわい。兄弟、荒野へな。悲しみなんて風に吹き飛されますわい」

彼等は入口で彼を下した。ミカエルはその歓待に痛く心を動されて、一同に挨拶したが、直ちに尋ねた。

「ケトリングはどうしました。未だ生きてますか」

「生きてる、生きてる」と一齊に答へる。老軍人等は妙に微笑を洩した。「ケトリングの所へ早く。長くは持つまい。貴君を待ちこがれてゐる」

「ザグロバに聽いた時には、それほど危篤とは思はなかつた」

一同は大廣間へ入つた。その中央には食卓に馳走が並んでゐた。片隅には臺所があつて、白い馬の皮の被衣をかけて、ケトリングが寢てゐた。

「やあ」とミカエルは友の方へ急ぎながら叫んだ。

「ミカエル！」と叫んで、至極丈夫なケトリングが飛び起きて、小武士を力一杯胸に抱へた。

二人は力一杯抱き合つて、かはる〳〵相手の足を擧げた。

「假病を使へつてな」とケトリングは叫んだ。「死にかゝつてをれと言ふのさ。でも、貴君に遇つては、靜然としてゐられない。私は鰻のやうに元氣なのだ。何も異變はないのさ。唯寺から貴君を引出す手段で……赦して下さい、ミカエル。我々がこんな工夫をしたのも貴君を愛すればこそだ」

「荒れはてた曠原へ」一緒にまたもや將校等は叫んだ。彼等は硬い手で軍刀を叩くので、畏ろしい音がした。

ミカエルは呆れ果てた。暫く默つてゐたが、やがて一人〳〵の顏を見詰めた。殊にザグロバの顏を見詰めた。遂に彼は叫んだ。

「なんといふ事だ。ケトリングが重傷を負つたとばかり思つた」

「どうしたのぢや、ミカエル」とザグロバが叫んだ。「貴君はケトリングが丈夫だといふので、怒つたのか。丈夫なことが悲しくつて死んだ方が善いといふのかい。私共が皆な幽靈な方が嬉しいといふほど、貴君の心は木石に化したのかい。ケトリングも、オルリクも、ルスシッも、この若い人達も！いやさ、ヤンも、息子のやうに貴君を愛したこの私も幽靈な方が嬉しいのかい」

ザグロバは眼を閉つて、尙一層悲しさうな聲で、「御一同、もう生きてる甲斐はない。滿足はこの世に何も殘らぬのぢや、唯殘つてゐるのは無情だけだ」

「いや。何も貴老を惡く思やしません。唯貴老は私の悲哀を尊敬して下さらんものだから」とミカエルが叫んだ。

「私共の生活を憫れんで下され」とザグロバは繰返した。

「氣を落着けさせて下され」

「ミカエルは我々がその悲しみを尊敬しなかつたといふが、我々は涙を洪水のやうに洒いだでしたな。御一同。それは實際ぢや。ミカエル。武士は相み互ひさ。貴君の悲しみは歡んで分つとも。十ケ月我我と一緒に居ると約束したからは、尠くともその日の間は我々を愛して下され」

「死ぬまで貴老を愛しますとも」とミカエルが言つた。

恰度その時新來の客があつたので、談話は途切れた。ミカエルと係合つてゐた軍人達はその人の近づく足音を聽かなかつた。戸口に立つた時、初めてその人を見た。それは偉大な體格をした威嚴ある風采の人であつた。羅馬の皇帝のやうな顏をしてゐる。それには權力と國王らしき眞正の親情と禮讓とが混つてゐた。居合はす軍人達とは善き對照である。鳥の王である鷲が鷹と隼の群へ突然現はれたやうに、軍人達の前に出ると一層偉大に見えた。

「大元帥！」と叫んで、ケトリングは主人として彼を歡迎するために飛び上つた。

「ソビエスキイ殿！」と一同が叫んだ。

誰も皆恭しく頭を下げた。

ミカエルのほかは皆元帥の來ることを承知してゐた。彼はケトリングに來訪の約束をした。それでも元帥が來て見ると、誰一人初めに口を開かうとする者もない。これは又非常なる尊敬である。けれ

どもソビエスキイは誰よりも一番に軍人を愛した。殊に韃靼の賊を破つて、これを掃蕩した軍人達を愛した。彼はわが子のやうに彼等を考へた。それ故ミカエルに悔を陳べると同時に、これを賞揚して軍隊に留まらせたいと決心した。

元帥はケトリングに挨拶してから、直ちに小武士に向つて腕を擴げた。ミカエルが近よつて、その膝を抱くと、ソビエスキイは愛しげにミカエルの頭へ手を按いた。

「老勇士」と彼は言つた。「神の手は貴君を地に屈ましたが、私は貴君を揚げ、貴君を慰める。主は、貴君と偕にある。貴君は今我々と共に留まるであらうな」

「留まります」とミカエルは涙を以て言つた。

「宜しい。貴君のやうな人物を成るべく多勢欲しいものだ。舊友、露西亞の曠原で、天幕の中で酒宴をしたあの時のことを思ひ出さうではないか。再び貴君方の中にあることは幸福である。御主人、さあ、始めやう」

"Vivat Joannes dux"（ヨハネス將軍萬歳）と一同に叫んだ。（ヨハネスはソビエスキイの名）

饗宴は初まつて、永く續いた。

翌日元帥は大變價の高いクリーム色の戰馬をミカエルに贈つた。

六

ケトリングとミカエルとは一朝事あれば、鐙を並べて馬を驅り、同じ火の側に坐り、同じ鞍に頭を横へて睡らうと互に約束した。けれども暫く別れねばならぬ事が起きた。相見て一週間ならぬ中に、コウランドから使者が來た。それは若い蘇國人（ケトリング）を養子にして、財産を讓つたハスリングが突然病氣に罹つて、頻に養子に遇ひたがつてゐるとのことであつた。若き武士は直ぐ樣馬へ乘つて、飛び去つた。

別れに臨んで、彼はザクロバとミカエルに向つて、自分の家に居ると思つて、いやになるまで住つて下さいと言つた。

「ヤン殿も來るかも知れません」と彼は言つた。「選擧の間に確に來るでせう。子供を皆な連れて來ても、その家族全體を入れる室があります。私には親戚がありません。若し兄弟があつても、貴君方よりも親しくはないでせう」

ザグロバは特にこの勸誘に滿足した。ケトリングの家は甚だ愉快であつた。ミカエルにもさうである。ヤンは來なかつたが、ミカエルの妹がやつて來た。その妹はラチコクの副總督であるマコヴエツキイに嫁いだ。その使者が元帥の邸宅に、小武士の消息を尋ねに來た。そこでケトリングの家に居ることを直ぐ知らしてやつた。

ミカエルは多年妹に遇はないので、大歡びであつた。妹は良い宿がないので、リバクの貧しい小さな宿に滯在してゐると聽いて、ケトリングの家へ來るやうに直ぐ飛んで往つた。妹に遇つたのは夕暮である。妹は二人の婦人と一緒にゐたが、大變丈が低くつて、糸の毬のやうに丸いので、直ぐ見分られた。妹の方でも彼を覺えてゐた。二人は互に抱き合つて、永い間默つてゐた。妹の溫かな涙はミカエルの顏へ落ちた。

マコヴエツキイ夫人は先づ口を開いた。微な金切り聲で喋舌つた。

「大變永く御目にかゝりませんでしたね。大變永く御目にかゝりませんでしたね。お達者で何よりでした。兄さんの御不幸を聽いて、私は直ぐお見舞しやうと飛び出しましたの。良人も引留めませんでした。ブジャクの方は雲行が惡くつて、ベルグロト韃靼人が今にも押寄さうなので、路に鳥の群が畏畏してゐました。侵掠の前にはいつもさうだといふことですのね。でも、まあ善つた。兄さんの御丈夫な顏が見られて。良人は選擧には自分で出かけると言ひまして、『この娘達をつれて、先にゆけ。ミカエルの悲しみを慰めてやれ』と申すのですよ。兄さん、まあ、窓の側へ往つて、お顏を見せて下さい。まあ唇が薄くなつたのね、さぞ辛かつたでせう。露西亞なら、良人が『宿を』といへは直ぐ見つかるのですが、茲ではどうしやうもありません。私共はこんな陋舍に居りますの。三束の藁をやう〳〵寢床

に仕てゐますのよ」
「まあ、これ、妹」と小武士が言つた。
けれども彼女は水車の廻るやうに御喋舌を止めなかつた。
「私は他に居る所がありませんから、茲に居ますのよ。此家の主人は狼のやうな眼をして人を見ますので、多分惡者でせうよ。でも、四人の頼になる家來がゐますし、私共も臆病ではありません。伴侶の一人は武士の魂がある女ですので、さもなければ茲に宿つては居られません。私は始終拳銃を持つてゐますし、バシアは拳銃を二挺も持つてゐますの。クリシアは鐵砲を好きませんものですから。でも初めての所ですから、他にもつと安全な宿を索したいのですわ」
「まあ、これ、妹」とミカエルは繰返した。
「お兄さんは何處にお出でなさるの。宿を見付けて下さいな。ワアサウにはお知邊があるでせうから」
「宿は用意してある」とミカエルが遮切つた。「元老院議員が供廻と一緒に宿つても善いほど立派な宿です。友人のケトリング大尉の厄介になつてゐるので、直ぐ貴女方を同伴するつもりです」
「私共三人には二人の家來と四人のお供があるのですよ。あゝさうでした。未だ二人の娘を紹介しませんでゝたね」

恁う言つて夫人は二人の方を向いた。
「あなた方は誰だかこの人を御存じでせうが、此の人の方ではあなた方を知りませんの。もう暗くなりましたが、お近づきになつておきなさいね。暖爐は未だ燃ませんね。これはクリスチナ・ドロホヨフスカさんとバルバラ・エゾルコフスカさんです。良人はこの二人とその財産の後見人ですの。二人共孤兒でして、私共と一緒に暮してゐます。一人で置くわけには參りませんものですから」
妹が恁う言ふと、ミカエルは軍人の敬禮を行つた。若い娘達は裾を手にして、お辭儀をした。バルバラは若ひ駒のやうに點頭いた。
「馬車へ御乘り下さい、參りませう」とミカエルが言つた。「ザグロバ殿も一緒に居るのです。夕飯の仕度をしておくやうに言つて來ました」
「あの名高いザグロバ殿がですか」と直ぐにバシア孃（バシアはバルバラの略語）が問ねた。
「バシア、お靜になさい」と夫人が言つた。「御迷惑にはなりませんでせうか」
「なに。ザグロバ殿が夕飯の仕度をすれば、人數が二倍になつても差支へないほど充分造へますわ」
と小武士が語を遮切つた。「嬢さん方、荷物を片付けなさらんか。私は荷馬車を一臺連れて來ました。ケトリングの馬車は廣いから、私共四人樂に乘れます。それから今一寸思ひついたですが、從者が呑だくれでなければ、朝まで茲に殘して、馬と大きな荷物の仕末をさせたらどうです。必要な物だけ、

先へ持つてゆきませう」

「置いてゆくものは何もありませんのよ」と夫人が言つた。「荷物は未だ解かなかつたですもの。馬の仕度さへ出來れば、直ぐにも參れます。バシア、あちらへ行つてさう言つてちやうだい」

バシアは室の中へ飛んで入つた。間もなく數人の年寄が來て、全然仕度が出來ましたと言ふ。

「さあ、參りませう」とミカエルが言つた。

彼等は直ぐ馬車へ乘つて、モコトフをさして出かけた。ミカエルの妹とクリスチナ嬢とは後の方の席を取つた。小武士は前の席でバシアの側へ坐つた。既に暗いので、互の顏が分らなかつた。

「ワアサウは御存じですか、嬢さん方は？」とミカエルがクリシア嬢（クリシアはクリスチナの略語）の方へ身體を屈めて、馬車の音に消れぬやうに聲をはり揚げて言つた。

「いゝえ」とクリシアは低い然も甘い鈴のやうな聲で、「私共は全く田舍娘で御座いますもの、今まで名高い市も名高い御方もちつとも存じません」

恁う言つて、クリシアはその名高い人の中にミカエルを數へてゐることを知らせたいやうに尠し頭を傾けた。彼はその答に感謝した。「禮儀正しい娘だ」と思つて、直ぐその返しの挨拶をしたげに頭をひねつた。

「ワアサウの市が十倍大きくつても」と彼は遂に言つた。「嬢さん方は一番評判の高い裝飾になりま

すさ」

「この暗闇でどうしてそんな事、解りまして」とバシア嬢が突然問ねた。

「あゝ、山羊が茲に居るわい」とミカエルは思つた。けれども何も言はなかつた。暫く默つて馬車を走らせた。バシアはまた小武士の方へ向ひて問ねた。「厩は廣う御座いますか。私共は馬を十頭、荷馬車を二臺持つてゐますから」

「三十頭あつても、大丈夫入ります」

「さうですか、さうですか」と若い嬢さんが叫んだ。

「バシア、バシア」とマコヴエッキイ夫人がたしなめた。

「バシア、バシアとお言ひになるのは容易いことよ。旅行中馬の世話をしたのは誰でしたつけ」

こんなことを言つて、彼等はケトリングの家の前へ着いた。どの窓もどの窓も夫人を迎へるために燈火が煌々としてゐた。僕共はザグロバを先頭に驅け出した。ザグロバは馬車の側へ飛んで來て、三人の女を見て、直ぐ尋ねた。

「奥樣はどちら。親友ミカエルの御妹さんは？」

「私で御座います」と夫人が答へた。

ザグロバは夫人の手を取つて、熱心に接吻して、叫んだ。「拙者奴で、拙者奴で御座る」

彼は夫人が車を降るのに手を貸して、鄭重に控室まで、足を踏みならしながら案内した。

「門口でもう一度御挨拶申上げて宜しう御座るか」と途中で彼は言つた。

その間にミカエルは若き孃さん方を助けて馬車から降さうとした。馬車は高いし、踏段は暗やみで見つからぬので、彼はクリシアの腰を抱へ、その身體を持ちあげて、地に降した。クリシアはすなをに身を委せて胸に抱れながら、「有難う御座います」と言つた。

ミカエルはやがてバシアの方へ向ひた。所がバシアは既に馬車の向側から飛び出してゐた。で、彼はクリシアを腕によらせた。

家の内で二人の娘はザグロバに紹介された。ザグロバは若い孃さん方を見て大歎びだ。早速夕飯にしませうと言つた。食器は既に卓の上で湯氣が立つてゐた。ミカエルが言つた通り、二倍の人數でも大丈夫だ。

一同席に着いた。ミカエルの妹を首座にして、その右側にザグロバ、それからバシアが坐つた。ミカエルは左側でクリシアの次に坐つた。

今や初めて小武士は孃さん方を篤と見ることが出來た。

何れも立派だ。併し趣が違ふ。クリシアは鴉の羽のやうな黒光の髪で、深緑の眼をしてゐる。プルネット（顏色紫色を帶びて眼及び髪の黑き女）だが、容色が雅しくつて、顳顬の青い筋が見えるやうである。僅に薄黑く見える初毛が唇を蔽ふて、甘さうな引着けるやうな口が接吻に都合の佳いやうにぽつちり前の方へ出てゐる。父を失して間もないので、喪服を着てゐる。その衣物の色合はその雅しき容色と黑髪とにつれて、愁に沈んだ眞面目な容子を現した。一寸見てはその連よりも老てゐる。能く氣をつけて見ると、若い青春の血がその透通るやうな皮膚の下に流れてゐる、見れば見るほど目立つたその姿勢、鵠のやうな頸、娘らしい魅力に充ちたその釣合が讃歎される。

「これは偉い女だ」と彼は思つた。「偉い魂を持つてゐるに相違ない。これに較べるともう一人は唯のお轉婆だ」

實際この比較は正しかつた。バシアは連の娘よりも餘程小さかつた。一體に小造りだが、痩せてはゐなかつた。赤髪で薔薇の束のやうに赤かつた。病後らしく、髪を短く刈つて、金色の網で束ねてゐる。けれども二六時中頭を動すので、髪の毛は靜然としてゐない。毛の端が網の目から覗いて、額のところでコザックの尨毛のやうに亂雜な黃い房を造へてゐる。その薔薇色の顏は鋭い休みなき眼と戰を挑むやうな態度と一緒になつて、まるで機さへあれば他のものを虚めて知らん振をしてゐる小學生徒のやうである。それでも快活で鋭敏なので、誰もバシアに眼をつけずにはゐられない。その鼻は小さいが、息をするたびに、鼻の孔が廣つたり縮んだりする。頬にも顎にも樂天的な笑靨が見える。

バシアは靜にきちんと坐つて、快く食しながら斷切なしにザグロバとミカエルとを代り番に眺め

た。何か不思議なものを見るやうな子供らしい好奇心からである。

ミカエルは默つてゐた。彼はクリシアを款待せねばならぬやうな氣がしたが、どうして善いやら解らなかつた。大體この小武士は婦人との談話に拙なかつた。それにこの娘達が死んだ戀人を心に鮮然思ひ出させるので、尙更氣が沈んだ。

ザグロバはマコヴエッキイ夫人の御相手をしてミカエルや自分の手柄話をした。夕飯の最中に、彼はミカエルと二人で、皇女クルツエヴイヒとジエンジアンを連れて、土豪の間を遁げた話を始めた。そして皇女を救ひ、追跡を妨ぐるために、土豪の軍に斬込んだことを話した。

バシアは喰ることを止めて、頰杖をついて、前髪を振りながら注意して聽いてゐた。折々目瞬きをして、一番面白い所に來ると指を鳴して、「まあ、まあ、それから、どうして」と幾度も言つた。クシエルの龍が偶然飛び出して二人を救け、韃靼人に襲ひかゝつたので、彼等はその上に乘つて、三哩の間敵を斬捲つたといふ所へ來ると、バシアは最早堪えられなくなつて、力一杯手を叩きながら「まあ、私もそこに居れば善かつた。どんなに善つたでせう」と叫んだ。

「バシア」と肥つた小さいマコヴエッキイ夫人が強い露西亞なまりで叫んだ。「お前さんは今文明人の中に居るのでせう。そんな事を言ふものではありません。お前さんは、まあ何んといふ事です。『砲彈に打れて見たいわ』と言はないばつかりが見つけものです」

娘は銀のやうな聲できやつ〳〵と笑ひ出して、

「叔母さん、私、砲彈に打れて見たいわ」と叫んだ。

「おゝ、いやだ。困つたもので御座います。皆さん、どうぞ御免なすつて」と夫人が叫んだ。

バシアは叔母に赦してもらはふと思つて、座席から飛び上つた。そのはづみに食卓の下に小刀と匙を落した。すると直ぐ潜り込んでそれを取つた。

肥つた小さい夫人はどうしても笑はずにゐられなかつた。初めは身をぶる〳〵させて、それから細い聲で鳴くやうに、不思議な笑ひ方をした。皆面白さうであつた。殊にザグロバは大歡びだ。

「この娘にはどんなに困らせられますか」とマコヴエッキイ夫人が言つた。

「いかにも面白い娘ですな」とザグロバが叫んだ。

やがてバシアは食卓の下から這ひ出た。匙と小刀は見つかつたが、頭の網を失したので、髮の毛がそつくり眼のまはりに垂れ下つた。背のびをして、鼻の孔を暫く震はしてゐたが、「あなた方は私の困つてゐるのが、そんなに嬉しくつて。可つてよ」

「誰も笑やしません」とザグロバは强い調子で言つた。「誰も笑やしません。誰も笑やしません。唯神があなたのやうな方を送つて、歎ばして下さつたのを嬉しく思ふばかりぢや」

夕飯がすむと、客室に入つた。クリシアは壁に琵琶のかゝつてゐるのを見て、それを取りおろ

して、彈き初めた。ミカエルは歌つて下さいと言つた。

「お心の悲しみが幾分でも取れますやうなら、歌ひませう」

「それは、どうも」と小武士は有難さうにクリシアを見ながら答へた。

やがてクリシアは次のやうに歌つた。

「あゝ、武夫よ、信じませ。
甲冑は役たゝず
楯も用をばなさゞるに
キユピトの利き矢こそ
鋼と鐵とをつらぬきて
心の奥にゆくぞかし」

「御禮の申しやうも御座らぬ」とミカエルの妹と離れて坐つてゐたザグロバはその手に接吻しながら、「あなたが來て下さるし、それにこんな奇麗な娘達を一緒に御連れ下されたことは何よりでした。殊に小さい娘は面白い。かういふのに遇うと悲しみなんと飛んでしまひまさあ。鼬鼠が鼠を追ひかけるよりも一層上手にな。實際悲しみといふやつは、心に貯へた歡喜の穀物を嚙る鼠ですな。ミカエルがこの面白い娘達と一緒に居るので、不幸を全く忘れてくれろば善いぢやて。彼が誓言をしやうとした

寺から曳張り出してから一週間立つたばかりですがな。私は聖使(羅馬法王の使臣)に干渉してもらう筈でしたよ。若しミカエルを早速出してくれぬと、寺の坊さんを皆な龍騎兵にしてしまうといふことを院主に傳へてな。ミカエルが寺に居る理由がないのぢやもの。でも、神さまは難有い。神さまは有難い。今日明日の中には、この二人の娘の中何らか、火花を散して朽木のやうに彼の情を燃すでせうわい」

クリシアはまた歌つた。

「その投槍は盾をもて
強き勇士も禦ぎ得ず。
さらばたをや女いかでその
かよはき身をば護りえん
いづこに身をや隱しえん」

「この奇麗な娘達は犬が食物の心配をするやうに、投槍が心配ださうぢや」とザグロバがミカエルの妹に囁ひた。「奥樣、白狀なさい。こんな山雀を連れてゐらしやるには、何か思惑がおありでしたでせう。この二人は百人に一人といふ娘ですな。殊に少さな匈牙利兵はさうです。この娘のやうに、私も若々しくなりたいものぢや。あゝ、ミカエルは策士の妹を持ちましたわい」

ヤコヴエッキイ夫人はさも態とらしい眼付をしたが、それは正直で單純なその顏に、尠しも似合し

くなかつた。「あれやこれ考へて見ますと、女といふものは慧しいものですのね。良人は選擧のために此方へ參りますので、私が先に、この娘達を連れて參つたのです。だつて、彼方は韃靼人のほか誰にも遇へない所ですもの。偶然ミカエルに僥倖でも出來ましたら、私はあらたかな御像に徒歩參詣でもいたしますわ」

「さうなりますとも、さうなりますとも」とザグロバが言つた。

「二人とも大家の娘で、財産もありますのです。その財産はこんな亂れた世には何かの役に立ちませう」

「それは仰しやるまでもない。戰爭でミカエルも財産を失しましたからな。大諸侯達に預けておいた金もあつたでしたが。それは幾度か澤山な分捕をしたこともありましたがな、奥樣。元帥に献上もしたが、その一部分は、私共軍人の言葉でいへば、『軍刀に從つて』分配されました。ミカエルの割前は大分澤山でしたので、それを貯ておけば今日可成の財産が出來てゐる筈です。でも軍人は明日のことを考へられませんぢやて、今日を樂しく暮すばかりでさあ。ミカエルは有つたけ費うといふ主義でしたが、私はいつもそれを留めた位です。で、奥樣、この二人は血統も善いですかな」

「クリシアは元老院議員の血統ですの。門閥から言へば、バシアはクリシアに優つてゐる位です」

「成程、私もマスサグテスの王さんの子孫でしてな、家柄のことを聽くのが好きです」

「バシアはそれほど高い家柄では御座いませんが、お聽き下されば申しませう。何の家の血統のことも能く存じてゐますから。バシアは實の所ポトツキス家とセヴロヴエッキス家とラスシ家から出てゐますのです。それは恁ういふやうにです」

ミカエルの妹は恁ういつて、その好きな話をするに都合の善いやうに、衣物の裾をそろへて樂な坐り方をした。そしてバシアの生れるまでの血屬關係を精しく話して、

「そして、御覽の通りこのバシアが生れました」

「それで解りました。ケトリングの鐵砲を打つまねをしてゐるあの娘のことが」とザグロバが言つた。

實際クリシアと小武士とは談話に餘念ないので、バシアは戯らに窓から鐵砲を打つ眞似をしてゐた。

マコヴエッキイ夫人はそれを見て身震ひして、叫んだ。「あの娘のためにはこれまでどんなに心配しましたかお察し下さいませ。ほんとうに御轉婆です」

「御轉婆が皆なこの娘のやうなら、私は賛成します」

「この娘の頭には、武器と馬と戰爭のほか何にもございませんのです。一度家から鐵砲を持出して鴨を打うとして、葦の中に這ひ込ましてね。前の方を見てゐると、葦が急にがさ〳〵し出したさうです。何を見たと御思ひになります。葦の中を村の方へ忍んで來る韃靼人の頭がぬつと現はれたではありませんか。他の女なら驚いてしまいますわ。所が直ぐ打ちましてね。韃靼人は水の中へばたり。まあ、あ

なた、どうでせう、鴨を打つゝもりで」

夫人はまた身震ひして、韃靼人の不運を笑つてから、「所が實を申すと、この娘は私共を救ひましたので、一隊の韃靼人が侵入して來ましたのです。でも、この娘が歸つて來て危急を告げましたので、私共はいつものやうに家來と一緒に森に隱れる閑がございました」

ザグロバは滿面に笑を浮べて、暫く眼を細くしてゐた。それから飛び立つて、處女の側へ驅けていつて、その振りむかぬ中に、額を接吻してやりながら、

「葦の中の韃靼人を殺したさうですな。これは老武者のあなたに對する御禮ぢや」

處女は黃い前髪を打振りながら、「喉首に的りませんでしたわ」と活々した子供らしい聲で叫んだ。

「なんといふ勇ましい娘ぢやらう」とザグロバが感動した。

「でも、唯た一人の韃靼でしたわ。あなた方は千人斬をなさつたでせう。韃靼ばかりか、瑞典人も、獨逸人も匈牙利人もでせう。あなた方に較べたら、私なんて、なんでもありませんわ。あなた方は民政國に二人とない武士ですもの。全くさうですわね」

「そんなに勇氣があるなら、あなたに劒術を敎へませう。私は今疲れてゐるから、ミカエルに賴むかな。矢張名人ですわい」

恁う言はれたので、處女は雀躍した、ザグロバの肩に接吻して、それから小武士にお辭儀をしながら、「有難う。敎へてちやうだい。少しは、私、もう、知つてるの」

ミカエルはクリシアとの談話に全く餘念なかつたので、何の事やら解らずに、「なんでも御言ひなさる通り」と答へた。

ザグロバは輝いた顏をして、マコヴエッキイ夫人の側へまた坐り込んだ。「奧樣、私はスタムブルに永く居ましたので、能く知つてゐますが、土耳古の糖菓は一番甘いですな。それを喰たがつてゐる者は澤山ありますぢや。所でこれまでこの娘に誰も想ひをかけませんでしたか」

「それは、この二人の娘を欲しがつた人はない所ではありませんわ。バシアのことを、戲談に三人の寡婦と呼んでゐる位ですもの。三人の武士が一度に求婚しましたので。それは皆貴族の世嗣で、身分の能く解つたものでした」

マコヴエッキイ夫人は左の指を廣げて、その家柄の說明を始めやうとしたので、ザグロバは急に、

「その人達はどうしましたか」と尋ねた。

「戰爭で三人共死なりました。だから、バシアを寡婦と申しますので」

「はあ、能くあの娘は辛抱しましたな」

「それは毎日起る事ではありませんか。年を老つて死ぬのは、珍らしい事ではありませんもの。で、私共は言つてますのよ。戰場の露となるのが一番貴族の最期らしいつてね。『バシアがどうして辛抱しまし

たつて』それあ、尠しは泣きましたわ。大抵厩舎の中でね。何か心配があると、直ぐ厩舎に入込むのですもの。一度あの娘を呼びにやりまして、『誰のために泣くの』と尋ねますと、『三人のために』と言ふのですもの。で、誰を想つてゐたでもない事が解りました。あの娘の頭は他の事で一杯になつてゐて、未だ戀を知りませんのですね。クリシアはもう幾らか知つてゐますが、バシアはまだ赤兒ですから」

「あの娘もやがて色づきますさ」とザグロバが言つた。「奥樣、なあ、それお解りだらう。あの娘もやがてな。やがてな」

「それは女の運命ですもの」とマコヴエッキイ夫人が言つた。

「それはさうぢや。私もさう言うとしてゐました」

若い人達が側へやつて來たのでこれ以上の談話は出來なかつた。小武士はクリシアのために餘程元氣づいた。クリシアは親切な心情から醫者が病人に侍するやうに、彼の悲しみを恤つた。そのために今近づきになつたばかりとは見えぬほど親しさうであつた。ミカエルは副總督の妻の兄弟だし、この若い娘は副總督の身内であつて見れば、それを不思議がる者はあるまい。バシアは謂はゞ除け者にされた。ザグロバだけは始終バシアに眼をつけてゐた。所でバシアは他人が顧つてくれやうが、吳れまいが一向平氣であつた。バシアは初め二人の武士を讃歎して見てゐたが、やがて同じ讃歎の眼を以て壁にかけてあるケトリングの珍らしい武器を眺めてゐた。それから欠びをした。眼はだん〳〵重くなるので、遂に恁う言つた。

「睡いのね。朝まで能く眠れさうですわ」

この言葉で一座は直ぐお開きにした。婦人達は旅行で大層疲れてゐたので、床の用意を待つばかりであつた。ザグロバはミカエルと二人切りになると、意味あり氣に目をしば叩いてから、小武士に輕い拳固を雨ふらせた。「ミカエル、やい、ミカエル、これ、蕪菁野郎。坊主になるか、やい。クロ豆のクリシアは佳い娘ぢや。だが、薔薇のやうな小ちやい阿魔はどうぢや。此方をどう思ふ、ミカエル」

「え、何にも」と小武士が答へた。

「私はあの小さい阿魔の方が氣に入つた。夕飯の時にあの側に坐つてゐると、暖爐の側に居るやうに温かつたでな」

「彼女は未だ野羊の仔です。此女の方が立派ですわい」

「クリシアを匈牙利の梅とすれば、此方は小さい巴旦杏ぢや。私も齒をほしいな。あれが私の娘だつたら、貴君の外には誰にもやらない。巴旦杏だ。實際巴旦杏だ」

ミカエルは急に悲しくなつた。その綽名はザクロバがアヌシアにつけてゐたことを思ひ出したので。アヌシアは生けるが如く自分の前に立つてゐるやうに思はれた。その姿、その小さい面、その黑い髮、その氣輕さ、そのお喋舌、その目付よ。この二人の娘は一段年が若いが、アヌシアはこの若い人達よ

りも百倍も可愛かつた。

小武士は手で面を隠した。悲しみは思はぬ所へ彼を連れ去つた。ザグロバは驚いた。暫く默つて不安に見てゐたが、やがて尋ねた。「ミカエル、どうした。これ、話しなされ」

ミカエルは言つた。「多くの人は生てるし、多くの人は世の中を歩いてゐるのだが、私の羔はもうその中にはゐない。もう二度と彼女には遇へない」。胸の苦しさに聲も出ないので、安樂椅子の腕に額を押着けて、唇を結んだまゝ、「あゝ神よ、あゝ神よ、あゝ神よ」と呟いた。

七

バシアはミカエルに擊劍を敎へて下さいと强請つた。彼は拒みはしなかつたが、二三日躊躇してゐた。彼はクリシアに心を寄せた。併しバシアも大變好きであつた。實際バシアを好ぬわけには往かなかつた。

或朝最初の稽古は始つた。バシアが自分は初稽古ではないこと、普通の人なら負してやるなどと自慢したり、斷言したりしたからである。「年老つた軍人の方に敎へていたゞいたのですもの。そんな方は幾らもあるわ。でも、その方ほど劍術の名人はありませんでしたわ。あなた方と肩を並べることの出來る人だつたかも知れませんわね」

「何を言ふのぢや」とザクロバが言つた。「世界中で私共に並ぶ者はない」

「私もあなた方と並ぶやうになりたいわ。そんな事は望まれませんけれど、さうなりたいの」

「拳銃を打つのなら、私もやつて見ないこともありません」とマコヴェッキイ夫人が笑ひながら言つた。

「これはどうも、アマゾンの女勇士がラチコフに住んでゐると見える」とザグロバが言つた。そしてクリシアの方へ向いて、「あなたは第一どんな武器を用ひますか、孃さん」

「何にも用ひません」とクリシアが答へた。

「あは、はあ。何にもですて」とバシアが叫んだ。そしてクリシアの聲を眞似て、歌ひ出した。

「あゝ、武夫よ、信じませ。
甲冑は役たゝず、
楯も用をばなさゞるに、
キユピトの利き矢こそ、
鋼と鐵とをつらぬきて、
心の奥にゆくぞかし」

「クリシアさんの武器はかういふのよ、怖るゝ所なしだわ」とバシアはミカヘルとザグロバの方を向いて、「クリシアさんはその方では拔群の勇者よ」

「さあ、そこへお立ちなさい、嬢さん」とミカエルは少し氣に障つたのを隠さうとして言つた。
「おゝ、嬉しい。私の想ひ通りになつたわ」とバシアは嬉しさに顔を赤くして叫んだ。
バシアは直ちに輕い波蘭の軍刀を右の手に持つて位置に立つた。左の手は背後へ廻した。胸を前へ突出して、頭を擡げて、鼻の孔を大きくした。その狀がいかにも美くしく、薔薇色なので、ザグロバはミカエルの妹に囁いた。「百年經つた匈牙利酒を一杯入れた壜を見ても私はこれほど嬉しくはない」
「一寸申して置きますが」と小武士がバシアに言つた。「私は唯守るだけで、攻めは致しませぬ。いくらでも早く攻撃して御らんなさい」
「さうですか。お止めなされたかつたら、一寸言つてちやうだい」
「止めたければ、何も言はないでも止めることが出來ます」
「どうして出來ますの」
「あなたの手から、雜作なく刀をもぎ取つてしまふ」
「さうされて見たいわ」
「失禮だから、さうしません」
「失禮なことはないわ。出來るなら、さうして御覽なさい。私は貴君より下手に定つてますけれど、さうされませんから」

「さうしても宜いですか」
「宜いですとも」
「宜いなんて言つてはいけない。嬢さん」とザグロバが言つた。「この人に遇つてはどんな達人でも皆刀を もぎ取れるのだから」
「さうされて見たいわ」
「さあ、始めませう」とミカエルは處女の自慢を聽いてゐられないので促立つた。
始まつた。バシヤは野の駒のやうに跳ねまはりながら激しく突いてかゝつた。ミカエルは例の通り刀を輕く動かして、一つ所に立つてゐる。攻撃に尠しも痛痒を感じないやうである。
「蠅のやうに私を掃ひのけなさるのね」とバシアは氣を苛立つて言つた。
「あなたを試してゐるのではない。敎へてゐるんです」と小武士が答へた。「それで善い、女子にしては拙くはない。もつと確り腕に力を入れて」
「女子ですと。私のことを女子と仰しやるの。え、え」
ミカエルはバシアが力一杯突を入れても、平氣だ。やがて、ザグロバと話を始めた。バシアの突撃など尠しも氣をつけてゐないことを示さうと思つてか、「窓の所を退いて下さい。嬢さんの影になるから。刀は針より大きいから、嬢さんは刀を持つことにあまり慣てゐない」

バシアは鼻の孔を一層廣くした。前髪は燃ゆる眼に垂れ下つて。「莫迦になすつて？」と息をせいせいしながら尋ねた。

「あなたを莫迦にしやせん。そんなことはありません」

「私、ミカエルさまが、憎らしい」

「小學校の先生から、嬢さんは撃劍を習つたんでせう」ミカエルはまたザグロバの方へ向いた。「雪が降つて來たやうですな」

「さあ、雪ですよ、雪ですよ、雪」とバシアは言ひながら突撃又突撃した。

「バシア、もう澤山でせう。そんなに息を切して」とマコヴエッキイ夫人が言つた。

「刀を確り持つてゐなさい。打落しますから」

「拜見しますわ」

「やあ」小さい刀はバシアの手から鳥のやうに飛んで、暖爐の側にがら〳〵と落ちた。

「私、想はず、刀を飛したんだわ。あなたが飛したんではないのよ」と若い娘は泣聲で叫んで、刀を取つて來て、直ぐ又突撃を入れた。「もう一度」

「そら」とミカエルが言つた。刀はまた暖爐の側に落ちた。「今日はこれだけ」と小武士が言つた。

マコヴエッキイ夫人は例より高い聲で喋舌り出した。けれどもバシアは部屋の眞中に立つたまゝ、

當惑して、目舞ひがして、息をせい〳〵して、唇を噛んで、眼に集つた涙を抑へてゐた。泣き出せば尙ほ笑はれることを知つてゐたので、靜然と辛抱した。それでも抑へ切れなくなつて、急に部屋から飛び出した。

「あれ」と マコヴエッキイ夫人が叫んだ。「厩舎へ駈込むんですよ。熱せてゐるから、風邪を引くといけませんわ。誰か往かないと。クリシャ、お前さんは往きなさるな」

かう言つて、夫人は出て往つた。控の間で溫い肩掛を取つて、厩舎に急いだ。その後からザグロバも小さい匈牙利兵のことを心配して走つて往つた。クリシアも亦往かうとすると、小武士はその手を押へた。「あなたは留られたんでせう。あの人達が歸つて來るまで此の手を放しません」

實際彼は手を放さなかつた。その手は繻子のやうに柔かかつた。ミカエルは溫かな流がその細い腕から自分の骨まで流れて來るやうに思つて、非常に氣持が善つた。で、益々堅くその手を握つた。クリシアの面はほんのりした。「私、あの、捕虜のやうですのね」

「こんな捕虜を取つた者は、サルタン（土耳古皇帝）を羨むに及びません。サルタンはこの捕虜のためなら歎んで王國を半分與れませう」

「あなたは私を異教徒にお賣りになりはしないでせう」

「惡魔に自分の靈魂を賣らんと同じやうに」

ミカエルは一時の情熱に驅られて行過ぎたと氣がついて、言ひ直した。「私の妹を賣らんやうに」

「ほんとうですわ」とクリシアは眞面目に、「私はあなたのお妹樣の妹ですから、あなたにも矢張さうですわ」

「それは有難い」とミカエルはクリシアの手を接吻して、「私は大に慰められますので」

「さうですわね、さうですわね」と若い娘は繰返した。「私は孤兒ですもの」

小さい涙はクリシアの眼瞼から轉落ちて、唇の側で留つた。

ミカエルは微に震へる口許に留つたその涙を見て、「あなたは眞實に天使のやうな方だ。私はもう慰められました」

クリシアは嬉しげに笑つて、「それは善いですのね」

「はあ、善いです」

小武士はやがてもう一度クリシアの手を接吻して、もつと慰められたいと思つてゐると、恰度その時妹の姿が見えた。「バシアは肩掛を着ました。でも氣が落着かないものだから、どうしても内に參りません。ザクロバさまが厩舍中追ひまはして居られます」

實際ザグロバは戯談を言つたり、勸誘たりして、厩舍中バシアを追ひ廻はしたが、やがて庭に追ひ出した。そして溫い家に入るやうに勸めた。所が、バシアは遁げながら「參りませんよ。風邪を引いてもかまいませんよ。參りませんよ。參りませんよ」と繰返した。

遂に家の前に梯子が倚かけてあるのを見て、栗鼠のやうにその梯子に驅け上つて、足を停めて、屋根の檐に倚りかゝつた。そこに腰を下して、ザグロバの方へ向いて、半分笑ひながら叫んだ。

「これまで登つてゐらしやれば、參りましてよ」

「あなたを追ひかけて屋根へ這ひ上れば、猫みたいぢや。こんなに可愛がつてあげたお禮にそんな事をするのか」

「私もあなたを可愛がつてよ、屋根から」

「お爺さんはこちらが善いし、お婆さんはあちらが善いのぢや。さあ、下りてお出で」

「下りませんよ」

「そんなに心まで敗北するのは可笑しい。あなたばかりぢやない。怒ん坊の鼬さん。達人中の達人といはれるクミタでもミカエルには同じやうな目にあつた。稽古ではない、決鬪してぢや。伊太利、獨逸、瑞典の最も名高い劍士でも、『われらの父よ』と言ふ間だけしか彼の前に立つちやゐられん。それを虹が氣にかけるといふ法はない。何だ。耻しくないか。さあ、下りた。下りた。まだ稽古の始めぢやらうが」

「でも、ミカエル樣が憎らしいもの」

「まあ、可い。あなたが習はうとする事にはあまり先生が偉過ぎるのぢや。あなたは段々彼を愛するやうになる」

ザグロバは誤らなかつた。敗北にも係らず、バシアが小武士に對する尊敬を増してゐた。けれども

バシアは「クリシアさんにあの方を愛させた方が可いわ」と答へた。

「下りな、下りな」

「下りませんよ」

「それなら、そこにゐなさい。一つ言ふ事がある。それ、娘の木登見たとないつてな。物笑ひぢや」

「そんな事ありませんよ」とバシアは手で裾を集めた。

「私は年老ぢやから、見やせん。でも、皆なを呼んで來て見せてやる」

「下りますよ」とバシアが叫んだ。

そこでザグロバは家の方を向いて、「おい、誰か來い」と叫んだ。

所で實際家の隅の後から若いアダム・ノヴオヴエスキイが馬に乘つて現はれた。横の門に馬を繋いで、家を廻つて、表門から入らうとしてゐる。バシアはそれを見て、二飛びで地に下りたが、晩かつた。不幸にもアダムはバシアが梯子を飛んでゐる所を見た。當惑し、吃驚して、若い娘でもあるやうに赤面して立つてゐる。バシアも赤面してその前に立つて、遂に叫んだ。

「二度目の失敗！」

ザグロバは大に興がつて、暫く健い方の眼を瞬いてゐたが、遂に恁う言つた。「ノヴオヴエスキイ殿だ。ミカエルの友人で屬官。これはドラビノヴスキイ（梯子）嬢です。いや、エゾルコウスキイだつけ」

アダムは漸く落着いた。若いが、頓智に長けた軍人なので、お辭儀をして、愛すべき異象の姿を見上げながら、「お影さまで、薔薇の花がケトリングの庭の雪の中に咲きましたな」

バシアもお辭儀をして、呟いた。「あなたでなく、誰かに嗅がれるためにね」そして大變快活になつて、「内に入らしやい」

バシアは歩き出した。部屋の中に驅込んで見ると、ミカエルと一同が坐つてゐた。で、アダムの赤い軍服にこじつけて、「赤鷺が來ましたよ」と叫んだ。そしてバシアは洋卓の側へ坐つて、手を組合はせて、端正に嚴格に仕つけられたお嬢さんのやうに口を結んでゐた。

ミカエルは若い友人を妹とクリシアに紹介した。友人は同樣に美しい、然も容子の違つた他の一人の若い嬢さんを見て、またもや當惑した。その當惑を隠すためにお辭儀をして、勇氣を出してから、未だ碌に生えもしない髭に手をやつた。唇の上で髭を捻りながら、ミカエルの方へ向ひて、來た譯を話した。大元帥が小武士に遇ひたがつてゐられる。アダムの推察する所によれば、何か軍事上の用向である。元帥は近頃ウクラインとポドリアに滯在してゐるヴイルチコヴスキイやシルニツキイや大佐

ビヴオその他の司令官から書狀を受取つたが、クリミアの事件は思はしくない樣子である。

「クリミアの汗と土耳古帝ガルガとはボドハイツで我々と條約をしましたので」とアダムが語を續けた。「その條約を遵守したがつてをるのですが、ブジャクは蜂の巣に蜂が群るやうに騷々しいので。ベルグロドの牧民も騷擾してゐます。クリミヤの汗やガルガには服從したくないんでせう」

「ソビエスキイ殿はもうその事を私に話して、相談をかけられた」とザグロバが言つた。「來春どうすると言ふのですか」

「初草と一緒にこの厄介物は確に騷動を起すから、二度踏みつけておくのが必要だといふことです」とアダムは畏ろしい軍神の面を氣取つて、上唇の赤くなるまで髭を捻りながら答へた。

目敏いバシアは直ぐそれを認めた。尠し後へ退つてアダムに見えないやうにして、若い武士を眞似て、無い髭を捻つてゐる。ミカエルの妹は眼つきで脅したが、笑ひたいのを我慢して、身を震はせた。ミカエルは唇を嚙んだ。クリシアは長い睫毛が頰に影をさすまで眼を伏せた。

「貴君は若いが、老練の軍人ぢや」とザグロバが言つた。

「私は二十二歳です。七年間休みなく國家に盡してをります。十五の時に學校のびり尻から戰場へ逃出しました」

「この人は曠原を知つてゐるし、草の中へ路の付方も知つてゐるし、鳶が松鷄を襲ふやうに牧民を襲ふとも知つてます」とミカエルが言つた。「平凡な隊長ではない。韃靼人は曠原でこの男の眼を通れることは出來ない」

アダムは斯る有名な人の口から婦人の前で讃られるのが嬉しくつて赤面した。彼は曠原の鷹であるばかりか、風に曝されて褐色に黑くなつた立派な男子である。顏には耳から鼻に傷痕があつた。その鼻はこの傷のために片方が薄くなつてゐる。彼は遠方を見るに慣れた素早い眼を持つてゐる。その上に甚だ黑い眉毛が鼻筋で連結いて、宛然韃靼の弓の形をしてゐる。頭は橫を剃落して、黑い房々した前髮に圍まれてゐる。彼の談話と態度とはバシアを樂しました。でも、バシアはその眞似を止めなかつた。

「生きてる間に」とザグロバが言つた。「有爲の若者がどん〴〵出て來ることは、私のやうな老人の眼には愉快なことぢや」

「まだ有爲ではありません」とアダムが答へた。

「その謙遜が有難い。あなたは直き司令官になりなさらう」

「もう爲つてゐるです」とミカエルが叫んだ。「この人は司令官になつて、自分の力で勝利を獲たことがあります」

アダムは拔けはせんかと心配されるほど强く髭を引張り始めた。バシアは彼に眼を放さずに、面に

兩手を揚げて、事毎にその眞似をした。怜悧な軍人は一座の眼が片方に向いてゐることを忽ち認めた。その方角は少し自分の後で、梯子の上にゐた孃さんの坐つてゐる所である。で、直ぐ何か惡戯されてゐるに觀破した。で、何も氣がつかぬやうに語りながら、前のやうに髭を索してゐた。遂に時を見計らつて、急に振向いたので、バシアは彼から目をそむけることも兩手を面から取る閑もなかつた。バシアは眞赤になつて、どうして善いか解らずに、椅子から身を起した。一同當惑して、暫く默つてゐた。

バシアは突然兩手で横腹を叩いて、「三度目の失敗！」と銀のやうな聲で叫んだ。

「孃さん」とアダムは興奮して、「私は後の方で惡戯をされてゐると直ぐ悟りました。私が髭を生したいと心配してゐるのは事實です。所で髭が生なかつたら、國家のために討死するからです。そんな事になつたら、孃さんは笑はずに涙を流して下されたいし」

バシアは眼を伏せたまゝ立つてゐた。武士の眞摯な言葉に心から耻かしくなつた。

「この娘を赦してあげなされ」とザグロバが言つた。「若いので亂暴ぢやが、黄金のやうな心の女で」

バシアはザグロバの言葉を强めるやうに、低い聲で直ぐ言つた。「どうぞ御免なさいね」

アダムは直ぐにバシアの手を取つて、接吻した。「どうぞ御心にかけ給ふな。私はそれほど野蠻ではありません。私こそ、あなたのお娯樂の邪魔をして濟みませんでした。我々軍人は滑稽が好きでして。

Mea culpa（私の過失です）。もう一度御手に接吻を。お赦しになるまで、接吻せねばなりませんなら、晩まで赦して下さらんでもかないません」

「あゝ、禮儀正しい方。御覽なさい、バシア」とマコヴエッキイ夫人が言つた。

「さうですのね」とバシアが答へた。

「まあ、それで可いです」とアダムが叫んだ。

恁う言つて、彼は身を直立にした。例の通り髭に手をやつたが、突然氣がついて、腹を抱へて笑つた。バシアも笑ひ出した。他の人達も笑つた。一座は笑ひ頽れた。ザグロバは直ちにケトリングの穴藏から一二本の酒瓶を持つて來るやうに命じた。一同大歡びだ。アダムは柏車と柏車を打付けて、前髪に指を入れて、益々熱心にバシアを見てゐた。バシアは大に彼の氣に入つた。彼は非常に能辯になつた。元帥に仕へてから、大きな世界を見たので、話材のたねが澤山にあつた。彼は議會とその閉會の事を話した。元老院で傍聽者があまり前へ乘出して暖爐を轉倒したことを話して、皆なを笑はせた。晝飯がすむと、彼は眼と心にバシアの姿を寫して立ち去つた。

八

その日ミカエルは元帥の宿所に參上した。元帥は小武士を引見して、恁う言つた。「クリミアの形勢

視察と汗を促して條約を遵奉させるために、ルスシッを派遣せにやならん。で、貴君は現役に復して、ルスシッに代つて司令をして下さらんか。貴君とヴイルチコフスキイとシルニッキイとビヴオとでドロシエンコと鞭韃とを警戒して下すつたら、到底暫くは侵撃して來ることは出來ない」

ミカエルは悲しくなつた。彼は青春の時を軍務に獻げた。何十年の間一日も休んだことはない。火の中や煙の中を、睡らずに苦勞して、頭を蔽ふ屋根もなく、身を横へる一握の藁もなくつて暮して來た。その刀には淋漓たる血を注いだ。家も持たず、妻も迎へない。百倍も劣つた人達は恩功の扶持を貰つて、名譽や位官や政權にあづかつてゐる。彼は軍籍に身を置ぬ前の方が富裕であつた。然るに尙彼は古帯のやうに使はれんとするのだ。斷腸の想がある。友人や佳人が自分の傷を漸く繃帶してくれたかと思へば、命令が下つて、自分を引割いて、心の重い疲れをも顧みず、民政國の遠い境の砂漠に追ひやらうとするのである。障礙や軍務がなければ、尠くとも數年はアヌシヤと樂しく暮せたのである。これを想ひ、かれを想へば、心苦しさは千萬無量である。併し自分の功勞を數へて、それを誇るのは武士の作法でないと思つて、唯一言、

「參りませう」と言つた。

「貴君は現役ではないから、辭退しても差支へない」と元帥が言つた。「あまり急な事でいかにも御氣の毒ぢや」

「死ぬにはあまり急では御座りません」とミカエルが答へた。

ソビエスキイは幾度となく部屋の中を歩いてから、小武士の前に立留つて、親しげにその肩に手を載せて、「まだ涙が乾かないなら、曠原の風に吹れて乾かして下され。これまで骨折つて下されたことはいかにも有難い。これからも骨折つてもらひたい。貴君の頭に報酬を受けずに忘れられた、休みを與へられなかつた、バタをつけた麵麭の代りに麵麭の皮を受取つた、政權の代りに傷を受けた、休息の代りに苦痛を受けたといふやうな考が浮んで來るだらうが、その時には齒を合はせて、『國家のためだ』と言つてもらひたい。自分は他の安慰を持んから與へることは出來ない。他の者は馬車やなにかで乘り廻してゐるのに、貴君が破れ鞍に乘つて進んでゆくといふのは、莫迦〳〵しからうが、その代り彼等の前に閉られた門が貴君のために開かれてゐるのぢや。自分は僧侶ではないが、貴君のためにさう確言することが出來る」

「國家のためだ」とミカエルは心から言つた。そして元帥が自分の胸の想を早くも見破つたことを不思議がつた。

ソビエスキイは彼の前に坐つて、語を續けた。

「私は臣下としてゞなく、友人として貴君に語りたい。いや父が子に對するやうに語りたいのぢや。我々はポドハイツで兵火の中にあつた。その前ウクラインでもさうで、その頃は敵を支へるだけの力

がない。内には惡人原が私利を營んだりするので、當時私は幾度も民政國は滅ぶると思つた。諸侯は勝手な振舞をして、命令を奉せず、公共の利害を思はず私欲を事としてゐた。あれほど甚しい事は何處にもあるまい。戰場にある日、天暮にある夜。これを想へば堪へ難かつた。私は獨り考へた。我々軍人は慘憺たる境遇にあるが、併し我々の義務である。我々の本分である。我々の傷口から流れる血を以てこの國家が救へるのだと解つてをれば、何んの事もないが、さういふ慰安さへなかつた。私はボドハイツで悶々の日を送つた。それでも貴君方軍人に樂しさうな面を見せてゐたのは貴君方が戰場で勝利の望みを失ふことを心配したからである。私は想つた。眞にこの國を愛する者は誰もない。誰もないと。私はボドハイツの最後の日まで、自分の胸に小刀を擬してゐる者があるやうに苦しんだ。貴君方はその最后の日に二千の軍勢を以て二萬六千の牧民を攻擊した。貴君方は死地に飛込んだ。屠殺所に乘込んだ。婚姻の席に行くやうな歡呼の聲を以て進んだ。その時私は突然、『あゝ、これこそわが軍人である』と想つた。神はその時わが胸から重い石を除いて、わが眼を明かにされた。私は吐いた。『この軍人等は母の純き愛から滅びつゝある。彼等は同盟にも加はらず、謀叛人にもならぬ。この人達を以て、聖き同胞を作らう。この人達を以て、學校を作つて、青年を學ばせやう。彼等の模範は感化力を有する。彼等を通して、この薄命の人民は再生するだらう。私欲を離れ、我儘を忘れ、四肢五體に驚くべき力を感ずる獅子の如くなつて、世界を驚かすであらう。斯る同胞はわが軍人から作られるであらう！」

ソブエスキイは恁う言つて顏を赤くして、羅馬皇帝に似た頭を擧げて、兩手を擴げて叫んだ。「あゝ神よ、わが壁に、Mene, Tekel, Peresと記さしむる勿れ。わが國を再興することを許したまへ」（メネは「數へたり」、テケルは「秤れり」、ペレスは「分たれたり」の義にて亡國な意味す舊約ダニエル書五〇廿五參照）

暫く沈默が續いた。ミカエルは首を垂れて、全身をぶる〳〵させてゐた。

元帥は部屋の中を足早にあちこちして、小武士の前に停つて、「模範が必要である」と言つた。「眼を驚す模範が必要である。ミカエル、私は貴君を同胞の第一位に數へる。第一位たることを欲しますか。

小武士は起上つて。元帥の膝を抱へた。感慨に滿ちた聲で言つた。「私は再び出陣せねばならんと伺ひました時に、都合の惡いやうに想ひました。私が悲しみを縱にする閑暇を獲たいやうに想ひました。ですが、私は惡かつたと思ひます。そんなことを想つたのを後悔します。自ら耻てゐますので、言ふべき言葉もありませぬ」

元帥はミカエルを默つて胸に押しつけて、「我々は小人數だが、他の者は模範に從ふだらう」

「何時行きませうか」と小武士が言つた。「私はクリミアに居つたこともありますので、そこへ行つても宜う御座います」

「いや」と元帥が答へた。「クリミアには、ルスシツ殿を遣はさう。彼はそこに親戚があるので。同名

の從兄弟で、子供の折に牧民に捕はれて、回々教徒となつて、異教者の中で立身したさうである。彼等は何事につけ彼を助けるであらう。私は貴君を戰場に遣はしたい。韃靼人と對戰するには貴君と並ぶ者はないのだから」

「何時行きませうか」と小武士が繰返した。

「長くつて二週間の中に、一應副大法官や財政官と商議してから。ルスシッに書狀を認めて、訓令を與ふる必要もあるぢやて。併し促立てるかも知れんから、準備しておいていたいきたい」

「明日でも差支へありません」

「その決心は實に有難い。併しそんなに早く立つにも及ばん。且つ又平和が續くやうなら、長く滯在せんでも可いかも知れぬ。選擧中ワアサウで貴君を要することもある。種々候補者のことをお聽きだらう。貴族間にどんなことが言はれてますな」

「私は寺を出たばかりでして、世間の事を存じませぬ。ザグロバ殿から聽いたことがあるだけです」

「成程、私もザグロバ殿から報知に接しました。あの老人は貴族間に廣く知己があるやうだ。だが、貴君は誰を選擧したら可いとお思ひか」

「私は一向解りませんが、剛毅な王樣でなくてはと思ひます」

「さうぢや、さうぢや。私もその名を聽いたら隣國が畏れるやうな人物でなくてはと思ふ。ステフアン・バトリーのやうな剛毅な王が必要である。やあ、さやうなら、ミカエル殿。我々は剛毅な王が必要である。誰にでもさう言つてもらひたい。さやうなら。出陣して下さることはいかにも有難い」

ミカエルは暇を告げて、退出した。途々想に耽つた。彼はまだ一二週間の餘裕があることを歡んだ。クリシアの友情と安慰とはそれほど彼に懷しかつた。又選擧の時には歸れる。大抵滿足に歸つて來られると想つて歡んだ。それに又曠原も彼の心を引着けるものがあつた。知らず識らず、曠原に憧れた。この騎士は人間を離れて鳥のやうな想する窮りなき野原に慣れてゐた。

「可し、行かう」と彼は言つた。「際限のない野原、砦と堤に行つて、再び昔の生活を味はう。兵士と共に新しい陣屋を作つて、鶴の如く邊境を護つて、春草の中に戯れやう。可し、行かう、行かう」

やがて馬を疾驅させた。その迅さと耳に響く風の音とに憧れたのである。朗に乾いた寒い日であつた。凍れる雪は地を覆ふて、馬の脚の下にざく〳〵した。雪の玉が蹄に跳ね飛された。ミカエルは急ぎに急ぐので、劣つた馬に乘つた從者は遠く後に殘された。日沒に近い。最後の光は天にあつて、地の雪に菫色に映つた。赤い空には最初の星がきら〳〵した。銀の鎌形の月が出た。路は荒れてゐる。折々馬車を乘越して、休みなく馬を驅つた。ケトリングの家が見えるまでは、手綱を緩めず、從者に追ひつかれもしなかつた。

突然細い姿が彼の方へ近づいて來た。それはクリシアであつた。

クリシアを認めて、ミカエルは直ちに馬から飛び下りた。馬を從者に委せて、處女の側へ急いだ。彼女を見てやゝ驚きもしたが、嬉しさはそれ以上であつた。「兵士の言ふ所によると」と彼は言つた。「黄昏には種々な變化に出遇ふことがあるさうです。それは惡い兆なともあるし、善い兆なともある。だが、あなたに遇ふほど私に善い兆は御座いません」

「アダム樣が入らしつて」とクリシアが答へた。「バシアさんとマコヴエッキイの叔母樣がお相手をしてゐられます。私はあなた樣をお出迎へしやうと思つて窃つと脱けて參りました。元帥の仰しやることが心配でしたから」

その想ひやりある言葉に小武士は心から感動した。「私のことをそれほど心配し下さるのは事實ですか」と眼をあげてクリシアを見ながら言つた。

「はい」とクリシアは低い聲。

ミカエルはクリシアから眼を放さなかつた。今までこれほど引着けられたとはない。クリシアは頭に繻子の頭巾を被つてゐた。白い鵠の毛はその小さな雅しい顔を包んだ。月の光はその顔に落ちた。品のある額や伏目や長い睫毛や唇の上の殆んど見えないほどの暗い初毛を柔かに照し出した。靜かな極めて純潔な表情である。ミカエルはそれをいかにも親しく懷しく感じた。そして恁う言つた。

「後に從者がゐなければ、雪の上に跪いて感謝したい位です」

クリシアは答へた。「ねい、そんな事を仰せられますな。私はそんな値ある者ではありませんのよ。あの、私共と一緒に御滯在あそばして、もつと慰めて差上げますことが出來さすのですが」

「滯在することが出來ません」と彼は答へた。

クリシアは突然立留つて、「そんな事は御座いますまい」

「例の通りの軍務で、露西亞と曠原とに參らんと」

「軍務」とクリシアは繰返した。

默つてクリシアは家に急いだ。ミカエルは稍狼狽してクリシアと並んで早足になつた。彼の心には鈍い壓へつけられるやうな感があつた。何か言ひたいのだ。もう一度談話をしたいのだが、どう言つて可いか解らない。クリシアに言いたいことは山ほどある。今はその時だ。二人切で、誰も側にはない。

「話を始めたらどうにかなる」と想つて、突然問ねた。

「アダム殿が來てから程餘經ちますか」

「そんなになりません」

又談話は途切れた。

「こんな事はなかつた」とミカエルが想つた。「かうして口を開いて、話の出來なかつたことはない。

悲哀のために僅かばかり殘つてゐた知慧も消え去つたと見える」

彼は口をむぐ〳〵しながら默つて歩いた。戸口に來ると、彼は立留つて、言つた。「これまで永年國家へ盡すために、自分の幸福を顧りみなかつたですから、今更自分の慰安を捨てたくないなどとは申されんのです」

ミカエルはこの明白な理窟で直ちにクリシアを信服させたと想つた。實際尠し間をおいて、クリシアは悲しげに又柔しく答へた。

「どなたでもあなた樣を親しくお知り申せば申すほど、益々あなた樣を尊敬いたすで御座いませう」

クリシアは家に入つた。バシアの「アラア、アラア」といふ叫び聲が戸口でクリシアの耳に達した。應接間に入つて見るとアダムが眞中に、目隱をして、前に屈んで、腕を擴げて、バシアを捕へやうとしてゐる。バシアは隅に隱れて、「アラア」と叫んでは、自分の居る所を注意してゐる。マコヴエッキイ夫人は窓の側でザグロバと談話に餘念ない。

クリシアと小武士が入つて來たので、遊戯は妨げられた。アダムは半巾を脱して、ミカエルに挨拶するために走つた。直ぐその後からマコヴエッキイ夫人とザグロバと息を切してゐるバシアが來た。

「どうでした、どうでした。元帥は何んと言ひましたか」と我勝に聽いた。

「妹」とミカエルが言つた。「主人に手紙をやりたいなら、恰度好い。私は露西亞に往きますから」

「遣れますの。どうぞ止めて下さい、行かないで下さい」と妹は悲しげな聲を出して、「尠しは閑を下すつても可いでせうに」

「もう命令は定つたですか」とザグロバが言葉重く問ねた。「妹御の言はれる通り、まるで連枷で打擲するやうなやり方ぢや」

「ルスシツはクリミアに行きます。私は彼に代つて軍勢を率ゆるのです。アダム殿が先に言はれたやうに、春になつたら確に敵の群衆で路は黑くなるだらうとのことで」

「我々ばかりがこの民政國を盗賊から護らねばならんだらうか、犬が家を護るやうに」とザグロバが叫んだ。「他の者は鐵砲のどの尻から發砲するか知らんぢやからな。で、我々は休みがないのぢや」

「御心配下さるな。何も言ふ事はありません」とミカエルが答へた。「軍務は軍務です。元帥に行きませうと言つたからには、早くつても晩くつても同じ事です」

ミカエルは恁う言つて額に手を當てゝ、先にクリシアに言つた理窟を繰返した。「民政國のために多年自分の幸福をないものにして來たのだから、どんな顏をしてあなた方と一緒に居る愉快を捨てるのは嫌だと申されませう」

誰もこれに答へなかつた。バシアだけは彼の側へ寄つて癇の強い子供のやうに唇を突出して、恁う言つた。「ミカエルさまはお氣の毒ね」

ミカエルは嬉しげに笑つた。「さう言つていたゞけば有難い。それでも、あなたは昨日野蠻な韃靼よりも私が癪にさはると言はれましたな」

「何な韃靼ですと。私、そんなことを申しません。あなたは韃靼人と戰爭をなさいますのね。私共はあなたがゐらしやらないから、茲で寂しく暮しますわ」

「いや、小さい匈牙利兵さん、御安心なさい。匈牙利兵など申して失禮だが、不思議に能くその名があなたに似合ふ。元帥は長く指揮をせんでも宜いとのことでした。一二週間の中に出立します。選擧の時にはワアサウに居らねばならんので。元帥はその時には參るやうにとのことでした。ルスシツが五月にクリミアから歸らんでも、私は茲へ歸つて來ます」

「まあ、それは嬉しい」

「私は大佐と一緒に參ります。必ず參ります」とアダムが急にバシアを見ながら言つた。バシアはそれに答へた。

「あなたのやうに參りたい方は少なくありませんわ。こんな大將の下に働くのは樂しみでせうからね。行らしやい。行らしやい。ミカエルさまは尙愉快でせうから」

若者は嘆息を吻いて、廣い掌で額を叩いた。やがて兩手を擴げて、隱れん坊の鬼になつて、

「さあ、第一にバルバラさんを捕へなければあ。必と捕へますよ」

「アラア、アラア」とバシアは後へ飛びのいて叫んだ。

やがてクリシアはミカエルの側へ寄つたが、その額は輝いて、靜かな歡びに滿ちてゐた。「あなた樣は御親切で御座いませんのね。私にだけ御親切では御座いませんのね。バシアさんの方が私よりもお宜しいのでせう」

「私か親切でない。バシアさんの方が善い？」と武士は驚いて問ねた。

「だつて、バシアさんには選擧の時に歸つて來るとお話しなすつたでせう。私もそれを存じたら、御出立を氣にかけないでも宜つたですもの」

「いや、可愛い……」とミカエルは叫んだが、直ぐ自ら制して、「クリシアさん、先程は頭がどうかしてゐたので、あなたに何も言はなかつたです」

九

ミカエルはそろ〳〵出立の準備を始めた。けれどもバシアに稽古を怠らなかつた。彼も益々バシアが好きになつたので、クリシアと二人切りて散歩して、慰められないでも可くなつた。彼は慰めを見出したやうだ。その快活は毎日增した。夜になるとバシアとアダムの遊戯の仲間入をした。この若い騎士はケトリングの家に愉快な客となつた。彼は朝から出かけたり午頃來たりして、晩までは居る。

誰からも好かれてゐるので、皆彼の來るのを喜んでゐる。間もなく家族の一人のやうになつた。彼は婦人達をワアサウに連れて往つて、呉服店で買物の手傳ひをしたり、晩になると、隠れん坊をして、出立前にどうしても一度逸早いバシアを捕へねば承知が出來ぬと言つた。

バシアは笑つて、いつも逃げ廻つた。ザグロバはバシアに恁う言つた。「この男が最後まであなたを捕へなければ、他の人が捕へるさ」

「この男」がバシアを捕へやうと決心してゐることは段々明かになつて來た。それが匈牙利兵の頭にも思ひ浮んだと見えて、時々前髪の眼に垂れ下るまで考へ込むことがあつた。ザグロバの見る所ではアダムは適當な人物でなかつた。或夜一同退散した後で、彼はミカエルの部屋を訪づれた。

「別れは辛いものぢや」とザグロバが言つた。「で、ゆつくり顔を見たいと想つてやつて來た。いつ又遇へるかしら」

「選擧には必ず歸ります」と小武士は老友を抱きながら、「何故と申すに、元帥は武士道にゆかりある人々を出來るだけ澤山集めて、貴族に打勝つて此方の候補者を推選したいと思つてゐられますからな。有難い事には、私の名は同胞の中に幾分重味があるので、私にも是非來るやうにとの事でした。元帥は貴老をも數へてゐました」

「實際元帥は大きな網で私をも捕へやうとしてをられる。ぢやが、私は盲目ではない。大き過ぎても、網の目から這ひ出るつもり……。私は佛人には投票しない」

「何故です？」

「彼は專制政治を施すだらうから」

「コンデは他の人と同じく誓約をなすのでせう。彼は偉大な指導者ぢやないですか。勇敢な行動で有名なんでせう」

「いや、なにも我々は佛蘭西で指導者を索すには當らんさ。ソビエスキイ殿その人だつて確にコンデよりも惡くはあるまい。考へて見い、ミカエル。佛人は瑞典人のやうに長い靴下を穿くので、矢張誓約を守りはせんよ。カロルス・グスタフスは一時間毎に誓約をしたぢやないか。所が瑞典人には誓約をするのも、胡桃を嚙み碎くのも同じ事さ。人間が正直でなければ、誓言が何になる」

「でも、民政國は軍備が必要です。あゝエレミイ公さへ生きてゐられたらな。彼の人なら一齊に王に選擧するのだに」

「彼の息子が生きてゐる。同じ血統だ」

「でも同じ勇氣はないでせう。あの息子に望みをおくのはお慈悲でさ。門閥の高い貴族といふよりも侍童といふ格だ。時勢が違つたら兎に角、現在第一に爲すべき事は國家の利益を考へることでせう。ヤン殿も同樣に言つてました。元帥のする事なら、私もさうします。元帥が神の福音を愛するやうに

民政國を愛することを信じますからな」
「その事を考ふべき時ぢやて、貴君が今行くのは善くない」
「貴老はどうなさるのです」
「私はヤン殿の所へ行きます。あの子供らは時々私を困らせるが、あまり長く離れてゐると、矢張寂しい」
「選擧後戰爭することになると、ヤン殿も出陣するでせう。いや、貴老も戰場にお出でになる事があるかも知れない。露西亞で又一緒に野營をしませうか。善惡共に種々な場所を踏んで來ましたな」
「眞實に、我々の最も善い年月はさうして送つたのぢやな。我々が勝利を獲た戰場をもう一度見たいと思ふ事も時々起るな」
「それなら私と一緒にお出でなさい。愉快に暮しませう。五ケ月の中にはケトリングの家に歸るつもりです。その頃はケトリングも家に居りませうし、ヤン殿も茲に居りませう」
「いや、ミカエル、もオ私の出る時ぢやない。でも、貴君が露西亞の地で或る婦人とでも結婚するなら、御住居を見に行くことを約束しやう」
ミカエルは少し周章へて、直に答へた。「どうして私が妻帶しやうなど思ふものですか。その最も善い證據は恁うして出陣するでは御座らぬか』

「私が心を惱してゐるのはそれぢや、一人の女がいけなければ、もゝ一人の方をと思つてるのでな。ミカエル、能く考へて、留つたらどうか。これほど善い機會はないぢや。貴君は今に恁う言ふ時が來るに相違ない。『誰でも妻も子もあるに、私は野原に立つマッエクの梨の樹のやうに一人ぼつちだ』とな。そして悲しみに囚はれて、空しく戀ひ焦れるやうになる。貴君が亡なつた戀人と結婚して、子供でも遺つてゐるといふなら、何も心配はせん。愛情を注ぐべき者はあるし、望みを以て慰められもしやう。だが、今のやうな狀態では、あたり近所の者を見廻して、「おれは外國に居るのかしら』と獨語をいふ時が來るに相違ない」
ミカエルは默つてゐた。想に耽つた。それ故ザグロバは小武士の面を見詰めながら、又口を開いた。
「私の心で貴君のために一番好いと思ふのは、あの薔薇のやうな匈牙利兵ぢや。先づ第一、あの女は純金だ。唯の處女ぢやない。第二に、あなたほど猛烈な戰士はまだ此の世界にないのぢや」
「あの娘は暴風です。アダムはあの女と相擊つて火を起すが可いです」
「そこぢや、そこぢや。今なら確にあの娘はあなたを選ぶに違ひない。あなたの名譽を慕つてゐるからな。所であなたが行つてしまつて、アダムが殘るとすると。彼奴は殘るぢやらう、戰爭もないから。すればどんな事になるか解らん」
「バシアは暴風です。ノヴオヴエスキイに貰したら可ひです。彼は大膽な男ですから、私はその幸福

を願ひます」

「ミカエル」とザグロバは手を叩いて、「誰の子孫が善ひと思ふですかい」

小武士はそこで極めて率直に、「私はバルといふ二人の兄弟を知つてゐますが、その母親はドロホヨフスキイ家の者で、二人共立派な軍人でした」（ドロホヨフスキイはクリシアの家名である）

「あゝ、それぢやて、私が待つてゐたのは。その方角に向ひてゐるのだな」とザグロバが叫んだ。

ミカエルは大に周章へて、遂に叫んだ。「何を言ふのですか。私はどつちにも向いてゐやしません。バシアの大膽を實際男らしいと想ふ度に、直ぐクリシアの事を想ひ出します。クリシアは女らしい所が多いやうです。その一人の事を言はれると、もう一人を思ひ出すといふのは、つまりあの二人が一緒に居るからです」

「可し、可し。クリシアと幸福に暮すさ。私が若ければバシアと死ぬほど戀をして見るのぢやがな。あのやうな細君なら戰爭の時でも家に置いておく必要はない。戰場に連れて行つて、側へ置けるさ。あゝいふ女は天幕生活に調法なものぢやて。それから戰爭の時には、女ながらも鐵砲を手にすることが出來るさ。それにバシアは正直で性が善いしな。あゝ、あの匈牙利兵、あの小さい勇敢な匈牙利兵、あの人物が未だ能く貴君に解らんから、それほどに思ひなさらんのだ。私がもう六十年若からうものなら、ザグロバの奥樣にして家に引張來むのぢやがな」

「私はバシアを貶しはしませぬ」

「バシアの人物を貶すの貶さないのといふことぢやない。あれの良人を見付けたいので。だが、あなたはクリシアをお選びぢや」

「クリシアは私の友人です」

「友人か、女の友人ぢやなくつて。するとクリシアに髭がなければならんわけぢや。私はあなたの友人だ。ヤン殿もさうだ。ケトリングもさうだ。男の友人はいらなくつて、女の友人が欲しいのぢやらう。露骨に、まあ言つて見なさい。何も齒に絹着せなくつても可い。ミカエル、女子の友人は用心なさい。その友人に髭があるにしてもだ。あなたがその友人を迷はすか、あなた自身が迷はされるといふことになるから。惡魔は眠つちやゐない。さういふ友人の間に坐り込むのが好きなものさ。これを譬へれば、アダムとエバは最初友人さ。その友情がつまりアダムの咽喉の骨となつたのさ」

「クリシアの惡口は止めて下さい。私は默つて聽いてゐられませんから」

「神はクリシアを護りたまふさ。あの小さい匈牙利兵に優つた者はないが、クリシアも善い娘ぢや。何もクリシアを攻擊するわけぢやないが、まあ、これだけ言ふておかう。貴君がクリシアの側に坐つてゐると、頰べたを抓られたやうに赤くなるし、髭は震へるし、額髮は波打つし、足をかたくさせて斑鳩のやうに地駄々を踏みなさる。それは皆な戀の徵候ぢや。友情などいふことは他の人に言ふが可

い。私はそんな話にはあまり古雀ぢやて」

「有りもしない事を思ひなさるほど年を老られたので」

「私が間違つたら結構さ。あの匈牙利兵が問題になるなら結構さ。ミカエル、お休み。匈牙利兵を貰ひなさい。匈牙利兵の方が優美ぢや。匈牙利兵を貰ひなさい。匈牙利兵を貰ひなさい」

ザクロバは起上つて、部屋から出て往つた。

ミカエルは終夜輾轉反側した。眠れない。穏かならぬ想が始終頭を往來した。クリシアの顔が見える。長い睫毛の眼が見える。初毛のはえた唇が見える。時々眠氣を催すこともあるが、異象は消えなかつた。眼が醒めると、ザクロバの言葉が思ひ出された。老人の知慧はこれまで何事にも誤つたことがないことを思ひ浮べた。夢幻の間にバシアの薔薇色の顔が閃いた。その姿は彼を靜めた。またクリシアが急にその場所を占領した。可憐の武士は壁の方へ寢返りをしたが、クリシアの眼が見える。部屋の暗闇の方へ寢返りをしが、クリシアの眼が見える。その眼の中には戀慕と誘惑の色がある。時々その眼を閉つて、「御心のまゝにあそばせ」と言ふやうである。ミカエルは床の中に起上つて十字を切つた。曉方になると夢は全く飛び去つた。その夢は彼を壓つけるやうな苦々しいものであつた。死んだ戀人を見ないでと想へば、いかにも恥しくつて、我とわが身を責るのであつた。自分の眼も心情も靈魂も死んだ人を想はずに、生きてゐる人で一杯になつてゐるのだ。アヌシアに濟まないと

思つて、一度ならず二度までも身を搖つた。まだ暗かつたが、寢床から飛び起きて、「われらの父よ」と朝の祈を始めた。

ミカエルは祈を終つてから、額に指を置いて、恁う言つた。「成るべく早く行つて、この交際を想ひ留まるやうにせねばならぬ。ザグロバの言ふことは尤もだ」氣輕く心が落着いてから、朝餐に出かけた。朝餐の後で、バシアに稽古をした。初めて氣をつけて見ると、成程バシアは人の眼を引く。鼻をうごめかして、胸を波打せてゐる所がいかにも可愛らしい。彼はクリシアを避けるやうにした。それに氣づいて、クリシアは彼に眼を放さず、驚いて見詰めてゐた。でも、彼はその視線をも避けた。胸が切られるやうだ。それでも我慢した。

晝飯の後で、ミカエルはバシアを連れて、ケトリングが武器を藏つておく庫へ往つた。種々な武器をバシアに見せて、その用方を說明した。やがて二人はアストラカの弓で的を射つたりした。處女はその遊戯が面白くつて、例より跳ねかへるので、マコヴエッキイ夫人に叱られた。恁うして二日目は過ぎた。三日目にミカエルはザグロバと一緒にワアサウのダニロヴイヒ宮殿へ往つて、その出發の日取などを聽合はせた。その夕小武士は一週間の內には出立する筈だと婦人達に話した。磊落に嬉しさうに話をした。クリシアの方へは眼を向けないやうにした。クリシアの方では驚いて、種々な事を問ねたが、友情を以て丁寧に答へた。そしてバシアとは能く話した。

ザグロバはこれを自分が忠告したからだと思つて、嬉しさに兩手を擦つた。何ものをも見遁さぬその眼は、クリシアの悲しみを認めた。「萎れてゐる」と彼は思つた。「明に萎れて居る。でも、可いさ、そんな事は女の通性だ。でも、ミカヘルは思つたより早く心が變つた。やはり偉い男ぢや。でも戀にかけると旋風だ。いつまでも旋風ぢやから」

ザグロバは實際性が善いので、直ぐクリシアを氣の毒に思つた。「直接何も言はん方が宜からうが、どうにか慰めてやらずばなるまい」齡と白髪の功で、彼は晩餐後クリシアの側へ往つて、その絹のやうな黒髪を撫てやつた。クリシヤは靜に坐つてゐたが、溫しい眼で見上げて、柔しくされるのを稍吃驚したが、有難くも思つた。

夕暮にザグロバは小武士の部屋の戸の側でミカエルを肘で衝いて、「どうした。誰もあの匈牙利兵を擊つことは出來んか」

「面白い山羊だ」とミカエルが答へた。「バシアは家の中で四人の兵士が怒鳴る位大きな聲をする。正に鼓手だ」

「鼓手？　出來るだけ早くバシアにあなたの太鼓を持せたいものぢや」

「お休みなさい」

「お休み。女子つて不思議な物ぢやな。あなたが尠しバシアにちやほやなさると、クリシアは萎れてゐる。それに氣がつきませんでしたか」

「いや、氣がつきませんでした」と小武士が答へた。

「押倒されでもしたやうにさ」

「お休みなさい」とミカエルは繰返して、急いで部屋へ入つた。

ザグロバは小武士の心の定らぬことを想ひ過して、控目にクリシアの萎れてゐることを話した。ミカエルはそれを聽いて、喉でも絞られたやうに感じた。

「私の悲しみを慰めて、妹のやうに親切にしてくれた女に對してこれが御禮だらうか」と彼は呟いた。「惡い事をしたと暫く想に沈んだ。「すまん事をした。尠くとも三日の間あの女を顧ひつけなかつた。あの可愛ゆい娘、愛すべきものを顧ひつけなかつた。私の傷を治さうとしてくれたのに、恩知らずのことをした。どうしたらこの危險な交際を程よく制限して、あの女の氣に觸らぬやうに出來るだらう。かういふ事にかけると私はあまり鈍物だ」

ミカエルは自分に對して疳癪を起した。同時に大變氣の毒になつた。知らず識らずクリシアが無實の疑を受けた可愛い人のやうに想はれて來た。自分に對する疳癪は益々募つた。

「私は野蠻人だ。野蠻人だ」と幾度も言つた。胸の中でクリシアは全くバシアを壓倒した。「好きな者にあの山羊を呉れてやつたら可い。あの風車のがら〳〵者を」と呟いた。

「アダムにやらうが、惡魔にやらうが、私には同じことだ」

癇癪は何んの罪もないバシアに向けられた。所で自分がクリシアに冷淡にしたよりも、バシアに對してこんな癇癪を起すのは尙惡いことだと氣がつかなかつた。クリシアは女の本能を以てミカエルの心中の變化を直ぐさま看破つた。小武士が自分を避けるやうにするのは、この處女にとり苦しくも悲しくもあつた。二人の交際はどうにか決着がつかねばならぬ。この儘では續かない。益深くなるか、全く止めることになるに相違ないと早くも悟つた。それ故ミカエルが急に出立するやうになつたことを想へば想ふほど吃驚した。戀はまだクリシアの胸になかつた。處女は自分でも戀してゐるとは想はなかつた。けれどもその心情にも血にも戀する準備は充分にあつた。

クリシアの頭は幾分その方に向いてゐたらしい。ミカエルは民政國第一流の軍人たる榮譽を荷つてゐる。武士は皆彼の名を尊敬した。彼の妹はその名譽を天に揚げた。その不幸は人の同情を引いた。ましてこの若い女は同じ屋根の下に住んでゐるのだから、彼の引力に慣らされた。

クリシアは愛せられることが好きな性であつた。ミカエルが近頃よそ〳〵しく仕出した丈でも、その自尊心を大に傷つけた。性が善いから、怒つた顏や惱しさうな風は見せないで親切にミカエルの機嫌を取らうとした。翌日ミカエルが後悔した樣子なのでクリシアには尙更心安かつた。彼はクリシアの視線を避けないばかりか、「昨日は失禮しました。今日は赦してもらひたい」と言ひたげなのが、クリシアの眼に見えた。彼があまり眼に物を言はせるので、若い娘の顏には血が逆上とした。何か大事件が起るも間がないと思へば、落着いてはゐられなかつた。實際それが起つた。午後にマコヴエッキイ夫人はバシアを連れて、ワアサウに滯在してゐるルヴオフの侍從夫人で、バシアの親戚に當る人の許へ出かけた。クリシアは頭が痛いと言つて往かなかつた。實はこの留守に自分とミカエルとの間に何か起るだらうといふ好奇心があつたので。

ザグロバも侍從夫人の許へ往かなかつた。けれども彼は晝飯の後で數時間晝寢をする癖があつた。そのために身體の肥滿を免かれて、晩になると智慧が明晰すると言つてゐた。で、一時間ばかり喋舌つてから。自分の部屋に退いた。クリシアの胸の皷動は益々穩かでなくなつた。でも、それは唯空な想であつた。ミカエルは跳ね起きて、ザグロバと一緒に往つてしまつた。

「直ぐ歸つていらつしやる」とクリシアは想つた。小さな太皷を取出して、それに帽子の金の頂を縫箔し出した。ミカエルの出立の際に贈るためである。でも、間斷なく眼を上げて、室の隅に懸つて、かち〳〵言つてゐる時計を見た。

一時間經つた。それから二秒過ぎた。ミカエルはまだ見えない。クリシアは膝に太皷を置いて、その上に手を拱いて、低い聲で言つた。「あの方が決心なさる前に、あの人達が歸つて來ると困るわ。さうすると何にも話が出來ない。それからザグロバ樣が目をさましても同じことよ」

この時こそ大切な事を話すべきだのに、ミカエルが愚圖〳〵してゐると想つてゐた。遂にミカエルの足音が次の部屋に聽えたので、彷徨してゐらしやると想つて、精出して縫箔を始めた。

ミカエルは實際彷徨してゐた。室の中を彷徨して、こちらに來やうとしなかつた。やがて太陽が赤くなつて、日沒に近くなつた。

「ミカエルさま」とクリシアは突然叫んだ。

彼は入つて來た。クリシアは忙しく針を動してゐる。

「私をお呼びなされたか」

「誰かお家におゐでかどうか知りたいと思ひましたの。二時間も、私、一人切ですもの」

ミカエルは椅子を引寄せて、その端に腰をかけた。餘程長く默つてゐる。足を洋卓の下でがた〳〵させる。髭は震へた。クリシアは針持つ手を休めて、彼に眼を向けた。眼と眼とは出遇つた。二人共急に眼を伏せた。

ミカエルは再び眼をあげると、夕日がクリシアの顏に當つてゐた。光に包まれて美しい。その髮の毛は赤く熱した金のやうに輝いてゐる。「もう近い中に行らしやいますの」とクリシアはミカエルが漸く聽き取れるほど靜に言つた。

「仕方がない」

また暫く寂然してから、クリシアが言つた。「近頃何か私が御氣にさはりましたやうですのね」

「いや決して」とミカエルが叫んだ。「そんな事があつたら、あなたに申譯がありません。實際何にもありません」

「どう遊ばしたのですか」とクリシアは彼に眼を向けて問ねた。

「率直に申しませう。率直は虛飾よりも常も善いのだから。私は實際あなたから大なる慰めを注いでもらつた。どんなに有難く思つてゐますか」

「そんな事、なんでもありませんわ」とクリシアは太皷の上に手を叉いた。

ミカエルは大變悲しさうに、「なんでもない、なんでもない。……でもザグロバ殿は恁う言ふです。坊さんの前で告白するやうに、あなたの前で告白します。ザグロバ殿は、女子との交際は危險だ。灰に包まれた火のやうに、熱い情を隱してゐるからと言ふです。ザグロバ殿の言葉は正當なやうに想はれます。何をいふにも單純な軍人ですから赦して下さい。他の者ならもつと能く問題を解決するでせう。この二三日あなたを惱したことはいかにも心苦しい。この世がいやになります」

恁う言つて、ミカエルは甲蟲の觸角よりも早く髭を動した。クリシアは首を打垂れてゐたが、暫くすると二つの涙がその頰に轉落ちた。

「さうした方が御心安くございますなら、あなたのお妹のやうな心持を現はしませんやうに致します」

また二つの涙が落ちた。それから第三の涙が頰に傳はつた。

それを見て、ミカエルの胸は全く裂けた。クリシアの方へ飛んで往つて、その手を捕へた。太鼓はクリシアの膝から室の眞中へ轉落ちた。武士はそれには頓着せず、その溫かな柔かな天鵞絨のやうな手を自分の口へ持つて來て、言つた。

「泣きなさるな。どうぞ、泣きなさるな」

ミカエルは悲しい時に人の能くするやうに、顏に當てたクリシアの兩手を接吻した。あまり熱心にその手を接吻したので、その髮の毛や額の溫味が酒を飲んだやうに心を醉はせて、彼の考想を狂はせた。どうして善いか解らなくなつて、唇をクリシアの額に當て、尙熱心に接吻した。やがて、その涙ぐんだ眼に唇を押した。世界がくる〳〵廻るやうに感じた。それから唇をだん〳〵下にさげてゆくと、いとも柔かな唇へと行き當つた。口と口とは合つた。二人は力一杯に接吻した。部屋の中は寂然してゐる。時計が唯かち〳〵言ふだけだ。

突然バシアの足音が控の間に聽えた。子供らしい聲で、「霜ですよ、霜ですよ、霜ですよ」と言つた。

ミカエルは豹が驚いて獲物から飛びはなれるやうに、クリシアから飛びはなれた。恰度その時、バシアは大きな聲で、「霜ですよ、霜ですよ、霜ですよ」と間斷なく怒鳴りながら、駈け込んで來た。突然部屋の眞中に轉つてゐた太鼓に躓いた。バシアは立留つて、吃驚しながら、太鼓を見、クリシアを

見、小武士を見て、恁う言つた。「どう遊ばしたの。お二人とも投槍で衝れたやうな顏よ」

「叔母さんはどうなすつて？」とクリシアは落着かぬ胸から靜かな平素の聲を無理に出した。

「叔母さんはね、そろ〳〵橇を下りてゐらしやるのよ」とバシアは同樣に變つた調子で答へた。鼻を幾度か動した。それから又クリシアと恰度太鼓を拾つてゐるミカエルとを眺めて、急に室から出て往つた。

マコヴエッキイ夫人は室の中へ轉り込んだ。ザグロバも二階から降りて來た。談話はルヴオフの侍從夫人のことに向けられた。

「彼の方はアダム樣の敎母で御座いますよ」とマコヴエッキイ夫人が言つた。「アダム樣はあの方に打明けたのでせう。ですからひどくバシアにさうさせやうとなさるんですもの」

「バシアは何んと言ひましたか」とザグロバが問ねた。

「バシアは侍從の奧樣にかう申しました。犬に手綱をつけるやうなものよ。アダム樣には髭がないし、私にはさういふ心がないですもの。無いものを有るやうにするとは、六ケ敷いわつてね」

「それあ、そんな事も言つたでせうが、どうでせう、バシアの眞實の心は。兎角、女には手練があるものでしたな」

「バシアに限つて、口も心も同じですわ。それに、いつかもお話したやうに、バシアはまだ未通女で

すもの、クリシアの方は中々さうぢやないですが」
「叔母さん」とクリシアが突然に言つた。
晩餐の仕度が出來たと僕が言つて來たので、それ以上の談話は出來なかつた。皆食堂にやつて來たが、バシアだけは來ない。
「あの孃さんはどうしました」とマコヴエッキイ夫人が僕に言つた。
「孃さんは厩舎におゐでゝす。孃さんに『夕御飯です』と申しますと、『さう』と言つて、厩舎に往らしやいました」
「何か御機嫌に觸つたのかしら。あんなに嬉しさうでしたに」とマコヴエキイ夫人がヂグロバの方へ向いて言つた。
小武士はやきもきして、「私が往つて、連れて來ませう」と言つて、急いで出て往つた。厩舎の戸口の内側で乾草の積んである上にバシアが坐つてゐた。ミカエルが入つて來たのを氣がつかぬほど想に沈んでゐた。
「バシアさん」と小武士は彼方を覗き込んだ。
バシアは睡てゐる所を起されたやうに身震ひして、眼を上げた。ミカエルは眞珠のやうな二つの涙を見て、非常に吃驚した。「どうしました。え、泣いてゐるですか」

「そんな事ありませんよ」とバシアは飛び起きて叫んだ。「そんな事ありませんよ。霜が降つてよ」バシアは嬉しげに笑つたが、その笑ひ方には無理な所があつた。自分から注意を外に向けやうと思つてバシアは馬部屋に居るミカエルが元帥から拜領した駿馬を指さして、元氣よく恁う言つた。
「あなたはあの馬には到底乘れないと仰やつたのね。見てゐらつしやい」
ミカエルが留めやうと思つてゐる内に、バシアは馬部屋に飛び込んだ。激しい馬は起き上つて、前足をこつ〳〵言はせて、耳を後へ立てた。
「危ない、殺される」とミカエルは叫んで、バシアについて飛び込んだ。
バシアは既に馬の肩を平手で叩きながら、「殺されても可いのよ、殺されても可いのよ」と繰返して言つた。
馬は烟の立つ鼻をバシアに向けて、低い聲でひん〳〵言つて、バシアに可愛がられるのをいかにも嬉しさうであつた。

＋

ミカエルがこれまで送つた凡ての夜はクリシアと濡事のあつたその夜に較べられなかつた。見よ、彼は死にし人の思ひ出に慄いた。然もその思ひ出は懐しき事である。又自分に信頼せる生きてゐる女

を惑はした。友情を亂用した。ある責任を帶ぶることになつた。良心のない人間のやうに振舞つた。他の軍人なら、斯る接吻をしても、或はそれ以上のことをしても、髭を捻りながら、何にも心を痛めなかつたであらう。けれどもミカエルは氣むづかしかつた。殊にアヌシアの亡なつてからは、心苦しみ胸破れた人には普通であるやうに、氣むづかしかつた。これから先きどうしたら可いか。どういふやうに處置すべきか。

出發まで唯數日を餘すのみである。出發で萬事が中途半ぱになる。クリシアに一言の斷りもせずに行つてしまつて差支へなからうか。下女に接吻をしてやつたやうなつもりでクリシアと別れて差支へなからうか。ミカエルの大膽なる心もさう想ふと震へた。かやうに煩悶しながらも、クリシアのことを想へば、心一杯愉快だ。接吻を想ひ出すと嬉しさに身體がぞくぞくする。さう想ふ自分の頭惱に癇癪が起る。併し快い感じを消すことは出來ない。唯我とわが身を深く責めるだけだ。

「私はクリシアをそこまで誘つて往つた」と彼は苦々しく言つた。「クリシアをそこまで誘つて往つた。だから、一言も斷らずに行つてしまふのは善くない。それならどうするか。申込んで、婚約して行かうか」

するとアヌシアの姿が武士の前に現はれた。白い衣物を着て、臘のやうに蒼白い。棺に入れたと同じ姿だ。その姿は言つた。「あなたが私のために悲しんで下さるのは當然です。最初の中は坊さんになつて、一生私を追善して下さるつもりでしたのね。それだのに今あなたは私の憐れな靈魂が天國の門へ飛んでゆかない內から他の女を貰はうとなさつてゐる。どうぞ、今少しお待ちなすつて、私を天國に到着させて下さい。私が下界を眺めなくつても可いやうにして下さい」

そこで武士は之まで尊崇し神聖視した思ひ出の主に對して自分は僞の誓をした者であると思つた。悲しみと測り難き恥と自ら卑しむ念とに心は轉倒して、死にたくなつた。

「アヌシア」と彼は跪づいて繰近した。「死ぬまで、そなたを悼まずにはゐない。だが、今私はどうしたら可からう」

白い姿は何も答へずに、白霧のやうに消え去つた。その代りに武士の想像に現はれたのは、クリシアの眼と初毛で蔽はれたその唇であつた。それと一緒に武士が身を解き放たうとする誘惑が現はれた。彼の心は浮草の定めなく悶へ苦しむばかりであつた。その時彼の頭に浮んだのは、ザグロバの所へ往つて、始終を打明けて、いかなる難問題をも解決するあの人の知惠を借りやうといふことであつた。ザグロバは何もかも見透してゐた。女子と友達になると、遂にはどういふ事になるか、前以て話してくれた。それを想ふとザグロバに相談が出來かねる。自分はザグロバに向つて、「クリシアの惡口は止めて下さい」と鋭く言つたではないか。然るに今クリシアを惡く思つたのは誰か。「下女のやうに待遇つて、茲を立ち去るのが一番ぢやなからうか」と考へた男は誰か。

「懐しい者のためでなければ、一刻も躊躇はしない」と武士は想つた。「何にも苦しまんでも差支へない。あんな嬉しい目にあつたことを心から歎ぶのだがな」暫くして「あんな事は百度あつても善い」と呟いた。けれども誘惑が身のまはりに群つて來たのを悟つて、力一杯それを振りもぎつて、かういふ理窟をつけて見た。「もう仕方がない。唯の友情ではなくつて、戀の滿足を欲したいなら、矢張その路を押進んで行く外はない。明日クリシアに結婚を申込まう」

暫く茫然してゐたが、やがて又その考を進めた。「さう事が定れば、今日やつたことは當然になつて、明日は自分で自分を許すことが出來る」恁う想ふと同時に彼は掌で口を叩いて、「え、惡魔の全軍が私の後に居るのだわい」と言つた。

けれども結婚を申込うといふ考を棄てずに、單純に恁う想つた、「死んだ戀人を怒らせたら、奠祭と祈禱でその靈を和めることが出來る。又それに依つて常に彼女を忘れず敬虔の想の斷えざることを示すことが出來やう。二週間以前悲しみのあまり坊さんにならうとした者が、他の女に結婚を申込んだと言つて、人は驚きも笑ひもしやうが、その恥辱は唯自分だけのことである。然るに結婚を申込まなかつたら、罪のないクリシアまで私の恥辱と過失に配かることになる。だから、明日申込まう。他にどうも仕方はない」と遂にミカエルは言つた。

彼は大變氣が落着いた。「我等の父よ」を繰返して、アヌシアのために熱心に祈禱して、眠に就いた。

翌朝目が醒めると、「今日申込まう」と繰返した。併しそれは容易でない。他の者には知られたくない。最初クリシアに話して、それから適當な所置を取りたいものだ。

暫くするとアダムが朝ぱらからやつて來て、家中を賑した。

クリシアは毒でも飲されたやうな有樣であつた。終日蒼い疲れた顏をして、伏目をしたり、頸まで顏を赧めたりした。唇をぶる〳〵させて泣き出しさうにすることもあつた。また夢でも見てゐるやうに茫然してゐた。ミカエルがクリシアの側へ往つて、二人切りで長く居らうといふのは六ケ敷かつた。天氣が佳いので、クリシアを散歩に連れ出すことが出來ないではなかつた。今までならば何の躊躇もせずにさうしたに相違ない。でも、今はさうは出來ない。自分の目的が誰にでも看破られるやうな氣がする。はあ、求婚だなと感づかれるに相違ない。

アダムは救いの舟であつた。彼はマコヴエッキイ夫人の側に往つて、何だか永いこと話してゐたが、やがて打連れて小武士が二人の娘やザグロバと一緒に居つた部屋に歸つて來て、「若い方々は二つの橇へお乘りになりませんか、雪がきら〳〵してゐます」と言つた。

そこでミカエルは急いでクリシアの耳へ口をよせて、「私と一緒に乘つて下さい。お話が澤山ある」

「はい」とクリシアが答へた。

二人の男は厩舎に急いだ。バシアも隨いて往つた。二つの橇は家の前に準備された。ミカエルとク

リシアとは一つの橇に乘り、アダムと小さき匈牙利兵とはもう一つの橇に乘つて、馭者をつけずに出かけた。

若い人達が行つてしまふと、マコヴエッキイ夫人はザグロバの方へ向いて、「アダム樣がバシアに申込みなさいましたか」と言つた。

「それあ、どうも」とザグロバは驚いた。

「ルヴオフの侍從の奥樣はあの人の敎母でせう。だから明日茲へ來て私にお話があるといふのです。アダム樣はバシアと話をすることを許して下さいと仰やいました。ほのめかすつもりでせう。バシアがその氣にならねば、折角の苦心も水の泡と思つてゐなさるのでせう」

「奥樣はそれであの若い連中を橇に乘らせなされたか」

「さうです。私の良人は大變細心い方でしてね。幾度も『あの二人の財産は監理してゐるが、夫の選擇は自由にさせやう。名譽ある夫を選ぶなら、財産の不均合なんて何んでもない。もう二人共年頃なので、物の分別はあるから』と仰しやつたものですから」

「アダムの敎母にどう御返事なさるつもりですか」

「良人は五月に參りますので。この事は良人の量見にまかせたいと思ひます。でも、私は、バシアさへ承知しませば、さうして可いと思つてゐます」

「アダムは青二歲ですぞ」

「ですが、ミカエルはあの方のことを有名な軍人で、種々武勇をお顯はしになつたと申したぢや御座いませんか。それに大變財産家で、その家柄のことも敎母の方からお伺ひしました。あの曾祖父樣にあたる方は皇女センユト樣のお子樣で、最初御結婚あそばしたのは・・・」

「いや、その家柄なんてどうでも可うがす」とザグロバは不機嫌を隱さずに遮つた。あの男は私には赤の他人です。唯奥樣にお話し仕たいことは、小さい匈牙利兵は、とうからミカエルにと想つてゐました。この世界を二本足で歩いてゐる娘の中で、あれよりも善い、あれよりも正直な女がありましたら、私は熊みたいに今から四つん這に歩きますあ」

「だつて、兄は何とも思つて居ませんもの。まあ思つてゐるとしたら、クリシアの方が餘計兄の目に留つてゐませうよ。まあ、どうでも神さまの深い思召通りになりますでせう」

「なにしろあの滑面した野郎が肱鐵砲を喰へば、祝杯を擧げますあ」とザグロバが附言した。

二つの橇における二人の武士の運命は暫く平衡してゐた。ミカエルは永い間一言も口が利けなかつた。遂にクリシアに恁う言つた。「輕薄な男とか、道樂者とか思つて下されては困る。私はもうそんな齡ぢやありません」

クリシアは答へなかつた。

「昨日の事は赦して下さい、決して惡氣があつてしたのぢやありません。どうもあゝせずにゐられませんでしたので。嬢さん、クリシアさん、私の人物を思つて下さい。私は戰爭ばかりしてゐた單純な軍人です。他の者なら先に種々打明けて、それからあんな事をするでせうが、私は始めにあんな事をしてしまつた。訓練された馬なら馬銜をはめると、人を乘せて走ります。それより力のある戀ですもの。人を乘せて走らぬことはありませぬ。戀は私を連れて行きました。唯あなたが可愛かつたからです。クリシアさん。あなたは一城の主又は元老院議官の奥方にもなれる人です。併しあなたが位は低くとも多少國家に功勞ある軍人を輕んじなさらなければ、私はあなたの足下に平伏します。あなたの足に接吻します。思召を聽せて下さい。かう言ふ私を擯斥なさらんでせうね」

「ミカエルさま」とクリシアは答へた。そして暖手套から出した手は武士の手の中に隱れた。

「御承知下さる？」とミカエルが問ねた。

「はい」とクリシアが答へた。「波蘭中にあなた樣よりも偉い方は御座いませんもの」

「有難う、有難う、クリシアさん」と武士はその手に幾度も接吻して、「これ以上大きな幸福は私にはありません。昨日の事を怒つてゐないと言つて下さい。さうすれば安心です」

「怒つてはゐません」

「あなたの足を接吻してあげたい」とミカエルが叫んだ。

二人は暫く默つてゐた。馬は雪の中で嘯いてゐた。雪の玉は馬の足の下から飛んだ。やがてミカエルは言つた。「あなたがそんなに急に」とクリシアが答へた。「私を愛して下すつたのは尙不思議ですわ」

「あなたがそんなに急に」とクリシアが答へた。「私を愛して下すつたのは尙不思議ですわ」

そこでミカエルは大變眞面目な顏をして、「あなたから見たら、一人の女に對する悲しみが消えない中に、他の女と戀をするといふことは變でせう。實際私は平常輕率でしたが、今は全く別です。私は死んだ者を忘れはせん、決して忘れません。まだ彼女を愛してゐます。これから先き彼女のために泣くことがあつたら、あなたは私のために泣いて下さい」

小武士は、聲を潛めたほど、大に心を動した。そのためにクリシアが自分の言ふ事にあまり深く感動してゐないことに氣がつかなかつた。

再び沈默が續いたが、やがて娘はそれを破つた。「力の及ぶたけ、あなた樣を慰めてあげたいと思つてゐます」

「私は直ぐあなたを愛したです」とミカエルが言つた。「初めての日からあなたは私の傷を癒さうとして下すつたから。私はあなたの何ですか。何でもない。然るにあなたは不幸の者を憐れむ心があるから、直ぐ私に同情して下された。あゝ、有難いです。大に有難いです。十一月に坊さんにならうとした者が十二月結婚しやうとするのだから、私を非難する人もあるでせう。第一、ザグロバ殿から笑は

れる。折があれば笑はうとしてゐるのだから。笑ひたい者は笑ふが可い。そんな事は願はん。あなたが非難されては困るが、私だけなら何でもない」

クリシアは空を眺めて考へ込んでゐたが、遂に恁う言つた。「私共が婚約しましたことを他の人に話さないといけませんの」

「どうしてです」

「あなたはもう近い中に行つてしまいなさるでせう」

「嫌でも、行かねばなりません」

「私は父さんのためにまだ喪服を着てゐますもの。誰にも顔を見られるのがいやですわ。だから、婚約を私共二人切の間にしておきませうね。露西亞からお歸りになるまで誰にも知らせずにおきませう。それで善くつて」

「それでは私の妹にも何も言はずにおくですか」

「私が自分でお話し仕ますわ、あなたが行らしつた後で」

「そしてザグロバ殿には？」

「ザグロバさまは私をおなぶりになりますもの。だから申さない方が善いのよ。バシアさんも私をなぶりますわ。バシアさんは近頃なんだが氣がむら〳〵してゐなさるの。これまであんなに氣がお變りになることはなかつたですか。何も申さん方が善いのよ」恁う言つてクリシアは暗綠の眼を天に向けて

「神さまは私達の證人であられます。どなたにも申さずにおきませう」

「あなたは美くしいばかりか賢いですな。さうしませう。神は私共の證人です、アーメン。私に憑りかゝりなさい。約束が成立つたからは、御遠慮は入らんでせう。心配せんでも可いです。昨日のやうな事をしたくつても、馬を氣をつけねばならんので、出來ませんから」

クリシアは武士の言ひなりになつた。彼は言つた。「二人切りの時には、私を呼び捨にして下さい」

「なんだが變ですわ」とクリシアは笑つて、「そんな事出來ませんわ」

「併し私はさうする」

「ミカエルさまは武士ですもの、ミカエルさまは勇者ですもの、ミカエルさまは軍人ですもの」

「クリシア、あなたは私の戀人だ」

「ミカ……」と言つた切り、クリシアは仕舞まで言ふ勇氣なく、暖手套で面を隱した。

暫くしてからミカエルは家に歸つた。途ではあまり話をしなかつた。門の側で小武士は問ねた。「昨日の……あとで……悲しかつた？」

「え、耻しくつて悲しくつて、それでも妙な氣持がした」とクリシアは低い聲で言つた。

二人はよそ〳〵しくしてゐるので、誰も二人の間に起きたことに氣がつかなかつた。誰も二人に注

意しないので、その用心は必要がなかつた。ザグロバとミカエルの妹とは駈け出して二對の男女を迎へたが、その眼はバシアとアダムにのみ注がれた。

バシアは眞赤な顏をしてゐた。それが冷淡からか、情熱からか解らなかつた。アダムは毒でも飲されたやうであつた。そして直ぐに暇乞をした。ミカエルの妹は彼を引留めやうとしたが聽なかつた。ミカエルも夕餐を濟してゆくやうに勸めたが聽なかつた。彼は軍務が忙しいからと言つて、歸つて往つた。ミカエルの妹はその時何にも言はずにバシアの額に接吻した。若い娘は自分の部屋へ飛んで往つて、夕餐まで出て來なかつた。

翌日ザグロバはバシアに攻擊の矢をむけた。「これ、小さい匈牙利兵、アダム殿は雷電に打れたやうぢやな」

「さうよ」とバシアは目を瞬いて首肯いた。

「あの男になんと言つたな」

「お問ねになるのが急でしたわ。大膽な方ですから、私の答も早かつたの、私も氣が强いですもの。さうぢやなくつて」

「いや、それあ結構ぢや。どれ、抱いて上げやう。あの男はなんと言つたな。雜作なく我を折つてしまつたかい」

「時が經つたら、どうにかなりますかと仰つてよ。御氣の毒でしたわ。でも、いやな事はいやですから、時が經つても、どうしやうもないことよ」

バシアは鼻を膨かして、悲しげに想ふ所あるらしく、前髪を搖つた。

「どういふ理由ぢやな？」とザグロバが言つた。

「あの方もさう御聽きになつてよ。どうでも善つてよ。あの方にも話さないし、誰にも話ませんわ」

「若しか」とザグロバは急にバシアの眼をながめて、「あなたは心に想ふ人があるぢやないかな。え？」

「想ふ人なんて」とバシアは叫んだ。當惑を隱さうとてか、飛び跳ねながら、急に繰返した。「アダムさんなんて何でもない。アダムさんなんて何でもない。誰でも何でもないわ。どうして、あなたは私を困らすんでせう。どうして皆なして私を困らすんでせう」

恁う言つてバシアは急に泣き出した。

ザグロバはバシアを出來るだけ慰めて見たが、その日一日バシアは沈んで氣むづかしかつた。晝餐の時にザグロバは言つた。「ミカエル。貴君は往つてしまうし、ケトリングは間もなく歸つて來る。あれは飛切の美男子ぢやて。この若い孃さん達はとても我を立てきれないで、貴君が歸つて來る時には、二人共戀に夢中になつてゐるかも知れんわい」

「それは尙好都合です」とミカエルが言つた。「バシアさんを直ぐ御世話しやうぢやないですか」

バシアは野猫のやうに彼を瞰んだ。「クリシアさんのことをもつと御心配してお上げなさい」

小武士はその言葉に尠からずどぎまぎして、「あなたはケトリングの力を御存じないからです。今に解ります」

「クリシアさんにはどうしてそれが解らないですか。それに

女心は弱くなりぬ
いづこに身をば隱すべき
いかに身をば護るべき

と歌ふのは、私では御座いませんよ」

今度はクリシアの方が當惑した。小さな胡蜂は尙ほ言葉を續けた。「若しかの場合には、アダムさんから私、楯を借りますわ。あなた樣が行つてしまいなされば、萬一の場合にクリシアさんはどうして身を御護りになるでせう」

ミカエルは氣を取直した。稍々言葉荒く、「クリシアさんは多分あなたよりも善く身を護るでせう」

「どうしてゞすか」

「クリシアさんは輕はずみでないし、落着いて氣位が高いから」

ザグロバと小武士の妹とは鋭い匈牙利兵が直ぐ應戰するだらうと思つた。然るに豈に計らん、バシアは皿の方へ首を打垂れて、やがて低い聲で、「お怒りになつたら、あなたもクリシアさんも私を御赦し下さい」

十一

ミカエルは何時出立しても可いといふ許可を受けたので、チエンストホヴにあるアヌシアの墓に詣でた。そこで最後の涙を注いでから、旅立つた。亡き人に對する新しき思出からクリシアとの秘密の婚約はあまり早過ぎたことに思ひついた。その悲しみ、その涙の中には、神聖にして犯すべからざるものがある。それは雲の如く天の方へ昇つて、無限の空間に消去るべきものである。妻を失つてから、一二ヶ月の中に結婚する者は幾らもある。併し彼等はお寺へ入りはしない。又幾年も幾年も待つて漸く幸福の門口に入らうとした所でその不幸に出遇つたといふわけではあるまい。それは兎に角普通の人間が聖い悲しみを尊敬しないとしても、何も之れを見做ふには及ぶまい。

ミカエルは露西亞の方へ進んだ。非難は身に隨いて往つた。併しその非難をわが身に負ふて、これをクリシアには向けなかつた。種々心配したが、その中には、若しやクリシアが心の奥底で自分の振舞を輕率だと思つてはゐないだらうかといふこともあつた。

「クリシアが私の地位にあつたら、確にあんな事はしない」とミカエルは獨語を言つた。「高潔な精神

を持つてゐるので、クリシアは他の人にも高潔を求めるに相違ない。

クリシアの眼に自分が小さく見えはしないかと思へば怖ろしくなつた。けれどもその恐怖は無駄であつた。クリシアはミカエルの哀悼を何とも思はなかつた。彼があまりその事を話し過ぎるので、同情の念よりも、寧ろ嫉妬を起した。自分は生きてゐる女である。亡き人と同等に見られるのはいやだ。いや、自分は亡きアヌシアに較べられるほど小さな價値しかないだらうか。ザグロバが若し二人の秘密を知つてゐたら、女といふ者はお互にあまり同情のないものだと、ミカエルに言つて聽せたに相違ない。

ミカエルが立つてしまつた後で、クリシアは出來てしまつた事を尠からず驚いた。殊に自分は囚はれたのである。今まで見たことのないウクラインからワアサウに行くのだから、これまでと全く違つた事があるに違ひないと想像してゐた。議會には監督や高僧がぞろ〳〵やつて來る。名聲赫々たる武士が民政國の八方から集つて來る。多くの宴會や閲兵もそこにあらうし、大變な騒擾もあらう。その旋風のやうな大勢の武士の中から誰とも知らず、「戀人」が現はれる。それは處女が夢想せる武士である。その武士は戀に憧れて、處女の窓の下で笛を吹く。騎士行列をしたり、戀したり、長い嘆息をついたりする。その鎧には戀人の紐をつけ、種々艱難辛苦した末に、戀人の足許に平伏して、相愛の仲となる。

然るにそれが一つとして起らなかつた。虹色をした空想の霧は消去つた。成程武士は現はれた。普通の武士ではない。民政國第一流の名聲を博した武士である。偉大なる騎士、併し彼女が夢想したその人には全く似てゐない。騎士行列も笛の音も、試合も、鎧の紐も、騒擾も、遊戯も、五月の夢のやうな好奇心を起す事も、花の香のやうに心を醉し、鳥を誘惑する餌のやうに、顔を赤め、胸をどきどきさせ、身をふる〳〵させるやうな夕暮の不思議な譚もなかつた。市の外の唯小さい家、その家にミカエルがゐた。そして仲好くなつたに過ぎない。その他の異象は月が空を過る雲に隠れるやうに消えた。ミカエルが最初からでなく、最後にでも出て來たら、幾分か望みに適つたであらう。さあれ民政國の榮譽となり、敵の恐怖となつた彼の名聲、その價値その勇氣を想へば、非常に愛しく想ふことも度々であつた。併し何んだが物足らない。ミカエルの遣り方、いな寧ろ彼があまり早過ぎたゝめに、自分の權利を侵害されたやうな氣がする。實際早過ぎたことは二人の心に砂の粒のやうに落ちた。二人が遠く離るれば離るゝほど、その粒は幾分二人を苦しめ初めた。何でもない事が小さな棘のやうに人の心を痛めて、時が經つと、癒つてしまふことも、或は益々その痛みが大きくなることも屢々ある。深い仲であつても、その痛みになやみ苦しむものである。けれども今この場合では、それが惱み苦しむといふ程のことではなかつた。ミカエルにとりて、クリシアのことは愉快でも慰安でもあつた。その思出は影の形に伴ふ如く彼に隨つた。彼が行けば行くほど、クリシアは益々懐しかつた。益々クリ

シアに戀ひ焦れるのみであつた。然るにクリシアは物懶き時を過した。小武士の出立してから、誰もケトリングの家に來る者はない。來る日も來る日も單調無聊であつた。

マコヴエッキイ夫人は選擧の日ばかり數へて、良人の來るのを待つた。そして良人のことばかり話した。バシアは物足らぬ顏をしてゐた。ザグロバはバシアがアダムに肱鐵砲を喰せながら、その戻つて來るのを待つてゐるとはどうしたのかと非難した。實際バシアは彼が戻つて來たら歎んだらう。けれどもアダムは「もうあそこには用はない」と言つて、直ぐにミカエルの後を追つた。ザグロバもヤンの子供を見たがつて、そこへ歸る仕度をしてゐた。それでも倦怠ので、幾日となく旅立つのを延した。バシアにそのぐづ〳〵してゐる譯は御身を戀してゐるからで、今に結婚を申込みますぞと言つた。ミカエルの妹がバシアを連れてルヴオフの侍從夫人を訪問に出かける時、ザグロバはクリシアと二人で居つた。クリシアは決してその訪問に一緒に往かなかつた。その奧樣は人柄の佳い人だつたが、クリシアとは性が合はなかつた。ザグロバは幾度となくワアサウに出かけて、愉快な友達に遇つて、一度ならずその翌日醉拂つて歸つて來た。さういふ時、クリシアは全く一人ぼつちで、ミカエルのことを考へたり、若し約婚しなかつたら、ミカヘルの競爭者として、お伽噺にあるやうな王子でも出て來はしなかつたかなどと考へ込んだりして、寂しい時を過した。

或時クリシアは窓の側へ坐つて、日沒の光にきら〳〵してゐる部屋の戸を眺めて考へ込んでゐると、家の向ふ側で驢の鈴の音が聽えた。マコヴエッキイ夫人とバシアが歸つて來たと想ひながら、尙冥想を止めず、戸から眼を放さなかつた。やがて戸が開いた。後の方の暗闇に見知らぬ人が立つてゐるのが處女の眼に映つた。

最初クリシアは繪を見てゐるのではないかと思つた。或は假睡をしてゐる間に、不思議な翼象が前に立つてゐる所を夢に視てゐるのではないかと思つた。見知らぬ人は若かつた。黑い外國の服を着て白いレースの領子を肩まで懸けてゐた。子供の折にクリシアはかういふ服裝をした砲兵大將アルチシエフスキイを見たことがあつた。その服裝と非常な美男子であつた爲めに、クリシアは永く大將を覺えてゐた。今自分の前に立つてゐる若者は同じ服裝をしてゐる。美しさはアルチシエフスキイのみか、地上を歩く凡ての男子に勝つてゐる。髮の毛を額の所で平らに刈つて、顏の兩側に光々した縮れ毛を垂れてゐるのが、いかにも不思議である。その黑い眉毛は大理石のやうな白い額に側立つて見える。眼は溫しく沈んでゐる。髮は黃色で、髭は黃く尖つてゐる。その頭は類のないほど氣高さと男らしさとが結合してゐる。天使と勇者の頭を兼ねたやうだ。クリシアの呼吸ははたと胸で塞つた。自分の眼を信ぜられない。自分の前に立つてゐるのが幻影か實際の人間か定めかねた。その人は暫く不動として驚いて立つてゐる。或は禮儀からクリシアの愛らしさを驚いた風をしてゐるのかも知れぬ。遂に入口から動いて、帽子を下に向けて、その羽毛で床を掃ひ始めた。クリシアは起上つた。足はぶる〳〵

震へる。赤くなつたり、蒼くなつたりして、眼を閉つた。

やがて低い柔かな聲がした。「私はエルギンのケトリングと申す者で、ヴオロジョフスキイ殿の友人で又同僚でございます。家の者は言ふべからざる幸福が私を待つてゐると申しました。私、屋根の下にわがバラスの妹と親戚の方々を賓客としてお迎へする名譽を持つと申しました。どうぞ孃さま、私の周章ましたことをお赦し下さい。家來の者は私の眼で見ました所については何も申しませんでしたので。實際私の眼はあなたの神々しさに眩しかつたのでございます」

武士のケトリングは恁う言つてクリシアに挨拶した。けれどもクリシアは一樣な挨拶をしなかつた。どう言つて善いか解らない。ケトリングはさう言つて二度目に首を下げたと見えて、默つて聽いてゐると。床の上で帽子の羽毛がさら〳〵した。で、クリシアは何とか返事をする必要がある。挨拶に挨拶を返す必要に迫つた。さうしなければ只の女と思はれるだらう。けれども暫くは息も吻けぬ。手にも顳顬にも脈がどき〳〵する。胸は非常に苦しいやうに起伏する。クリシアは瞼を開いた。ケトリングはやゝ首を曲げて、その驚嘆すべき面に讃美と尊敬を示して立つてゐる。クリシアはぶる〳〵する手で、裾を取つて、騎士に禮を返へさうとした。幸ひにもその時「ケトリング！　ケトリング！」といふ叫び聲が戸の後で聽えて、腕を擴げて喘ぎ〳〵室に飛び込んで來たのは、ザグロバである。

二人は互に抱き合つた。その間に若い娘は氣を取直して、二三度武士を眺めた。ケトリングは心からザグロバを抱いた。その一擧一動は啻ならず美事である。それは祖先の遺傳と國王や貴族の文雅な御殿で養つたのであらう。

「御變りもないか」とザグロバが叫んだ。「貴君のお家を自分の家のやうに想つて。貴君ぞ迎へるのは愉快ですわい。どれ、顏をお見せ。やあ、痩せたぢやアないか。それはさうと、ミカエルはもうお寺のことを考へて行つたことをお存じか。まあ、貴君は能く歸つてゐらしつた。ミカエルはもうお寺のことを考へてゐないやうぢや。彼の令妹が茲に來てをられる、二人の若い孃さんを連れて——蕪菁のやうな娘ぢや、おゝ、これは、クリシアさんが茲にゐなされた。とんだ失禮を申したな。あなた方二人を美人でないと言ふ者があつたら、その男の眼をくり拔いてしまうが可い。この武士はもうあなたの美人なことをかうして見てゐるのぢや」

ケトリングは三度首を下げた。そして笑ひながら、「私の行く時はこの家は兵營でしたが、歸つて來たら、オリムプスになつてました。入るや否や、女神さまに御目にかゝりましてな」

「ケトリング、どうした」とザグロバには一度の挨拶では不滿足と見えて、再び叫んだ。そして彼を抱いた。「それはさうと、勾牙利兵には、貴君まだ遇はぬのぢやな。一人は美人、もう一人は蜂蜜ぢや。どうした、ケトリング、達者かい。まあ何よりだ。この爺さんも嬉しい。えらい澤山客人があつてな。マコヴエッキイ夫人が茲へ入らしたのは、議會の際で宿を見付けることが六ケ敷かつたものだ

から。でも、今なら宿もあるぢやて、勿論他へお引越になるだらう。獨身者の家に若い孃さん達を宿らしておくのも善くあるまいつて。世間から變な目付をされたり、妙な風評でも立てられると困るからな」

「いや、そんな事、私が不承知です。ミカエル殿とは、私は友人ぢやない、兄弟です。だから、マゴヴエッキイ夫人を姉上として私の屋根の下にお宿めすることが出來ます。あなたも孃さん、御遠慮なく、御用をさせて下さい」

恁う言つて、ケトリングはクリシアの前に跪づいて、その手を取つて、唇に當てた。そして哀願するやうな嬉しいやうな又同時に悲しいやうな顏付をしてその眼を見詰めた。クリシアはまた面を赧くした。殊にザグロバが直ぐに恁う叫んだので、

「來る早々この娘に跪ぐんだな。え、これ。その狀をマゴヴエッキイ夫人に話してやらう。氣を付けなさい、ケトリング。……クリシアさんも、貴顯方の作法を心得なさい」

「私、貴顯方の作法など存じませんもの」とクリシアが痛く當惑して囁いた。

「御用をさせて下されますか？」とケトリングが問ねた。

「お立ちあそばせ、あなたさま」

「御用をさせて下されますか。私はミカエル殿の弟分でございますので、御引越なさいますようならば、彼の人に申譯がありません」

「私はどちらでも宜しうございます」とクリシアはやゝ落着いて答へた。「唯御意に對して感謝いたしますばかりで」

「それは有難い」とケトリングはクリシアの手を口に當てた。

「あゝ、戸外には霜があるのに、キユピト（戀の神）は裸體だ。でも、この家に居れば凍へはしまい」とザグロバが言つた。「その嘆息では霜解けがするわい。嘆息でなければ解けません」

「おからかいあそばしますな」とクリシアが言つた。

「貴老がその戯談を仰しやる中は有難い」とケトリングが言つた。「快活は御丈夫な記標なので」

「それから鮮明した良心も丈夫な記標ぢや」とザグロバが言つた。『惱みある者は愁ふ』と神の人が聖書に言つてゐる。私には何も心配がない。だから快活ぢや。それはさうと、貴君は前見た時には、波蘭の服を着て、軍刀を吊つて、豹の皮の帽子を被つてゐられたが、今見ると英國人のやうに御變りになつて、鶴のやうな細い脚をして歩いてをられるな」

「コウランドに暫くゐましたで。そこでは波蘭の服を着ませんし、それからワアサウで英國公使と一緒に二日暮しましたものですから」

「それではコウランドから御歸りなすたのか」

「さうです。私を養子にした親戚が亡なりまして、他一つの遺産を私にくれましたから」

「それは御愁傷な。勿論立派な加特力教徒でしたでせうな」

「さうでした」

「幾分それで慰められませう。それはさうとコウランドにある財産のために私共とお別れするやうになりはしませんか」

「いや、私は茲で暮して、茲で死ぬつもりです」とケトリングはクリシアを眺めながら答へた。するとクリシアは直ぐ長い睫毛を眼の上に垂れた。

マコヴエッキイ夫人は全く暗くなつてから歸つて來た。ケトリングは門の外まで出迎へた。女王でもあるかのやうに非常に恭しく夫人を家に案内した。夫人は翌日市に宿を索しますからと言つた。併しその決心は何にもならなかつた。若い武士は自分が、ミカエルと兄弟分であることを盾にして、夫人がもつと長く逗留しませうといふまで、跪いて懇願した。夫人はザグロバ殿が尙ほ暫く滯在して、その齡と威嚴で、惡い風評から娘達を禦いでいたゞくことが出來ますならと言つた。ザグロバは極端に匂牙利兵が可愛くつてたまらぬので、歡んで承知した。それにまた彼の頭の中には是非自分が居らぬと拙い事があつた。娘達は何れも歡んだ。バシアは直ぐ遠慮なしにケトリングの側へやつて來た。

「私達はどつちにしても今日は動かぬことにしませうね」とバシアは未だ決しかねてゐる。ミカエルの妹に言つた。「動かないとすると、一日居つても、十二日居つても同じ事ですのね」

ケトリングはクリシアと同じくバシアを好いた。彼は女なら誰でも好きであつた。バシアの方ではこれまで外國の騎兵士官の外に外國の騎士を見たことがなかつた。それも身分の低い平凡な者ばかりであつた。それ故バシアはケトリングのまはりを歩みながら、前髪を振つたり、鼻の穴を大きくしたり、子供らしい好奇心で眺めたりした。それがあまり煩いので、遂にマコヴエッキイ夫人から小言を喰つた。それでも平氣で、バシアはケトリングに目を放さず、その軍人としての價値を定めやうとした。遂にバシアはザグロバに向つて、

「この方は偉い軍人？」と囁いた。

「さうとも、これより有名にはなれぬほどぢや。千軍萬馬の間を往來してな。眞正の信仰を固守して、十四歳の時から英國の叛徒に對して戰つたのぢや。それに又門閥の高い貴族で、その作法を見ても直ぐお解りぢやらう」

「この方が戰爭してゐられる所を御らんになつて」

「幾度も見た。戰爭中でも、あなたのために馬を留めて騷がず、馬の肩を輕く叩いて、戀物語の出來る男ぢや」

「そんな時に戀物語なんてして可いですの、え？」

「彈丸を物ともせぬ事なら何でもするが可いのぢや」
「一騎打でも矢張偉い方なの」
「さうとも、さうとも。胡蜂嬢。偉くないとは言へない」
「では、ミカエルさまの前に立つことが出來て？」
「ミカエルの前に立つことは出來ない」
「やあ」とバシアは嬉しげに自慢さうに叫んだ。「私、出來ないと知つてゐたのよ。直ぐ出來ないと思つたのよ」恁う言つて、手を叩いた。
「それではあなたはミカエルの肩を持つのか」とザグロバが問ねた。
バシアは前髪を振つて、默つてゐた。暫くしてから小さな嘆息をついて、「え、何ですつて。あの方は私達の内の一人ですもの、だから嬉しいのですわ」
「ぢやが、能く心に留めて置なさい、小さな匈牙利兵」とザグロバが言つた。「戰場でこそ、ケトリングよりも善い人があるにした所が、この人は娘には偉い危險だよ。好男子だから氣違のやうに惚れられるさ。女にかけても有名な男ぢや」
「そんな事はクリシアさんに仰しやい、私の頭には戀なんかないわ」とバシアは答へて、クリシアの方へ向いて、「クリシアさん、クリシアさん、お話しがあるから茲へ入らつしやい」

「何ですの」とクリシアが言つた。
「ザグロバさまが仰しやるには、ケトリングさまを見た女は誰でも直ぐ戀に落ちるつて。私は横からも縱からも見たけれども何でもないのよ。あなたは何うお想ひになつて？」
「バシアさん、バシアさん」とクリシアはたしなめるやうな調子で言つた。
「この方がお好き、え？」
「お靜になさい、好い兒ですから、バシアさん、そんなつまらん事言ふものではありません。ケトリング樣が居らしやいますよ」
實際クリシアが坐らぬ中に、ケトリングが側へ來た。
「お仲間に入つても宜しう御座いますか」
「どうぞ」とクリシアが答へた。
「厚顏しいことですが、何を御話しなすつてゐらつしやいますか」
「戀の話」とバシアは躊躇せずに叫んだ。
ケトリングはクリシアの側へ坐つた。暫く誰も口を利なかつた。クリシアはいつも落着いてゐるのだが、今日はどうしたのか騎士の前に居るので氣後れがした。そこでケトリングは先づ口を開いた。
「そんな愉快な問題を話してゐらしつたのは眞實ですか」

「はい」とクリシアが低い聲で答へた。
「御說を御伺ひいたしたいもので」
「どういたしまして。そのやうな勇氣も知慧も御座いませんですもの。あなた樣こそ、どうぞお珍らしい事を御聽せ下さいまし」
「クリシアさんの言ふ通りぢや」とザグロバが叫んだ。「さあ、聽きませう」
「どういふ事をですか」とケトリングが言つた。そしてやゝ眼を上げて、尠し想ひ耽つたが、誰も何んとも質問をしないので、獨言を言ふやうに語り始めた。「戀することは悲しき不幸です。戀することに依つて自由の人は囚はれの身となります。矢に射られた鳥が獵夫の足許に落つるやうに、戀に繫れた人は戀人の足許から遁れる力がありません。戀は身を害ふ。戀する人は盲目のやうに戀の外世の中が見えなくなります。戀は悲しい。涙を流せば流すほど、嘆息が胸に脹れて來ます。男が戀すると、衣物のことも獵のことも頭の中になくなる。唯膝を抱へて茫然と親友でも失したやうに悲しげな嘆息を吻くばかりです。戀は病です。病のやうに顏は蒼くなり、眼は窪み、手は震へ、指は痩せ、死ぬことを考へたり、精神錯亂して、蓬々とした髮で、月に物を言つたり、戀人の名を砂に書いて樂しんだり、それが風に吹き消されると、『不吉だ』と言つて、泣き出したりします」
恁う言つてケトリングは暫く默つた。恍然としてゐる。クリシアはその言葉が歌でもあるやうに眞

心を籠めて聽いた。唇を開けて、武士の蒼い顏から眼を放さなかつた。バシアは前髮を眼の上に垂れてゐたので、何を考へてゐるのか解らなかつた。それでも默つて坐つてゐた。
やがてザグロバは大きな聲で欠をして、深い呼吸を引いて、足を擴げて、「さういふ戀から犬の長靴でも造るかな」
「それでも」と武士は又言つた。「戀を悲しいとすれば、戀せぬことは尙ほ悲しいです。戀なしに快樂も名譽も富も香料も寶石も何等の滿足もありません。戀人に向つて、誰でも、『私は王國よりも笏よりも健康よりも長壽よりもあなたの方を選ぶ』と言ふでせう、戀のためには皆悅んで生命を與へるとすれば、戀は生命よりも尊いものです」ケトリングはかやうに言葉を結んだ。
若い娘達は相互に密接あつて、不思議さうに彼の柔しい談話を聽いてゐた。さういふ戀に對する考想は波蘭の騎士の全く知らぬ所なので、座睡をしてゐたザグロバは目を醒して、瞬きをしながら、三人の顏を見較べた。やがて正氣づいて、大きな聲で、「何を言つてゐたですかい？」と問ねた。
「あなたにお休みなさいと言ひましたの」とバシアが言つた。
「あゝ、戀のことを話してゐたのだつけな。結論は何んだつたかな」
「裏は外衣よりも善う御座いますつて」
「私が座睡をしてゐたことを拒みはせんよ。でも、戀したり、泣いたり、嘆息したりか、—あゝ私は

もう一つ韻を見付けたよー、睡つたりはどうぢや。もう夜も更た。睡るには極上ぢや。皆さん、お休み。戀の話を切上げなさい。あゝ、あゝ。猫がにやをと鳴く間は、乾酪を喰ひたがらんさ。それを喰ふまでには、口を濕してゐる。私も昔は洋盃と洋盃が似るやうにケトリングに似てゐたものだ。戀に狂つて、擂槌で一時間も背中を叩されなければ、氣がつかないほどぢやつた。もう年を老つては、寢るほど樂があればこそ。親切な御主人が寢床に案内して、寢酒を飲せてくれるのだから尙更ぢや」

「何なりと御用をいたします」とケトリングが言つた。

「御引けとしませう、御引けとしましやう。月が大分高く昇つたやうだ。明日は御天氣が好からう。日中のやうに明るいな。ケトリングは夜通しでも戀物語をするだらうが、山羊達、この人は旅疲れがしてゐるぢやて」

「疲れてはゐません。市で二日休みましたから。私は又嬢さん達が夜更しなすつたことが御座いますまいにと心配します」

「御話を承はつてをりますと、夜が更けるのも雜作ございません」とクリシアが言つた。

「日が登ると夜ではなくなります」とケトリングが答へた。

別れた時は大變夜が更てゐた。若い娘達は同じ室に寢る。いつもなら寢る前に長く話すのであつた。けれども今夜バシアはクリシアの心持が解らなかつた。バシアが話をしかけても、クリシアは口を利くのが煩さいやうに、生返事をした。バシアがケトリングのことを言ひ出して、その眞似をして、一寸でも彼のことを笑つたりすると、クリシアは柔しくバシアを抱いて、そんな戯れは止めてちやうだいと言つた。

「あの方は此家の御主人ではないの、バシアさん」とクリシアが言つた。「私共はあの方の屋根の下に居るのですもの。それにあの方は一目見てあなたを愛しなされたのよ」

「どうしてそれが解つて」とバシアが問ねた。

「誰だつてあなたを愛さぬ者はありませんわ。皆さんがあなたを愛しますさ。そして私は尙更大變」

クリシアは美しい顏をバシアに押しつけて、搔抱いて、その眼に接吻した。

遂に二人は床に入つたが、クリシアは永い間睡れなかつた。大變氣が落着ない。時にはあまり胸がどき〳〵するので、兩手を柔かな胸に當て、動悸を制へようとした。時には眼を閉つてゐると、夢の如く美しい顏が現はれて、自分の顏へ寄添ふて、低い聲で囁くのであつた。

「私は王國よりも、笏よりも、健康よりも、長壽よりも、生命そのものよりも、あなたを獲たいと思ひます」

十二

それから數日經つて、ザグロバはヤンに手紙を送つて、恁う結んだ。「拙者選擧前歸家せずとも驚き被下間敷候。そは決して貴殿を疎略に致す所以に無御座候。惡魔は決して睡り不申候故、拙者は鳥の代りに不必要なる物の掌中に殘存することを欲せざるにて候。ミカエル歸來致候節、『二人は約婚し、匈牙利兵は自由なり』と言ふを得ざれば面白からずと存候。何事も神の力の裡に有之候。さればミカエルに勸誘し、又それに就て長き準備を爲すことは必要無御座と愚考致候。貴殿は約婚成立の曉に御光來被下度候。暫くの間ユリセスを學びて、外交的手腕を用ひ、再三それを彩色せざるを得ずと存候。これまで事の眞實を歡び、それに慣されたる拙者にとりて、そは容易なることに無御座候。されどミカエルと小さき匈牙利兵のためなれば、それも詮方なく候。二人は純金に御座候。貴殿と子供等のことを想ふて、いと高き神に念じ上げ候」

恁う書き終つて、ザグロバは紙に砂を散して、手でそれを叩いて、眼から遠く離して讀み返した。それから卷きをさめて、指から印を取つて、それを濕して、手紙に封をしやうとした時に、ケトリングがやつて來た。

「お早うございます」

「お早う、お早う」とザグロバが言つた。「有難いことには、天氣が佳くつて。私は恰度ヤン殿に使者を送らうとしてゐます」

「宜しく言つて下さい」

「もう書きましたわい。私は心に、『貴君からの言傳を送る必要がある。兩方とも消息を歡ぶぢやらう』と想ひましたでな。この手紙には貴君と若い孃さん達のことばかり書きましたで、貴君からの言傳もその中に入つてゐる筈ぢや」

「どうしてですか」とケトリングが尋ねた。

ザグロバは膝に手を載せて、指で輕く膝を叩きながら頭を垂れて、眉の下からケトリングを覗くようにして、「ケトリング、預言者でなくつても、火打ち石と鎌のある所には、晩かれ早かれ火花が散りますからな。貴君は立派な美男子ぢやて、若い娘達を咎められんわい」

ケトリングは實際狼狽した。「私が盲目か野蠻人でない限りは」と彼は言つた。「あの美しい方達を見て、禮拜しないわけに參りませぬ」

「ぢやが」とザグロバはケトリングの赤らんだ顏を見て笑ひながら語を次いだ。「貴君は野蠻人でないからは、兩手に花はちと蟲が善過るようぢやな。土耳古人みたいにさ」

「そんな事を御想像になるのは・・・」

「いや想像はしない。唯獨語をしたのさ。あはあ、謀叛人、戀の話などして聽すものだから、クリシアの唇はこの三日眞蒼だ。無理ぢやない。貴君は好男子だからな。私も若い時には、霜の夜、眉毛の

黒い美人の窓の下に立つてゐたこともあつたけ。その女はクリシア嬢に似てゐたよ。私は能く、

「なれは睡れり、日が暮れて、
われは夜通し、笛を吹く」

なんて歌つたものさ。なんなら、歌を上げようか。全く新しい歌を作つて上げても可い。これでも天才がないでもないぢやて。クリシア嬢はビレヴイヒ嬢にどこか似てゐるではないか。ビレヴイヒ嬢は亞麻のやうな髪をしてゐたな。唇に初毛がないだけだ。ぢやが却つて初毛がある方が綺麗だと思つて、引着られる者もないではなからう。クリシアはあなたに遇つて大に嬉しさうぢや。ヤン殿にさう書いた所さ。クリシアは結婚前のビレヴイヒ嬢に似てゐるぢやないか」

「似てゐるとは氣がつきませんでしたが、さうかも知れません。さう言へば、姿や形に思ひ出す所があります」

「まあ聽いて下され。家の内證事をお話しするから。貴君が友人であるからは、それを知つてゐて戴きたい。ミカエル殿に仇をせんやうに注意して下され。私とマコヴエッキイ夫人とはあの娘の一人を彼に配合せようと思ふので」

恁う言つてザグロバは突然ケトリングの眼をしげ〳〵と眺めた。ケトリングは蒼くなつて、「どつちですか」と尋ねた。

「クリシア嬢さ」とザグロバはそろ〳〵と答へた。そして下唇を突出して、八の字を寄せた眉の下からそのの獨眼をぱちくりさせた。ケトリングは默つてゐた。あまり長く默つてゐるので、遂にザグロバは尋ねた。「どうかな」

ケトリングは變つた調子だが、力强く、「それはミカエルに害になるようなことは斷じて致しませぬ」

「確實ですかい」

「これまで私も大分苦しい想もしてゐます。武士の一言です。そんな事は致しませぬ」

ザグロバは腕を擴げて、「ケトリング、たんとさうするさ。氣儘にさうなさい。貴君を試したまでぢや。クリシア嬢ぢやなくつて、匈牙利兵だよ、ミカエルに配合せようといふのは」

ケトリングの顏は眞摯な深い歎びに輝いた。ザグロバを抱へて、長く靜然としてゐたが、やがて尋ねた。「もう御二人は相愛の間ですか」

「わが匈牙利兵を愛せぬものは誰もないさ。それともあるかな」とザグロバが尋ねた。

「いや、もう約婚なされたですか」

「約婚はしない、ミカエルはよう〳〵喪中を離れたばかりなので。ぢやが、私の頭の中ではさう定つてゐる。あの娘は鼬鼠の如く遁げ廻つてゐるが、大分彼に舞つてゐるぢや。あの娘にとりては軍刀が

一番大事でな」
「私もさう氣づいてゐました」とケトリングは輝いた顔をして遮切つた。
「はあ、貴君も氣がついてましたか。ミカエルはまだ他の女のために泣いてゐる。でも、誰が彼の精神を樂しますかと言へば、それは匈牙利兵ぢや。彼女は一番能く亡き人に似てゐる。まだ年が若いから目立たぬばかりぢや。何事も善くなつてゆく。この二つの結婚が選擧の時に擧げられることを私は保證する」
ケトリングは何にも言はずに、再びザグロバを抱へて、その綺麗な顔を老人の赤い頰に押しつけた。で、ザグロバは喘ぎ〳〵問ねた。「クリシア孃はもうそのやうに貴君の皮に身躰を縫ひつけたかな」
「解りません、解りません」とケトリングが答へた。「唯解つてゐることは、あの方の神々しい異象が私の眼を樂しませる事だけです。で、私はこれこそ私の惱みある心で戀することの出來る唯一人の女だと獨語ました。その晩は煩腦を起して、どうしても睡れず、樂しき憧れに耽りました。それ故あの方は私の全身を占領しました。恰かも女王が柔順な忠義な國を支配するやうにです。これが戀といふべきものかどうか、解りません」
「でも、それは帽子でもなければ、股引の三尺巾でもなければ、馬の肚帶でもなければ、脚絆でもなければ、臘腸でもなければ、鷄卵でもなければ、酒瓶でもないだけは解つてゐるぢやらう。それがさ

うでないとしたら、何だかクリシアに問ねて御覽なさい。なんなら、私が問ねて上げようか」
「そんな事をして下されてはどうも」とケトリングは笑ひながら、「どうせ溺れるなら、もう暫く泳がして見て下さい」
「蘇國人は戰場では豪の者だが、戀には役に立ちさうもない。女に對するには、敵に對する如く、突進が必要ぢや。『われ來り、われ見、われ勝てり』とは私の格言ぢや」
「私の最も熱心な願望が成就される時が來ますやうに、どうぞ御助力下さい。私は歸化してゐますし、家柄も善いですが、未だ此方で名高くありませんから、マコヴエッキイ夫人の御意が……」
「マコヴエッキイ夫人？」とザグロバが遮切つた。「夫人のことは案ずるには及ばない。マコヴエッキイ夫人は樂器も同樣ぢや。私が風を入れると、鳴るばかりさ。私は直ぐこれから夫人の許へ行つて、前以て知らせておくよ。あなたが若い娘と親しくするのを妙に取るといかんからな。あなたの蘇國流は我々のと違つてゐるのぢやから、勿論あからさまに貴君がこれこれだとは言ひますまい。唯あの娘があなたの眼に入つたので、粉が麵麭になるやうなことがあるかも知れぬと言つておきませう。ぢやあ、直ぐ往くとしよう。案ずるには及ばん。私が言はうと思へば何でも言へるからな」
ケトリングが留めたけれど、ザグロバは起上つて、出て往つた。途でバシアに遇つた。バシアが常ものやうに彼に寄添ふて驅け出したので、ザグロバは問ねた。「クリシアが全くケトリングを囚へたこ

とを御存知かい」
「あの人は第一流の人物でないのね」とバシアが答へた。
「それについて怒つてゐるぢやないかい」
「ケトリングさんは人形よ。愉快な方ですけれど、人形よ。私、馬車の舵棒に膝を撲つけたの、痛くつて」
バシアは屈んで、膝を擦りながら、暫くザグロバを見てゐるので、彼は言つた。「それあ、まあ、危ない。どこへ飛んで行つたのぢや」
「クリシアさんの所へ」
「クリシアは何をしてゐた？」
「クリシアさん？　もう尠し前に、私に接吻したりなんかして、猫のやうにぢやれてゐたの」
「クリシアにケトリングを虜にしたことを喋舌なさるな」
「だつて！　默つてはゐられないわ」
ザグロバはバシアが默つてゐないことを能く知つてゐた。口留をしたのはそのためである。それ故彼は自分の狡さを大に面白く思ひながら、足を進めた。バシアは爆裂彈のやうにクリシアの部屋に飛び込んだ。

「膝を撲つたのよ。ケトリングさんがあなたに戀れ死をしさうよ」とバシアは入るや否や叫んだ。「馬車の小舍から出てゐる舵棒に氣がつかなかつた。だからこんなに撲つたのよ。眼から火が出さうだつたの、でも何でもないわ。ザグロバさまはケトリングさんについてあなたに何にも言つちやいけないと仰しやつたのよ。私、言ひませんと言はなかつた。だから、直ぐ話して上げるわ。あなたはあの人が私にどうとか言つてましたね。心配しないでも可いわ。私は初めからあなたが……膝がまだ少し痛むのよ。私はアダムさんをあなたに上げるのぢやないのよ、ケトリングさんですよ。おほゝ、あの人は今恍惚しながら家の中を歩いてゐるのよ、お目出たう、クリシアさん、お目出たう。蘇國人、蘇國人！（コットは猫の意）コット、コット！」
バシアは友人の眼を指で突くまねをした。
「バシアさん」とクリシア嬢が叫んだ。
「蘇國人、蘇國人！　コット、コット！」
「私はなんといふ不幸でせう」とクリシアは突然叫んで、泣き出した。
暫くバシアは彼女を慰めた。けれども無駄であつた。處女はこれまでになく啜泣くのであつた。實際家中でどうしてクリシアが不幸なのか誰も知つてゐる者はなかつた。數日クリシアは熱があつた。顏は蒼く、眼は窪み、胸はどき〳〵して息切れがした。何か不思議な事がその心の裡に起つたのだ。

弱り切つて喪心してゐた。それは徐々に緩に起つた變化ではなく、突然の變化である。旋風の如く、暴風の如く、彼女を掃ひ去つた。焔の如くその血を熱した。稻妻の如く、その想像に閃いた。彼女は一刻もその無慈悲な突然の力に抵ふことが出來なかつた。靜淑は彼女を去つた。彼女の意は羽の折れた鳥のやうであつた。

クリシアは自分がケトリングを愛してゐるのか、憎んでゐるのか解らなかつた。その問題に關しては、無量の恐怖が彼女を捕へた。けれどもその胸が唯彼のために激しく動悸することを感じた。彼のために茫然してゐるのである。全く彼に沒入されたのである。その勢力に對して身を堅くしやうとも思はぬのである。彼を愛せぬことよりも容易でなかつた。その眼は彼を見ると嬉しかつた。その耳は彼の聲を聽くと聾のやうになつた。彼の全靈は彼に沒入された。睡てゐても戀する人はつき纏つた。眼を閉つてゐても、戀しき人は頭を自分の方へ傾げて、「王國よりも笏よりも名譽よりも富よりも、あなたが獲たい」と囁くのであつた。その頭は近寄つて來た。暗闇ですら、處女の顏が上血して眞赤になるほど近寄つて來た。クリシアは多血な露西亞人である。これまで夢にも想はなかつた強い火が胸の裡に燃えた。その情熱のため、恐怖と羞耻に捕はれた。次第に氣が弱りに弱るばかりであつたが、それは苦しくもあり愉快でもあつた。夜も彼女を休ませなかつた。衰弱は次第に增して、非常な骨折をした後のやうに彼女を支配した。

「クリシア、クリシア、どうしたといふのです」と彼女は自ら叫んだ。目眩しくなつて、絕えず氣が顚倒するばかりであつた。未だ何にも起つたのではない。何にも起らなかつた。彼女はこれまでケトリングと二人切りで二言と口を利いたことがなかつた。それでゐてその人のことばかり考へられる。併し又本能の聲として、「用心せよ、彼を避けよ」と囁くのであつた。で、クリシアは彼を避けた。

クリシアは倖にもミカエルとの婚約を思ひ出さなかつた。それに對して特に何も考へなかつた。未だ何にも起らぬのと、誰のことをも考へなかつた故である。自分のことも、他の人のことも考へず、唯ケトリングのことばかり考へてゐた。その思ひを深い邃い心の裡に隱してゐるので、誰もクリシアにどのやうな事が起つたとも疑はなかつた。誰もクリシアとケトリングとを結びつけて考へる者がないので、尠からず心安かつた。所がバシアの言葉で全くさうでないことが解つた。もう二人は種々に憶測されて、大抵その仲を察してゐられるのだ。だから、氣が落着かない。羞しさ苦しさが一緒になつて、心を顚倒させた。で、小さな子供のやうに泣いた。

バシアの言葉は種々な影事の始めであつた。妙な眼付、妙な瞬、妙な頭の振方、さてはどちらにも意味の取れる言葉など、クリシアはそれを辛抱せねばならなかつた。これは午餐からのことである。ミカエルの妹は例になくクリシアからケトリングを眺め、それからケトリングからクリシアを眺めた。ザグロバは妙な咳をした。時々談話が途切れた。どうしたのか誰も知らない。寂然する。その靜かな

時に一度、亂れ髪をしたバシアが誰にでも聽えるほどの聲で叫んだ。

「私、善いことを知つてゐるけれども、話さない」

クリシアは直ぐ顔を赤くした。それから直ぐ又蒼くなつた。何か恐ろしい危險が身に迫つて來たやうである。ケトリングも亦頭を傾げた。何れも十分に自分達のことだと悟つた。人に見られまいと思つて、互に談話をすることを避けたが、それで自分達の間に何か起つてゐることを意識した。何とも定まらぬ同情が次第に生じて來た。この意識は直ちに結び着いた。同時に二人を隔てた。二人の自由は全く失せて、最早互に普通の友達であることが出來なくなつた。幸ひに誰もバシアの言葉に注意しなかつた。ザグロバは市へ出かける仕度をしてゐた。そして大勢武士を連れて歸つて來た。誰も皆それに氣を奪られた。

實際ケトリングの家には晩になると燈火が煌々と點いた。十四五人の將校がやつて來た。愛嬌ある主人は婦人達の慰めに樂器を備へた。四旬齊の折ではあるし、ケトリングは喪中なので、舞踏は勿論出來なかつた。でも、音樂を聽いて、談話を樂しんだ。婦人達は立涙に裝つた。マコヴエッキイ夫人は東洋の絹服を着た。匈牙利兵は派手な色彩の衣物を着た。その薔薇色の顏と時々目許に垂れる輝ける髪とは軍人の眼を惹いた。その露骨けた言葉は笑ひ聲を起した。コザックの勇敢と磊落とを一緒にしたやうな彼女の振舞に驚かされた。

クリシアは父の喪が終つたので、銀で飾つた白衣を着た。武士達はクリシアのことをジユノ（ジユピター神の妻）のやうだの、ジアナ（月の女神）のやうだのと言つた。けれども誰もその側へ寄つて來なかつた。誰も髭を捻つたり、踵でがた〳〵さしたり、視線を投げたりしなかつた。誰も彼女を秋波に見たり、戀を語つたりする者がなかつた。唯クリシアが直ぐ氣付いたことは、自分を崇め尊ぶやうに見やつては、ケトリングへと視線を向けることであつた。或はケトリングに近寄つて、祝意を表するやうに緊とその手を握る者もあつた。すると彼は肩を縮めてそれを拒むやうに手を擴げた。クリシアは能く物に氣がつく敏捷い性なので、自分がケトリングの婚約の女であるやうに取沙汰されてゐることを大抵悟つた。ザグロバが一人〳〵に耳こすりをしたのを見なかつたので、そんな風評が何處から來たのか知るに苦しんだ。「私の額に何か書いてあるのか知ら」と吃驚した。耻しくもあり心配でもあつた。それでも尙ほ「ケトリングは仕合せだ」とか「あの男は頭髪の網の中で生れたのさ」とか、「不思議はない、美男子だから」とかいふやうな言葉が、自分に言はれるのではないが、聲が高いので、自然耳を掠めるのであつた。

又世慣れた騎士達の中にはクリシアの御機嫌を取らうと思つて、ケトクングを格外に讃めそやし、その大膽、親切、禮讓、門閥を誇張して話して聽せる者もあつた。クリシアは何氣なく耳を傾けた。知らず識らず自分に話されるその人を、眼で索して、時にはその人の目とぴたりと遇ふこともあつた。

益々その魅する力に捕はれた。理は解らぬが、ケトリングの姿を見れば嬉しい。ケトリングは他の粗暴な軍人達とは大變な相違だ。「王子と供人のやうだ」とクリシアは想ひながら、その高尚な貴族的な頭と生來沈んだ所がある野心ある眼と豐かな金髪の影をさす額とを眺めた。その頭は地上の最も懷しいものであるやうに、クリシアの心情は疲れて沈んだ。ケトリングはそれを悟つた。クリシアの心の亂れを增したくないと思つて、他の者がその側にゐても、自分だけは近寄らなかつた。彼女が女王であつたとしても、彼はこれ以上の尊敬と注意とを拂ふことが出來なかつた。クリシアに物を言ふ時には頭を下げて、片方の足を後に引いて、いつでも跪づける用意をしてゐた。彼は頗る眞面目で、バシアに對するような戯談は言はなかつた。クリシアに對すると。非常な尊敬に加ふるに柔しい愁の色があつた。それ故誰も自由に話したり、大膽に戯談を言つたりする者がなかつた。クリシアの家柄と氣品は普通の女以上で、いかなる禮儀を拂ふも充分でない淑女といふことに極めてしまつた。

クリシアはこれに就て心からケトリングに感謝した。その晩は心配でもあるし、嬉しくもあつた。夜中頃には、音樂の聲も止んだ。婦人達は客に別れを告げた。武士達は盃を幾度も廻し始めた。一坐は段々騒しくなつた。ザグロバはその中に元帥の座を占めた。

バシアは鳥のやうに歡んで二階へ登つた。跪づいて祈りをする前に、猶けて種々な客の眞似を始めた。遂に手を叩きながらクリシアに言つた。

「あなたのケトリングさんが御出でになつたのは嬉しいことね。もう軍人に不足はないわ。四旬齋が早く濟めば善いこと。死ぬまで踊るわ。遊びませうね。あなたとケトリングさんとの御婚約、それから御結婚式に、私がこの家を引くり返へさなければ、韃靼人に捕虜になつても可いわ。先づ第一にすることは……あはあ、ケトリングは好い方ね。あなたのために音樂隊を連れて來なさるよ。あなたと私とそれを聽いて樂しみませう。あの人はそれからそれへと新しい珍らしい物をあなたに贈るわ。それからあの人は遂に……」

バシアは突然クリシアの前に跪いて、クリシアの腰に腕を廻して、ケトリングの低い聲を眞似て語り出した。

「お嬢さま、私はあなたを愛して、呼吸をすることも出來ません。私は歩いてゐる時でも馬に乘つてゐる時でもあなたを愛します。斷食の時でも朝餐の後でもあなたを愛します。いつまでも變りなく、蘇國人が愛する如く、あなたを愛します。あなたは私のものになつて下さいますか」

「バシアさん、私、怒つてよ」とクリシアは叫んだ。けれども怒る代りに、バシアの腕を捕へて、その身體を持上げやうとしながら、眼に接吻してやつた。

十三

ザグロバはミカエルがバシアよりもクリシアの方に心のあることを充分に知つてゐた。そのため尙更クリシアを除外けやうと決心した。ミカエルを十二分に知り拔いてゐるので、選り好みが出來なくなれば、當然バシアに心が向ひて來るものと信じてゐた。バシアの可愛さに目が眩んだザグロバは、どうして人がバシアを差置いて他の女を選ぶことが出來るのか、想ひも及ばなかつた。彼は又ミカエルに對して匈牙利兵を貰はせる以上の大なる功德はないと信じた。二人を一緒にすることを想へば嬉しくつて耐らなかつた。彼は又ミカエルとクリシアとに對して腹立しく感じた。ミカエルが他の女と結婚するなら、クリシアとした方が善いには相違ないが、兎に角匈牙利兵と結婚させるために有ゆる手段を盡さねばならぬ。ミカエルがクリシアに心があることが知れたので、尙更出來るだけ早く彼女をケトリングに押付けてしまはふと決心した。

併しザグロバは數日經つて。ヤンから返事を受取つた。その返事は彼の決心を稍鈍らした。ヤンは何にも干渉したまふな。まかり間違ふと友人の間柄に大變な葛藤が起こるかも知れぬと案じて寄起した。ザグロバ自身はそれでは氣が濟ぬ。心窃に惑ふ所もあつたが、次のやうな理窟をつけて心を靜めた。

「ミカエルとクリシアが婚約してゐるのに、その間にケトリングを楔に押込むといふなら、それは別問題だ。ソロモン曰く、『人の財布に汝の鼻を突込む勿れ』と。それは當然ぢや。だが各自に恁うしたいと思ふのは自由だ。それに又實際の所、私は何もせんぢやないか。誰でも私が何をしたか言つて見るが可い」

恁う言つて、ザグロバは臀に手をやつて、唇を尖らして、部屋の壁を睨めつけた。壁が自分を非難するかと思つたのだ。所で壁は何とも言はないので、彼は恁う言つた。「私はミカエルに匈牙利兵を配合せることに定めてゐるとケトリングに話した。それは出來ない相談だらうか。それは實際ではないか。私がミカエルに他の女を貰はしたいと思ふなら、痛風に罹つても差支へない」

壁はザグロバの言分を正當だと認めたと見えて、全く何にも言はない。そこで彼は又言葉を續けた。「ケトリングがクリシアに生捕られたことを匈牙利兵に話した。眞實だから仕方がない。彼は白狀したではないか。嘆息を吻くので、火の側へ坐つてゐると、室中に灰を吹飛すではないか。私は見た所を他人に話した丈だ。ヤンは常識がある。誰も私の才智を犬に投げ與へはしまい。言つて可いことも、默つてゐる方が善いことも私は知つてゐる。へい、何事も干渉するなと。それも可らう。今後は何事にも干渉しまいよ。クリシアとケトリングの間の事だけなら、私は路傍の人なので、出かけてしまつて、二人切り居らせるとも。私は除け者にされて、好き自由にさせるさ。實際あの二人には橋渡の必要はないぢや。二人は眼が白くなるまで相憐れの仲だもの。それに日が溫かになるばかりか、胸の想が熱くなれば、春は來るものさ。まあ、二人切で居らせることにしよう。どんなに決着がつくか、

高みで見物しようかい」

實際その決着は間もなく現はれた。復活祭の前週の間に、ケトリングの家では、家内中でワアサウへ往つた。ドルガ街の旅館に宿を取つて、近くの敎會へ參詣して、氣安く禮拜したり、祭日の雜沓を飽くまで見物したりした。ケトリングは主人役を務めた。生れは外國人だが、都の地理に精しいし、どの町にでも澤山知人があるので、何事につけ便利であつた。彼は慇懃を極めて案内した。婦人達、殊にクリシアの想ひを見透すほど氣が利いた。誰でも皆眞實彼が好きになつた。ミカエルの妹はザグロバに豫告されたので、日增しに好意の眼でケトリングとクリシアを見るやうになつた。夫人がクリシアのことを何んとも言はぬのは、ケトリングが未だ口を噤んでゐるからであつた。この世故に長けた叔母さんはケトリングがこの娘を獲るとは至當で且つ適當だと思つた。特にケトリングは普通の人民ばかりか、身分の高い人々からも恭ひ親しまれてゐるのである。彼は平和の時には優美、儀容、威嚴、寛大、溫和であり、戰時には剛毅なる人物として衆に拔んでゝゐた。

「神さまの御思召と良人の定める通りにしませうとミカエルの妹は獨語をした。「でも、私はこの二人の邪魔はしますまい」

この決心に感謝すべきは、ケトリングである。彼は自分の家に居る時よりも益々繁く又長くクリシアと二人連になることが出來た。それでも一行はいつも一緒に歩いた。ザグロバは常にミカエルの妹

に腕を貸した。ケトリングはクリシアと打連れた。バシアは一番若いので、獨で歩いた。時には早く歩き過ぎたり、又時には店の前に立留つて、これまで見たことのない舶來品や寶物を口を開いて見てゐたりした。クリシアは次第にケトリングと一緒に居ることに慣れて來た。その腕に憑つても、その談話を聽いても、その品の高い顏を眺めても、胸がどき〳〵しなくなつた。心を奪れもせず、周章もせず、唯深い歎びに恍惚した。二人は絶えず一緒にゐた。敎會でも並んで跪いた。二人の聲は祈禱にも讃美にも糾れ合つた。

ケトリングは能く自分の心を知つてゐた。クリシアは心が定まらぬのと、自ら欺うとしてゐるので、心から「あの方が戀しい」とは言はなかつた。けれども二人は大に戀し合つてゐた。友情は二人の間に生じた。戀のほか、互に無量の尊敬があつた。戀については、未だ何も語らなかつた。時間は夢と過ぎた。朗な空は二人の上にあつた。非難の雲は間もなくその空をクリシアから隱さんとしてゐる。けれども現在は休息の時である。ケトリングと親密に、慣つ兒になるし、二人の戀に咲く友情とで、クリシアの驚愕は終を告げた。その印象は激しくなくなつた。その血と想像の爭鬪とは止んだ。二人は互ひに離れない。一緒に居るのは愉快だ。クリシアは全く嬉しき今日この頃に心を奪はれて、その終るべき時あらうとは考へたくなかつた。又この樂しき幻影はケトリングが口にする「戀」の一語で破れることを考へやうともしなかつた。然るにその言葉は間もなく發せられた。一日ミカエルの妹と

バシアとは親戚の病人を見舞ひに行つた。ケトリングはクリシアとザグロバを誘つて、王城を見物に出かけた。王城は結構の珍奇なので有名だが、クリシアは未だ見たことがなかつた。三人は一緒に行つた。ケトリングが厚く賄したので、何れの戸も開けられた。クリシアは自分の住邸に入込む女王のやうに、番人から鄭重に挨拶された。ケトリングは城内を能く知つてゐると見えて、自ら宏大な廣間や部屋にクリシアを案内した。二人は劇場や王の浴場を見物した。シギスムンドやフラジスラフの作になる東方の蠻族との戰爭と勝利を描いた名畫の前に足を停めた。それから高臺に登つて、端なき景色を眺めた。クリシアは見る物皆驚きの種であつた。ケトリングは一々説明して聽せた。そして時時口を噤んで、クリシアの暗緑の眼を見やつた。その眼付は、「この有ゆる不思議もあなたに比べたら何でもない。この有ゆる寶物もあなたに較べたら何でもない」と言ふやうであつた。

若き娘はその沈默の言葉を悟つた。彼はクリシアを壯嚴な部屋の一つに案内して、壁に隱れた入口の前へ立つた。

「伽藍にはこの入口から行くのです」と彼が言つた。「高い神壇の側に小さい棧敷で行留る長い廊下があります。その棧敷から國王と女王とが奠祭に參ることになつてゐるのです」

「私は能くその路を知つてゐる」とザグロバが叫んだ。「ヤン・カジミルと親密だつたからな。マリア・ルドヴィカは私を大好きで、奠祭にはいつも私を招いてくれた」

「お入りになりますか」と言つてケトリングは門番を呼んだ。

「參りませう」とクリシアが答へた。

「二人で行きなさい」とザグロバが言つた。「あなた達は若いし、足が達者だ。私はもう草臥れた。行きなさい、行きなさい。私は門番と一緒に茲に居る。主の祈を二度位して來ても、待どうぢやない、茲に休息してゐるで」

二人は入つて行つた。ケトリングはクリシアの手を取つて、長い廊下を進んだ。クリシアの手を自分の胸に押着けなかつた。靜に落着いて歩いた。折々側の窓で二人の姿は明るくなつたが、直ぐ又闇に沒した。クリシアの胸は次第にどき〳〵する。二人切りなのはこれが初めてだ。けれどもケトリングが落着いてゐるので、クリシアも心が靜つた。遂に二人は會堂の右側で高い神壇に近い小さな棧敷に出た。二人は跪いて祈つた。會堂は靜で洞んとしてゐる。二つの蠟燭が高い神壇の前に點されてゐた。禮拜堂の奥深い所は森として薄暗かつた。窓の虹色の硝子から種々な光が入込んだ。一心に祈つてゐる天使の顔のやうに靜かな二人の美しい顔を照した。

ケトリングは先づ立上つた。彼はいつも敎會では大きな聲を立てたことがないので、囁いた。「この天鵞絨で覆つた欄干を御覽なさい。王樣御夫婦の御頭を載せた痕が御座います。女王は神壇へ近いその方へ御坐りになるのです。そこでお休みになつて御らんなさい」

「女王は御不幸な御方であつたさうではございませんか」とクリシアが坐りながら囁いた。「私はまだ小さな時に女王の御譚を承はりましたことがございます。何處のお城でもその話で持ち切つてゐましたのでせう。なんでも心にお慕ひあそばされた御方と御一緒になれなかつたので、御不幸でしたさうですのね」

クリシアはマリア・ルドヴイカの頭を休ませたその場所に自分の頭を休ませた。そして眼を閉つた。苦しいやうな感情が胸に迫つた。洞んとした禮拜堂から突然寒い風が吹いて來て、今までクリシアの全身に滿ちてゐた靜穩を騷がせた。ケトリングは默つてクリシアを見てゐた。寺院の内は森々としてゐる。やがて彼はそろ〳〵クリシアの足許に身を沈めた。そして情の籠つた聲で靜に恁う言つた。

「この聖い場所であなたの前に跪くのは罪ではございますまい。眞正の愛は敎會のほか何處に祝福を求められませう。私は自分の生命よりもあなたを愛します。いかなる地上の寶よりもあなたを愛します。私の全心全靈を以てあなたを愛します。この神壇の前で私はあなたに對する愛を告白いたします」

クリシアの顏は亞麻布のやうに蒼白くなつた。祈禱臺の天鵞絨の表に頭を休めて、不幸なる娘は動かない。ケトリングは語り續けた。

「私はあなたの足を抱いて、御答を待ちます。私は天の祝福に浴して此所を去ることが出來ますが、それとも堪へ難き苦しみに生き長らへることが出來ないのでありますか」

彼は暫く答を待つた。でも、答がないので、クリシアの頭に觸るほど頭を下げた。益々彼の情緒は紊れて來て、聲は震へ、呼吸づかひが激しい。

「あなたの御手の中に、私の生命と幸福を置きます。憐れんで下さい。私の重荷は重くございますから」

「神さまの御仁惠を祈りませう」とクリシアは突然跪づいて叫んだ。

ケトリングはクリシアの心が解らなかつた。けれどもそれに逆はず、望みと怖れを以てクリシアの側へ跪づいた。二人は又祈り始めた。

折々二人の聲は洞んとした敎會堂の内に聽えて、奇妙に悲しげに反響した。

「神さまよ、あはれみたまへ」とクリシアが叫んだ。

「神さまよ、あはれみたまへ」とケトリングが繰返した。

「私共をあはれみたまへ」

「私共をあはれみたまへ」

クリシアは默つて祈りを續けた。けれどもケトリングはその全身が泣くので震へてゐるのを見た。クリシアは氣を靜めるまで長くかゝつた。やがて落着いたが、まだ跪ついたまゝ身動きもしない。遂

に起き上つて、言つた。「參りませう」

二人は又長い廊下を歩いた。ケトリングはその途でどちらにか答をされるものと思つた。そして顔と顔を見合せやうとしたが、駄目だつた。クリシアはザグロバが待つてゐる室に出來るだけ早く歸りたがるやうに急ぎ足になつた。入口に近くなると、ケトリングはその衣物の端を掴んで、

「クリシアさま」と叫んだ。「有ゆる神聖なるものに依つて……」

クリシアは振向いた。逸早くケトリングの手を取つて、直ぐそれを唇へ持つて來て、

「私の全靈はあなた樣を愛します。でも、私はあなた樣のものとなることが出來ません」

ケトリングが吃驚して何んとも言はぬ内に、クリシアは語り續けた。

「これまでのことは皆な御忘れあそばして」

その次の瞬間に二人はその室へ入つた。門番は一つの安樂椅子で、ザグロバは他の一つの安樂椅子で昏睡してゐた。彼等が入つて來たので、二人共起きた。ザグロバは片眼を開いて、おぼろげに瞬きを始めた。次第に居る所もそこに居る人も思ひ出したと見えて、

「あゝ、あなた方か」と帶を引締めて、「私は新しい國王が選擧されて、それが波蘭人であつた夢を見てゐた。あなた方は小さな棧敷へお出でゝしたか」

「參りました」

「マリア・ルドヴイカの靈がどうかして見えませんでしたか」

「見えました」とクリシアが眞面目に答へた。

十四

城を出てから、ケトリングは考想を纒めて、クリシアの振舞から生じた驚異の想を振ほどかうとした。彼は門の前でクリシアとザグロバに別を告げた。そして各自その宿に歸つた。バシアとマコヴエツキイ夫人とは最早病氣見舞から歸つてゐた。ミカエルの妹はザグロバに向つて恁う言つた。

「良人から手紙が參りましたが、ミカエルと一緒に未だ陣屋に居るさうでございます。お二人共丈夫で、間もなく茲へ參るさうです。ミカエルから貴老へ手紙が參つてをります。私には良人の手紙に追ひ書きがしてあるばかりですの。良人の手紙によりますと、バシアの財産の一つについて、ジュブリスとの訴訟も味く片つきましたさうで。州會の時も近きましたが、ソビエスキイ樣の御名聲は大したものださうですから、あの方の思ひ通りに地方議會も投票いたしませう。誰も彼も選擧の準備をしてゐますのですが、私の國の人民は元帥側で御坐います。もう暖くなつて、雨季になりました。ヴエルクハトカの離れ屋は燒けましたさうで。一人の僕が火を落して、風があつたものですから……」

「私に來たミカエルの手紙は何處にありますか」とザグロバは夫人が息もつかずに述べたてる報告を

耐へ切れずに尋ねた。

「茲に御座います」と夫人は手紙を渡した。「風があつたのに、人民が市場に往つてゐましたものですから・・・」

「どうして此手紙は茲へ參りましたか」とザグロバが又問ねた。

「ケトリング樣の家へ參りましたのを、僕が茲へ持つて參りました。あの、風がありましたので・・・」

「此手紙を讀みますから、お聽き下さいますか、奥樣」

「え、伺ひますとも」

ザグロバは封を切つて、讀み始めた。始めは低い聲であつたが、次第に大きな聲になつた。

「始めてこの書狀差上申候。この地方は郵便不定に候故、書狀はこれ限りと存候。小生は間もなく自身參上可仕候。戰場に在るも愉快に候得共、小生の心は強く足下の方へ引着けられ申候。種々なる事を考へ又思ひ出し候故、此頃は人と共にあるよりも孤獨を欲し申候。小生等の義務は果し候。牧民は今や靜穩にて、戰場を騷がすは唯小數の暴徒のみに候。されども我等は二度彼等を襲ふて最早誰も彼等の害を語らざるに至らしめ申し候。

「まあ、それでは、激戰でしたのね」とバシアが嬉しげに叫んだ。「軍人ほど高尚な職分はありませんのね」

ザグロバは讀み續けた。「ドロシエンコの暴徒は我等に一擊を加へんと欲するが如くに候得共、牧民なき今になつては何事もなす能ふまじく候・・・。アダム殿は小生に代りて防禦の任に就くべく候。マコヴエッキイと小生とは徒然の慰に終日狐を狩暮し候。春近き故、狐皮は役立たず候・・・。野雁も澤山に居り候。小生の家來は葦の中にて一羽の塘鵝を打ち候。小生は全心を以て足下を抱擁可致候。愚妹並びにクリシア孃の手を接吻可致候。クリシア孃の御好意は小生の最も熱心に欲する所にして、神は私を導きて變らざる孃を見、その同じ慰めを獲せしめたまはんことを。バシア孃に宜しく御傳言被下度候。

「二伸。小生はアルメニアの旅人より黄鼬の毛皮を買求め候。クリシア孃に呈上仕度候。わが小さきハイダック孃には土耳古の糖菓をお土産にするつもりに御座候」

「糖菓なんて、ミカエル樣は御自分でお喰りになるが可いわ。私は赤坊ぢやありませんよ」とバシアは氣を惡くしたやうに、頰を赤めた。

「ぢや、ミカエルに遇ひたくないのだな。彼が氣に觸つたのか」とザグロバが問ねた。

けれどもバシアは低い聲で何かぶつ〳〵言つた。彼女はミカエルがいかにも輕く自分を待遇つてゐることを思つて、眞實に怒つた。それでも野雁と塘鵝はその好奇心を惹起すのであつた。

クリシアは日向に背を向けて、眼を閉つて、手紙を聽いてゐた。誰もその顏の啻ならぬのに氣がつ

かなかつた。教會での出來事とミカエルの手紙とはクリシアにとりて二つの怖ろしき打撃であつた。その妙なる夢は消えた。今やクリシアは不幸に終らんとする嚴かな現實の前に面と面を向けるのであつた。儘ならぬ自分の想ひかな。不定な漠然した感情は胸の裡で戰つた。ミカエルがその手紙に間もなく來ることを約束してゐるのも、黄朧の毛皮を土産にすることも、何んとなく厭はしかつた。これに反してケトリングがこの時ほど懐しいことはなかつた。懐しきは彼に對する想ひである。懐しきは彼の言葉、懐しきは彼の顔、懐しきは彼の沈欝である。今やクリシアはこの戀と敬慕から去らねばならぬ。心に戀ひし、腕を擴げて抱かんとするその人から去らねばならぬ。自分の靈魂や身體を既に厭はしくなつて來た尙他の人に與ふることは限りなき苦痛である、又悲哀である。

「いやだ、いやだ」とクリシアは心から叫んだ。兩手を縛られた囚人のやうな心持がする。けれども自ら手を縛つたのである。ミカエルに對して、妹にはなりますが、それ以外の事はいけませんと言ふ機會は幾らでもあつた。

今やあの時の接吻を思ひ出した。その接吻は受けたり返したりした。耻しい。自分が莫迦らしくも思はれる。その時ミカエルを戀してゐたか。否自分の心に戀はなかつた。同情とそれから妹らしい愛情の皮を被つた好奇心と輕卒とのほか、心に何もなかつた。今や初めて戀の接吻と煩惱の接吻との間には天使と惡魔ほどの差異があることを知つた。癪にもさはり、莫迦らしくもある。傲慢な心が增長して、自分をも、ミカエルをも見縊つた。ミカエルにも過失はある。然るに何故自分ばかりが有ゆる悔恨と悲痛と失望とを忍ばねばならぬか。何故ミカエルも苦き麵麭を味はないか。ミカエルが歸つて來たら、

「私は間違へました。憐れみと戀とを間違へました。あなた樣もお間違へになりました。私もあなた樣を見棄てますから、あなた樣も私を御見すて下さい」と言ふ權利はないだらうか。

突然怖ろしさに身の毛が逆立つた。恐ろしき人の復讐に對する恐怖である。自分のために怖れるのでない。戀人の頭にその復讐の必ず落ち來るべきことを怖れるのである。ケトリングがあの劍道の達人と鬪ふて、鎌で切られた花のやうに倒れるさまが眼の前にちらつくやうである。

クリシアは彼の血、その蒼い顔、永久に閉されたその眼を見た。クリシアの心の苦痛は千萬無量である。大急ぎで起上つて、人々の眼に觸れず、ミカエルの近い内に歸つて來る話を聽かぬために、自分の部屋へ入つた。小武士に對する憎惡は心中に益々大きくなるばかりである。後悔と怨恨とは彼女を襲ふて、祈禱の時にも、退かぬのであつた。彼等は疲れに憊れて寢床に倒れたるクリシアの側に坐つて、恁う語つた。

「彼は何處にゐますか」と後悔が問ねた。「彼はまだ歸らない。彼は非常に失望して暗黑を彷徨ふてゐる。御身は彼のために天國を近よらせたからう。御身の生命の血を與へたからう。然るに御身は毒の

盃を彼に飲せた。その心臓を貫ぬいた」

「御身が浮氣でなかつたら、遇ふ者を誰でも誘惑しやうといふのが御身の願望でなかつたなら」と怨恨が言つた。「こんな事にはならなかつたらう。けれども今や御身のために殘るは唯失望だけである。それは御身の罪である。御身の大なる罪である。いかなる助力も御身には來ない。いかなる援助も御身にはない。殘るは唯恥辱と悲哀と涙だけである」

「彼は教會で御身の足下に跪づいた」と怨恨がまた言つた。

「彼が御身の眼をながめて、憐れみを乞ふた時に、御身の胸の破裂しなかつたのは不思議である。見ず知らぬ人をも憐れむのは正しいことである。然るに最も懷しき戀人を憐れまぬのか。神よ、彼を祝福したまへ、神よ、彼を慰めたまへ」

「御身が浮氣でなかつたら、最も懷しき人は歎んで去ることが出來たのである」と怨恨が言つた。「御身は選ばれたる妻として彼と手をつないで一生を暮すことが出來たのである」

「永遠に彼と偕にあれよ」と後悔が言つた。

「それは御身の過失である」と悔恨が言つた。

「泣けよ、あゝクリシア」と後悔が言つた。

「御身の過失は拭ひ去ることが出來ぬ」と悔恨が言つた。

「御身の好む所をなせ、彼を慰めよ」と後悔が言つた。

「ミカエルは彼を殺さん」と直ちに悔恨が言つた。

クリシアは冷汗にびつしより濡れて、床の上に起き上つた。皎々たる月は室に射し込んで、怪しくも怖しげに見えた。

「どうしたのでせう」とクリシアは想つた。「バシアさんはあそこに眠んでゐる。月の光でバシアさんの寢顔が見える。何時入つて來て、衣換へをして、寢たのだらう。私は一刻も睡らなかつたに。必然私は頭腦が惡くなつたのよ」

クリシアは恁う默想して再び床に就いた。けれども後悔と悔恨とは恰度二人の女神の如く、床の端に坐つて、白金の月光の中に代る〳〵見えたり、見えなくなつたりするのであつた。

「今夜はどうしても睡れない」とクリシアが言つた。そしてケトリングのことを考へ始めたが、益々苦しくなるばかりである。

突然バシアの悲しげな聲が夜の靜けさの中に聽えた。「クリシアさん！」

「睡れないの？」

「いゝえ、私、土耳古人がミカエル樣を弓で射つた夢を見たのよ。あゝ、僞の夢だつたわ。でも怖ろしくつて慄へたのよ。一緒にお祈禱を唱へなくつて。神さまに不吉を掃つていたゞきませう」

クリシアの頭には稲妻のやうに、「あの方が射り殺されたら」といふ考が閃いた。けれども直ぐ自分の惡念に吃驚した。で、この際ミカエルの悲なく歸ることを祈るのは、超人の力を要するのだが、それでもクリシアは靜に答へた。

「お祈りしませうね。パシアさん」

二人は床から起き出て、赤裸の膝を床につけて、祈禱文を唱へ始めた。二人の聲は相和して高くなつたり、低くなつたりした。部屋は寺の僧房に化して、二人の白い尼さんが夜の祈禱を繰返してゐるやうであつた。

十五

翌朝クリシアは心が餘程靜まつた。縺にもつれた幾條の內で、その選んだ路は、非常に峻しくはあるが、正道であつた。その路に進めば、尠くともその行く先が見えた。先づ第一にケトリングに遇つて、最後の談話をして、誤解の殘らぬやうにしようと決心した。けれどもそれは容易な業ではない。ケトリングは數日姿を見せない。夜も歸つて來ないのである。

クリシアは夜明前に起き出でて、近くにあるドミニック派の敎會へ往つた。いつか一朝、誰も居ない所で彼に遇へるかも知れぬと思つたので。

實際それから數日經つて、敎會の入口で彼に遇つた。クリシアを見て、彼は帽子を脫つて、默つて頭を下げた。そして動かずに立つてゐる。顏は睡眠不足と苦痛に疲れてゐる。眼は窪んだ。顴顎は黃くなつて、容貌の色は蠟のやうである、まるで凋みかゝつた美しい花だ。クリシアはそれを見て胸が裂けるやうであつた。決心の臍を堅めて來たものゝ、生來氣が弱いので、先づ手を擴げて恁う言つた。

「神さまの御慰めで、お忘れあそばしませ」

ケトリングはクリシアの手を取つて、額へ持つていつたが、やがて唇へ持つて來て、眞心こめて長く接吻して、いかにも悲しさうに落膽して、

「私には慰めもありませんし、忘れもいたしません」

クリシアは彼の頸に腕を投げて、「何によりもあなた樣を愛します。私をどうぞ」と言ひたいのだが、それを辛抱するのは今ぞその時であつた。泣き出したが最後、さうせねばならぬと感づいたので、クリシアは數刻の間彼の前に立つたまゝ、一言も發せず、涙を制へてゐた。遂に克己して、靜に口を開いた。あまり唐突だが、恁う言つた。

「私はどなたの所へも嫁りませんから、御心をお霽し下さいまし……私はお寺へ參ります……惡からずお思召下さいまし。どうせ不幸な女でございますもの……御愛し下さいましたことを何誰にも仰やつて下さいますな。どうぞさう御約束下さいまし……そんな事はございませんでしたやうに……御

友人にも御親類にもこれまでの事をお隱し下さいまし……これは私の最後の御願でございますの。何故こんな事を御願ひいたしましたか、御解りになる時が參りませう。今はもう何にも申上げません。悲しくつて悲しくつて何も申上げられませんから……ね、さう御約束下さいませば、それだけ心安くなります。おいやですか。御約束下さいませんと、私は死んでしまひます」

「神かけて御約束いたします」とケトリングが答へた。

「どうも有難うございます。心の底から感謝いたします。もう私、歸りませんと。御親切は何とも御禮の申しやうもございません。これからはもう二人切では御目にかゝりますまいね。唯人樣の前だけで。お怒りあそばさぬと仰やつて下さいまし。心苦しいだけで澤山ですのに、この上お怒にふれましては……私は神さまにこそ從へ、誰にも隨ひません、どうぞさう御思ひ下さいましね」

ケトリングは何んとか返事をしやうとした。けれどもあまり悲しいので、曉の解らぬ呻吟を發したのみであつた。クリシアの顳顬に指を觸れて、これを祝福するやうに暫く靜然としてゐた。やがて二人は別れた。クリシアは教會へ、ケトリングは街へ行つて、旅舍の知人に遇ふことを避けた。

クリシアは午後に一人で還つた。家に入ると、副大法官のオルシオフスキイ監督が來てをられた。

彼は突然ザグロバを訪問した。軍人として偉大なる模範で、民政全國の軍人を知慧を以て指導せるザグロバの知己を求むるのであつた。ザグロバは實際大に驚いたが、淑女達の前で斯る大なる名譽に接したことを尠なからず滿足もした。彼は尊大に構へて、意氣揚々としてゐた。それと同時にマコヴェッキイ夫人に對して、自分はいつも此國の高貴なる人々の訪問を受けてゐるので、別に何でもないといふやうな顏をしてゐた。クリシアは管長の前へ出て、恭しくその手へ接吻してから、バシアの側へ坐つて、誰も自分の顏に殘る悲しみの痕を認めないことを歡んだ。

副大法官はザグロバに幾多の讃辭を呈してから、談を波蘭の形勢に持つていつた。ザグロバは波蘭の國王として他國人を推選すべからず、必ず自國の人でなければならぬといふ嘗ての主張を熱心に述べた。副大法官はザグロバの主張を容れて、輝いた顏をして、去つた。

ザグロバは門まで客を送つて、歸つて來てから、呟いた。「あゝ、あの男を敎訓してやつた。一人の惡漢がもう一人の惡漢に出遇つたのぢや。だが、名譽なわけさ。高位高官の連中でも私の門へ入らうと思つて驅けくらをするかな。これにつひて御婦人方の御考を承はりませうかな」

婦人達は實際聞き惚れた。ザグロバは殊にミカエルの妹の眼には天井まで身丈が伸たやうであつた。そこで夫人は狂喜して叫んだ。「あなたはソロモンよりも賢いお方ですのね」

ザグロバは大變歡んだ。「誰よりも賢いと仰しやるのですか。まあ、お待ちなさい、元帥だの、監督

だの、元老だのを玆で御目にかけます。その人達が來たら、遁げ出すか、窓掛の後へでも隱れませうかい」

談話半にケトリングが入つて來た。

「ケトリング、貴君、昇進したくないか」とザグロバは自分が偉くなつたつもりで叫んだ。

「いゝえ」とケトリングは悲しげに、「私は又御暇せねばなりません、長い間」

ザグロバは不審げに彼を眺めて、「どうしてさう、失心こんでゐるのぢやな」

「參らなければなりませんからです」

「何處へ」

「蘇國に居る父の舊友と私の舊友から手紙が參りました。是非私が參らねばならぬ用事がありますので。多分長く懸りませう。お別れするのは殘念ですか、餘義ないものですから」

ザグロバは室の眞中へ歩いて往つて、ミカエルの妹を眺めて、それから若い娘達を眺めて、「あれをお聽きか。父、御子、聖靈の名を以つて」と問ねた。

十六

ザグロバはケトリングが出立するといふので吃驚したが、これは變だと疳づかなかつた。ケトリング家は騷亂時代に英國の國王に大なる功績があつた。故にチャールス二世がそれを思ひ出して、ケトリング家の後裔を厚遇せんとするのかも知れぬ。チャールス王がさうせぬのは不思議な位である。それば かりか、ケトリングが海を越て來た手紙を見せたので、ザグロバは愈々以てさう信じた。この旅行でザグロバの計畫はがらりと當が外れた。將來のことを思へば、愕然たらざるを得ない。ミカエルはその手紙で言つて寄越したやうに、間もなく歸つて來るのである。

「曠原の風に彼の悲しみは遺りなく吹き飛されたらう」とザグロバは考へた。「今度戻つて來ると、往つた時よりも元氣があるに相違ない。戀の魔物にだん〳〵クリシアの方へ引寄せられてゐるので、直ちに結婚の申込をするだらう。さうすると、いや、さうすればクリシアは承諾する。あれほどの勇者にいやとは言ふまい。殊にマコヴエッキイ夫人とは兄弟だもの。すれば、私の可愛ゆく思ふ匈牙利兵は氷の上に置いてきぼりぢや」

けれどもザグロバは老人に有勝な頑固なので、どんな事をしてもバシアを小武士と配合せやうと決心した。ヤンの意見も又折々自分の心に起つて來る意見もこの決心を顚倒すに足りなかつた。時には最早何事にも干渉しまいと心に約束することもあつた。けれども知らず識らずこの二人を一緒にせねばおかぬといふ考想が一層力を增して戻つて來た。どうしたものかと思つて、幾日の間全くその手段方法ばかり講じた。深く考へ込んで、善い手段を見つけだすと、最早事の成就したやうに、「これは有

難い」と突然叫ぶのであつた。

然るに今やザグロバの計畫はがらり外れさうだ。最早どのやうに力を盡しても駄目だ。天命を待つばかりである。ケトリングが出立する前にクリシアに結婚の申込をしてくれたら可いのだが、そんな事は到底望まれさうもない。で、唯悲哀と好奇心から、ケトリングの出立の時と民政國を去る前にどうするつもりか、尋ねて見やうと決心した。

ケトリングを呼寄せて、ザグロバは非常に悲しさうな顔をして言つた。「困つた事になつたな。誰でも爲すべき義務は能く知つてゐるぢやて、往きなさるなとは申しますまい。でも、歸つて來る積かどうかお問ねしても宜しからう」

「あちらへ往つて、どんな事が待つてゐるのか解りません」とケトリングが答へた。「どんな問題、どんな變事があるのやら。で、出來れば、直き歸つて參ります。止むを得ませんければ、あちらに留まるつもりです」

「貴君は我々が戀しくなつて、引戻されませうわい」

「私の死に場所は、凡てを私に與へたこの國の外には御座いません」

「それはさうとも。他の國では外國人を繼子扱にするが、わが母國では貴君を腕を擴げて歡迎して、自國人同樣に愛養したのぢやもの」

「實際です、全くその通りです。若し私に唯――出來たら。この國で何事も私に許されたが、幸福だけは許されませんでした」

「それだから、『永住して、結婚なされ』と言つたのぢや。でも、貴君は聽きなさらぬ。結婚してからなら、往つても又還つて來たくなりまさあ。妻を荒浪にもませずに殘して往くならばぢや。でも今度還つて來られやうとは、私に想へない。私の忠告を用ひられないから、どうも仕方がない」

恁う言つてザグロバはケトリングの顏をしげ〳〵見詰めて、何か纏つた辯解を聽うとしたが、ケトリングは默つて、首を打垂れて、床を見詰てゐた。

「どうです、御返事は」とザグロバは暫くして言つた。

「御忠告に從ふ機會がありませんでした」と若き武士はそろ〳〵と答へた。

ザグロバは室の中を歩き出して、ケトリングの前に立留つて、兩手を背後で結んで、「でも、機會はあつた筈ぢや。貴君に機會がなかつたなら、今日から私は身體に帶を占めませんわい。クリシアは貴君に惚れてゐるよ」

「私とは海山を隔つても、あの孃さんは獨りでをられませう」

「どういふ譯かな、それは」

「いえ、何でもありません、何でも」